仙台市文化財調査報告書第263集

宮城県仙台市

郡山遺跡 23

―― 平成14年度発掘調査概報 ――

2003. 3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第263集

宮城県仙台市

郡山遺跡 23

―― 平成14年度発掘調査概報 ――

2003. 3

仙台市教育委員会

148次　SI2048出土遺物
C－917・C－918
C－927・C－920・C－921・C－933
C－924・C－922・C－925・C－923
（C－917　甑・C－918　甕・C－933　埦
C－920～925、927　坏）

148次　方四町Ⅱ期官衙北辺材木列（SA616）断面

序　　文

郡山遺跡の本年度の発掘調査事業は第５次５ヵ年計画の３年次にあたり、主に郡山廃寺南部を対象に調査を実施しました。その結果、寺院に関わる建物跡と南辺の塀跡（材木列）を発見することができましたが、まだ寺院の中枢伽藍を区画する廻廊や築地を発見するには至っておりません。また「仙台平野の遺跡群」で実施した個人住宅の建築に対応した調査においては、想定された方四町Ⅱ期官衙の北辺の他にⅠ期官衙の塀跡（材木列）やそれ以前に遡る竪穴住居跡が発見され、竪穴住居跡からは関東地方の人々との関わりを想起させるような貴重な土器類が出土しました。個人住宅地の小規模な調査においても予想を超える重要な成果をあげることができました。国庫補助事業による継続的な発掘調査を開始してから23年が経過しておりますが、その間大地に埋もれていた謎の歴史が次々と明らかにされてきました。

本書は平成14年度の発掘調査成果の概要をまとめたものです。国や教育委員会及び全国の研究機関などにおける飛鳥時代から奈良時代にかけての歴史の解明に資したいと思います。本書の記載は、調査報告の性格上専門用語を使用せざるを得ないことから、今後は、市民の皆様にもわかりやすい周知方法を検討したいと思っております。

今後、郡山遺跡の発掘調査が進み、調査結果の広報などを通して全国的な評価がさらに高まり、仙台市及び郡山地区のまちづくりに大きく貢献できるよう努めてまいりたいと思います。

平成15年３月

仙台市教育委員会
教育長　阿　部　芳　吉

例　　言

1．本書は郡山遺跡の平成14度範囲確認調査の概報である。

2．本調査は国庫補助事業である。

3．本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆　長島榮一　Ⅲ、Ⅳ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ

松本知彦　Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅷ

遺構トレース　菅井百合子、岡まり子、石垣美佐江、大友浩美、小村田紀子

遺物実測　伊勢多賀子、大友広美、黒田照子、小林広和

遺物トレース　菅井、岡、大友（浩）、小村田、石垣

遺構写真撮影　長島、松本

遺物写真撮影　長島

遺物補修復元　赤井沢千代子、三浦千賀子

図版作成　長島、松本、菅井、吉田りつ子、岡

写真図版作成　長島、松本

編集は長島がこれにあたった。

4．遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置した№1原点（X＝0、Y＝0）とし、高さは標高値で記した。

5．文中で記した方位角は真北線を基準としている。

6．遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

SA	柱列などの塀跡	SE	井戸跡	SX	その他の遺構
SB	建物跡	SI	竪穴住居跡・竪穴遺構	P	ピット・小柱穴
SD	溝跡	SK	土坑		

7．遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

A	縄文土器	F	丸瓦・軒丸瓦	K	石製品
B	弥生土器	G	平瓦・軒平瓦	L	木製品
C	土師器（ロクロ不使用）	H	鴟尾	N	金属製品
D	土師器（ロクロ使用）	I	陶器	P	土製品
E	須恵器	J	磁器		

8．建物跡模式図中の記号は以下の基準により図示した。

●＝柱痕跡の検出されたもの

○＝掘り方のみ検出されたもの

◌＝他遺構との重複により検出されないもの

9．遺物実測図の網スクリーントーン張り込みは黒色処理を示している。

10．本概報の土色については「新版標準土色帳」（古山・佐藤：1970）を使用した。

11．本概報中の掘立柱建物跡の記載の中で「柱痕跡は21cmの円形で…」とあるものは、柱痕跡の直径が21cmの意である。

目　　次

序　文
例　言
Ⅰ　はじめに ……1
Ⅱ　調査計画と実績 ……2
Ⅲ　第145次発掘調査……4
　1．調査経過 ……4
　2．発見遺構・出土遺物 ……4
　3．まとめ ……4
Ⅳ　第146次発掘調査……6
　1．調査経過 ……6
　2．発見遺構・出土遺物 ……6
　3．まとめ……27
Ⅴ　第147次発掘調査 ……29
　1．調査経過……29
　2．発見遺構・出土遺物……29
　3．まとめ……30
Ⅵ　第148次発掘調査 ……32
　1．調査経過……32
　2．発見遺構・出土遺物……32
　3．まとめ……40
Ⅶ　第150次・第151次発掘調査……46
　1．調査経過と発見遺構・出土遺物……46
Ⅷ　総括……49
　調査成果の普及と関連活動……55

Ⅰ　はじめに

平成14年度は郡山遺跡範囲確認調査第５次５カ年の３年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体　　仙台市教育委員会

調査担当　　仙台市教育委員会生涯学習部文化財課

文化財課　　課長　青柳良文

管理係　　係長　高橋　泰

主事　藤井明美

整備活用係　　係長　田中則和

主査　木村浩二

主任　長島榮一

主事　長谷川隆二

文化財教諭　松本知彦

調査係　　係長　篠原信彦

主査　渡部弘美

主任　渡部　紀

主事　工藤信一郎

文化財教諭　宮内　周

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委 員 長　　工藤雅樹（福島大学行政社会学部教授　考古学）

副委員長　　今泉隆雄（東北大学文学部教授　古代史）

岡田茂弘（東北歴史博物館館長　考古学）

進藤秋輝（東北歴史博物館副館長　考古学）

桑原滋郎（前宮城県考古学会会長　考古学）

須藤　隆（東北大学文学部教授　考古学）

宮本長二郎（東北芸術工科大学芸術学部教授　建築学）

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々から御教示をいただいた。

地権者　　星市男、庄子たか子、大友はる、矢口正史

調査参加者　赤井沢千代子、石垣美佐江、伊勢多賀子、伊藤貞子、大友広美、大友浩美、岡まり子、尾形陽子、日下啓子、黒田照子、小池房子、小林広和、小村田紀子、佐藤よし子、庄子範男、菅井百合子、鈴木由美、高橋ヨシ子、牧かね子、三浦市子、三浦千賀子、宮嶋都、鎗水芳子、依田光子、吉田りつ子、渡辺貞子

さらに下記の諸機関の方々から適切な御教示をいただいた。

国立歴史民俗博物館教授　阿部義平、奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部　安田龍太郎、松村恵司、西口壽生、東北学院大学教授　佐川正敏、東北芸術工科大学助教授　北野博司、講師　村木志伸、徳島文理大学教授　石野博信、岡山理科大学教授　亀田修一、横浜歴史博物館　平野卓治、栃木県国分寺町教育委員会　木村友則、埼玉県鳩山町教育委員会　渡辺一、広島県府中市教育委員会　土井基司、道田賢志、宮城県教育庁文化財保護課　村田晃一、多賀城跡調査研究所　佐藤則之、仙台市博物館　佐藤洋

Ⅱ　調査計画と実績

平成14年度の発掘調査は、郡山遺跡発掘調査の第５次５カ年計画における第３年次目にあたる。第５次５カ年計画では、以下５項目の達成を目標にしている。

⑴　Ⅱ期官衙中枢部の構造の解明

⑵　郡山廃寺の内部構造の解明

⑶　Ⅰ期官衙の構造と変遷の解明

⑷　南方官衙の範囲と性格の解明

⑸　郡山遺跡調査成果概要書の作成　などである。

これらは平成11年度郡山遺跡調査指導委員会で審議し、了承されたものである。詳細は「仙台市文化財調査報告書第250集郡山遺跡21」Ⅰ２を参照していただきたい。これにより今年度は「⑵郡山廃寺の内部構造の解明」を主目的として、これまでと同様に国庫補助事業である『市内遺跡発掘調査』で発掘調査を実施することにした。発掘調査は、昨年度より仙台城跡の主要遺構の遺存状況を把握するための発掘調査も含め、総経費3800万円、国庫補助金額1900万円の予算で計画した。またこれまで個人住宅などの小規模開発に伴う発掘調査は「仙台平野の遺跡群」として実施してきたが、今年度も該当する発掘調査が必要になったときには同様に対応することとした。したがって総経費3800万円を郡山遺跡発掘調査に2000万円、仙台城跡に1300万円、仙台平野の遺跡群として500万円という配分にした。これにより郡山遺跡発掘調査については、以下のような実施計画を立案した。

表１　発掘調査計画表

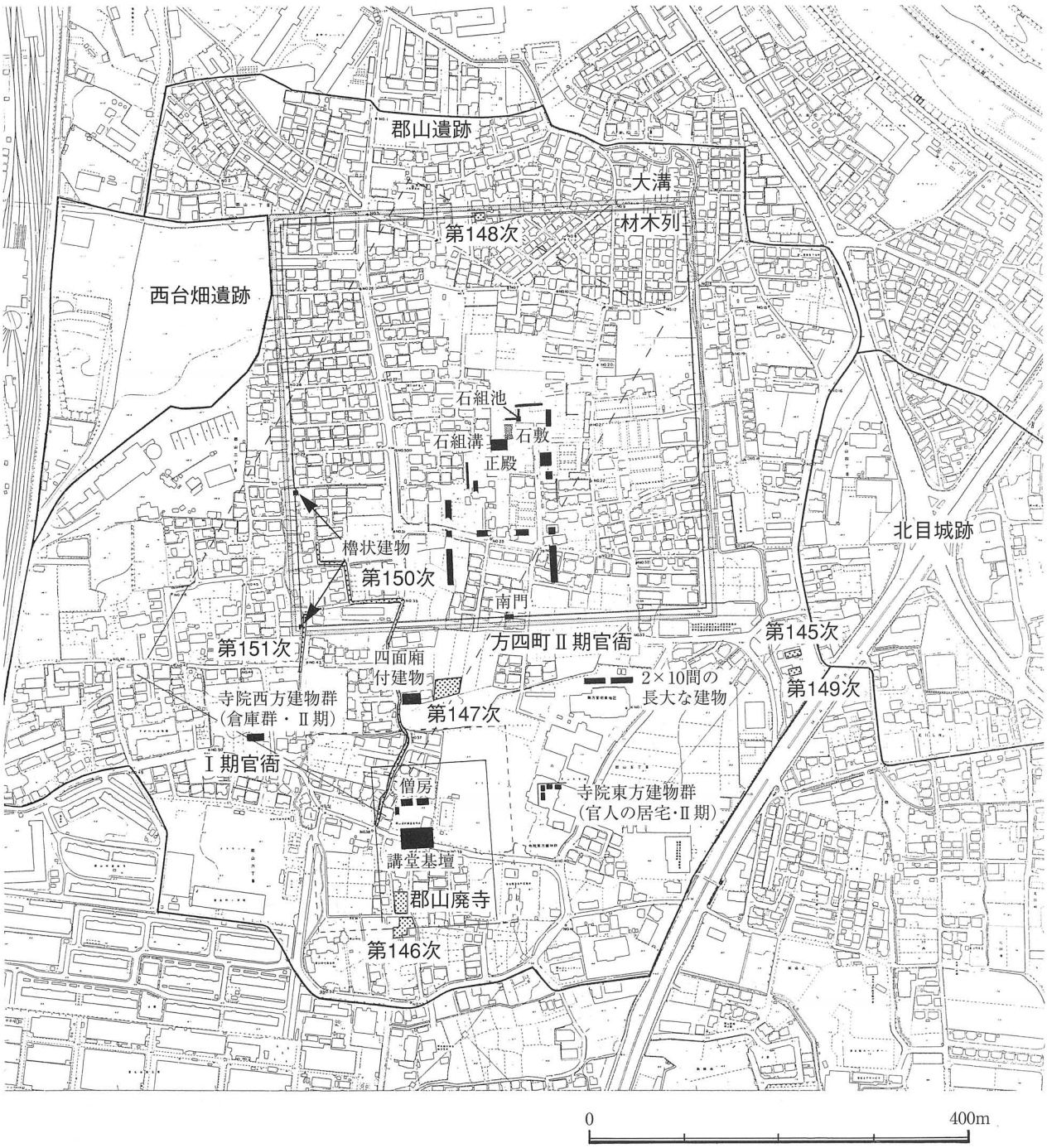
調査次数	調　査　地　区	調査予定面積	調査予定期間	調　査　原　因
第146次	郡山廃寺南部	1,000㎡	５月～11月	範囲確認調査

４月以降、共同住宅建築や水道管埋設工事ならびに個人住宅の建築等で、５箇所の調査が必要となった。よって年度当初から予定されていた第146次調査、共同住宅建築に伴う事前調査として第149次調査、個人住宅の建築に伴い調査の必要となった第145次、第148次、水道管埋設工事に伴う立会い調査として第150次調査の６箇所を以下のとおりに実施した。

表２　発掘調査実績表

調査次数	調　査　地　区	調査面積	調　査　期　間	調査原因	対　　応
第145次	遺跡内東部	50㎡	４月17日～４月19日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
第146次	郡山廃寺南部	450㎡	５月14日～12月６日	範囲確認調査	郡山遺跡発掘調査
第147次	南方官衙西地区	470㎡	９月24日～12月13日	範囲確認調査	郡山遺跡発掘調査
第148次	方四町Ⅱ期官衙北辺	72㎡	10月３日～10月31日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
第149次	遺跡内東部	57㎡	９月９日	共同住宅建築	開発に伴う事前調査
第150次	遺跡内南部	20㎡	９月10日～11月13日	水道管埋設工事	〃
第151次	方四町Ⅱ期官衙南西コーナー	20㎡	３月３日～３月５日	用水路改修工事	〃

これらの調査のうち第146次調査は1,000㎡の調査面積を予定していたが、地権者の土地利用の実情を考慮し調査範囲を縮小して実施した。また、仙台城跡本丸大広間跡付近の発掘調査について、その位置を確定するために当初予定した調査区を拡張することとなったこと、また旧石器発掘捏造問題に関連し、後期及び中期旧石器を確認する



第１図　郡山遺跡全体図

ために山田上ノ台遺跡の発掘調査が必要となったため、それに伴い予算計画も年度途中で一部変更した。仙台城跡の発掘調査に3,005,660円、山田上ノ台遺跡の発掘調査に900万円の予算の増額ならびに配分をした。したがって総経費50,005,660円となっている。なお今回「仙台平野の遺跡群」として調査した第145次、第149次調査は郡山遺跡内の調査であるため、報告は本書に含め報告することにし、「仙台平野の遺跡群」としての報告は単独で刊行はしないことにした。よって本事業の報告は「仙台市文化財調査報告書第263集郡山遺跡23－平成14年度発掘調査概報－」、「仙台文化財調査報告書第264集仙台城跡Ⅱ」「仙台文化財調査報告書第265集山田上ノ台遺跡」の３書がある。

Ⅲ　第145次発掘調査

１．調査経過

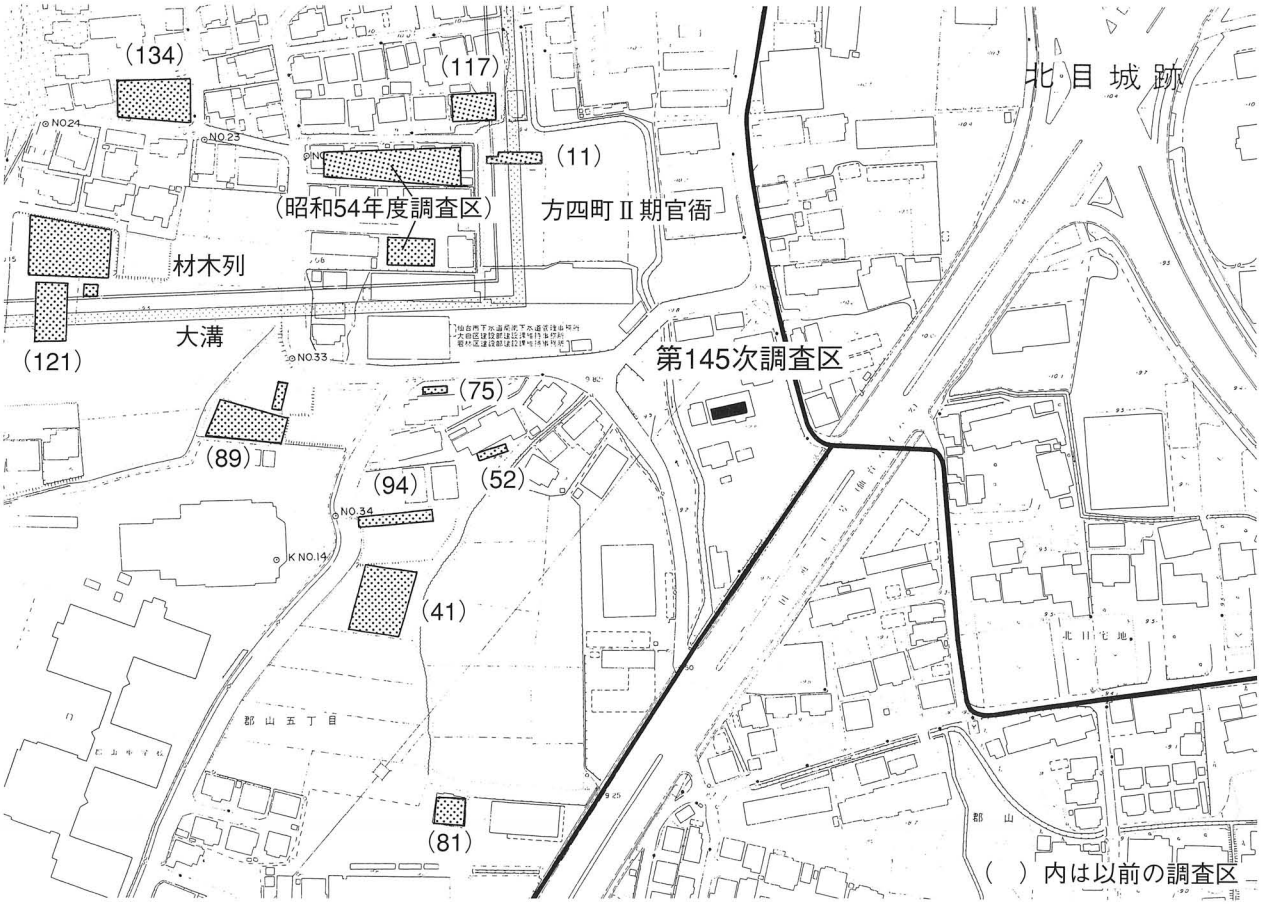
第145次調査は、仙台市太白区郡山４丁目14－13星市男氏より、同地内の郡山４丁目206－２において住宅新築に伴う発掘届が、平成14年４月１日付けで提出されたことにより実施した。住宅の基礎が遺構の検出面より深く、遺構を損なうため発掘調査を実施した。調査は住宅の建つ部分を対象に東西14m、南北3.5mの調査区を設定し、平成14年４月17日に表土排除を実施した。現況より深さ0.6m程の第Ⅲ層上面で遺構を検出した。発見された遺構数が極めて少なかったため、調査は平成14年４月19日に終了した。

２．発見遺構・出土遺物

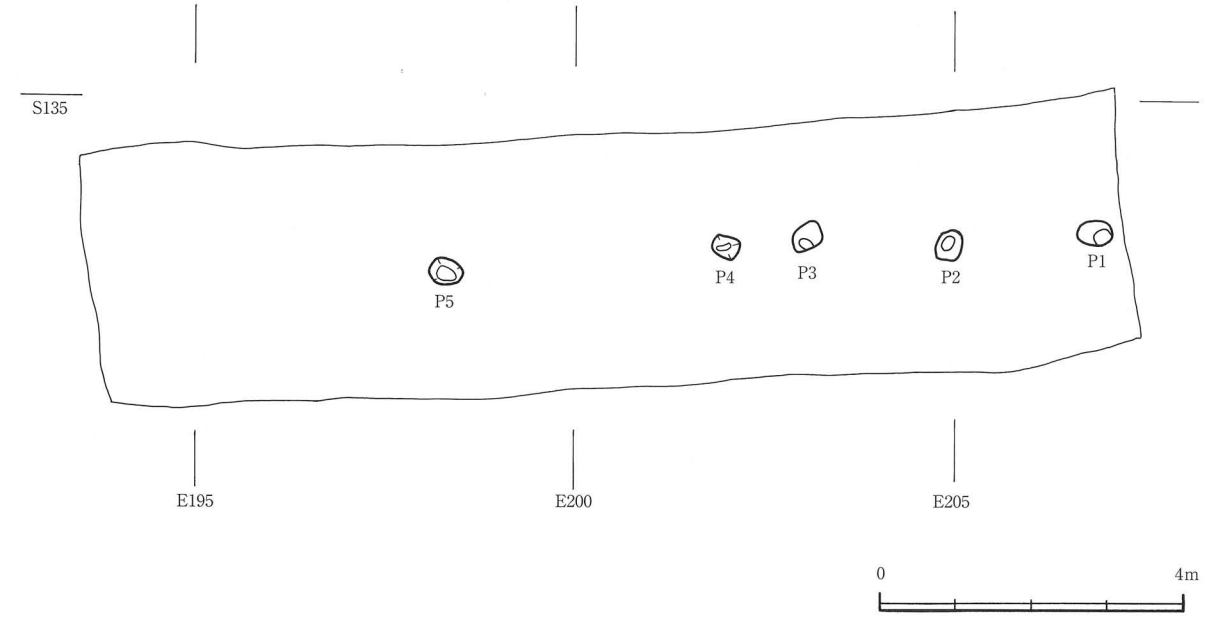
今回の調査で発見された遺構は、ピットが５である。これらのうちＰ２、Ｐ３は直径10～20cm程の柱痕跡が確認された。またＰ１についてもその可能性がある。Ｐ４の底面からは扁平な河原石が１点出土した。これらの遺構は基本層位第Ⅲ層上面で検出されているが、第Ⅲ層中からも少量の須恵器片が出土していることから官衙の置かれた古代の遺構ではないと見られる。下層の第Ⅳ層上面でも遺構の検出作業を行なったが遺構は検出されなかった。

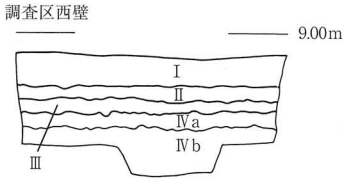
３．まとめ

調査を実施した地点は、方四町Ⅱ期官衙の南東隅から120m程離れた地点である。西側の水田面との比高差が0.8m程あり、土地利用の形態も違っている。東には中近世にかけての平城である北目城跡もあることから、これまでの調査による基本層位や遺構の検出状況が異なっているのであろう。官衙の時期の遺構は発見されなかった。



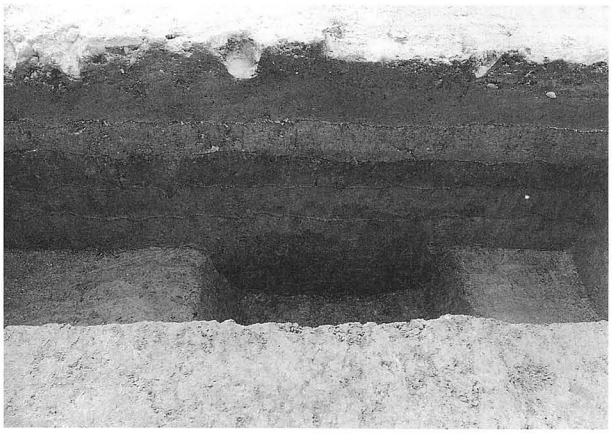
第２図　第145次調査区位置図





遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
西壁				
基本層位	Ⅰ	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	表土
	Ⅱ	10YR6/2　灰黄褐色	粘　土	酸化鉄を多量に含む
	Ⅲ	10YR4/2　灰黄褐色	粘　土	遺構検出面
	Ⅳa	10YR4/1　褐灰色	粘　土	
	Ⅳb	10YR6/3　にぶい黄橙色	粘　土	マンガンを部分的に含む

第３図　第145次調査区　平・断面図



1　第145次調査区　西壁断面

2　第145次調査区全景ー第Ⅲ層上面ー（西より）

Ⅳ　第146次発掘調査

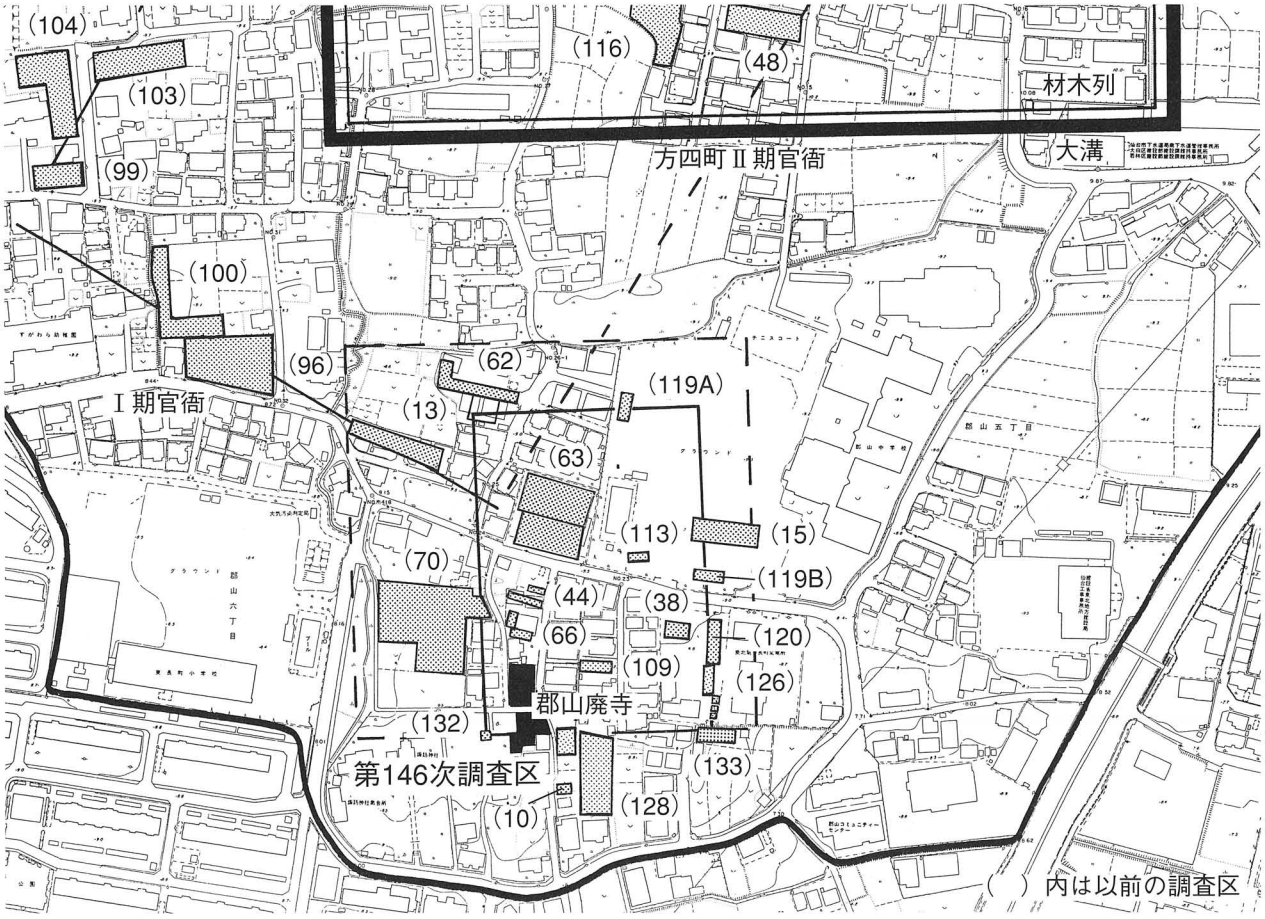
1．調査経過

第146次調査区は郡山廃寺南部に位置する。この地点は昭和56年度の第12次調査で発見した講堂基壇と平成11年度の第128次調査で発見した南門跡との間にあたる。ここは多賀城廃寺や大宰府の付属寺院である観世音寺の遺構配置を見ると、廻廊や築地などで金堂や塔を囲む寺院内でも最も重要な地区の南端が含まれると考えられる。郡山廃寺でも同様な遺構配置が存在すると推定され、住宅地での制約の多い調査ではあるが、郡山廃寺の構造解明のためにこの地点で第146次調査を実施することにした。調査区は北からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区として現在の土地利用の形態に合わせて設定した。そのうちＢ区は昭和56年度に寺院南辺の確認を目的として調査した第10次調査区（Ａトレンチ）と重複している。この第10次調査ではＡ・Ｂトレンチを設定し、のちに寺院南辺となるSA1850材木列の南北を発掘調査し遺構の発見に至らなかった。また今回の調査ではＤ区とＣ区のベルト状に残した表土直下からSA1850材木列が発見されたため、調査中に撤去し、Ｄ・Ｃ区は一連のトレンチ形態をなしている。

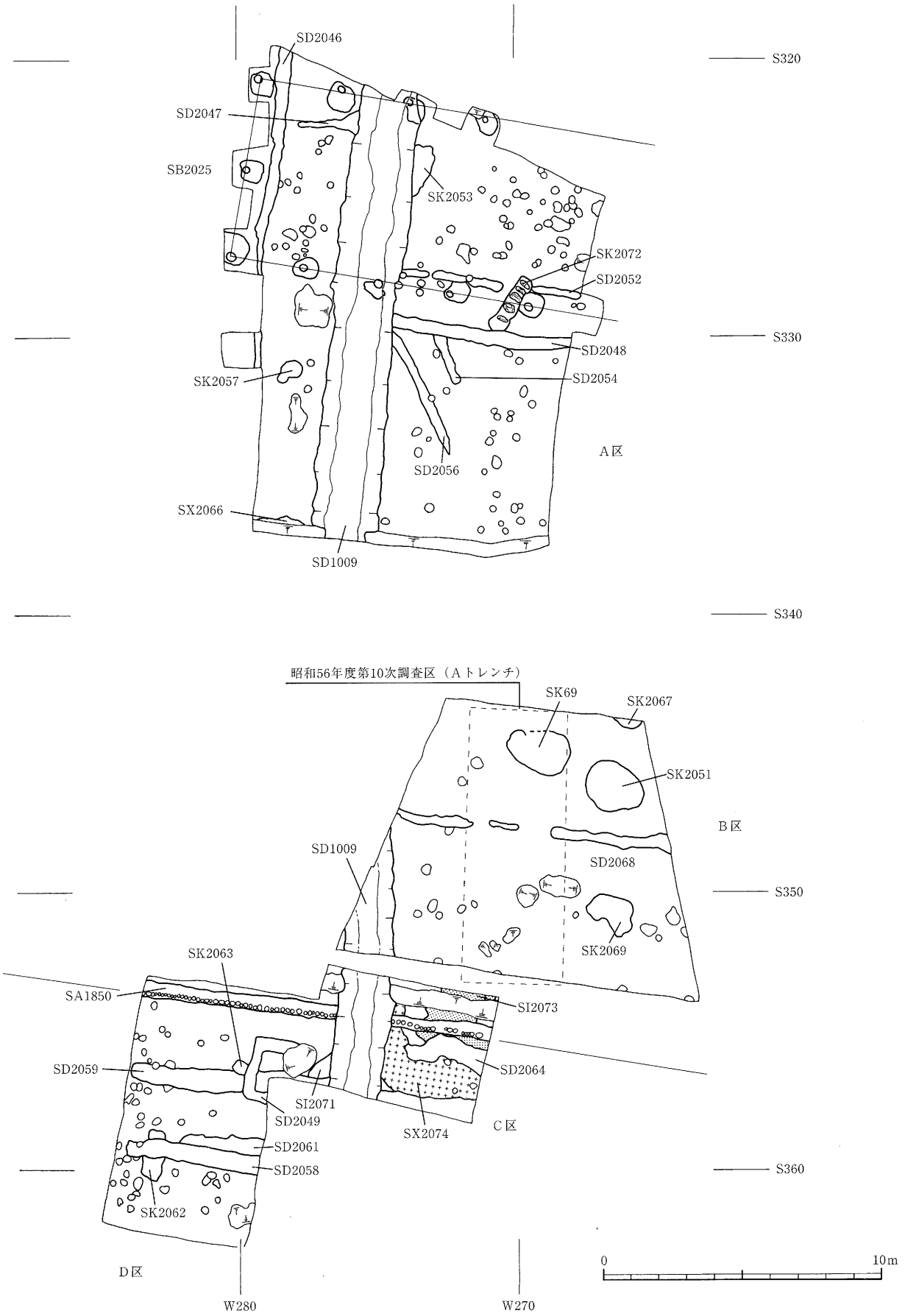
調査は５月当初から準備に入り、平成14年５月16日から表土排除を開始した。Ａ区の寺院中枢を区画する遺構が存在することが想定された位置からは柱穴が列をなして発見されたが、精査の結果建物跡となった。Ｃ・Ｄ区からは第128次調査で発見したSA1850材木列の西への延長部を発見した。平成14年11月11日まで発掘調査を行い、整地作業を含め終了したのは12月６日である。

2．発見遺構・出土遺物

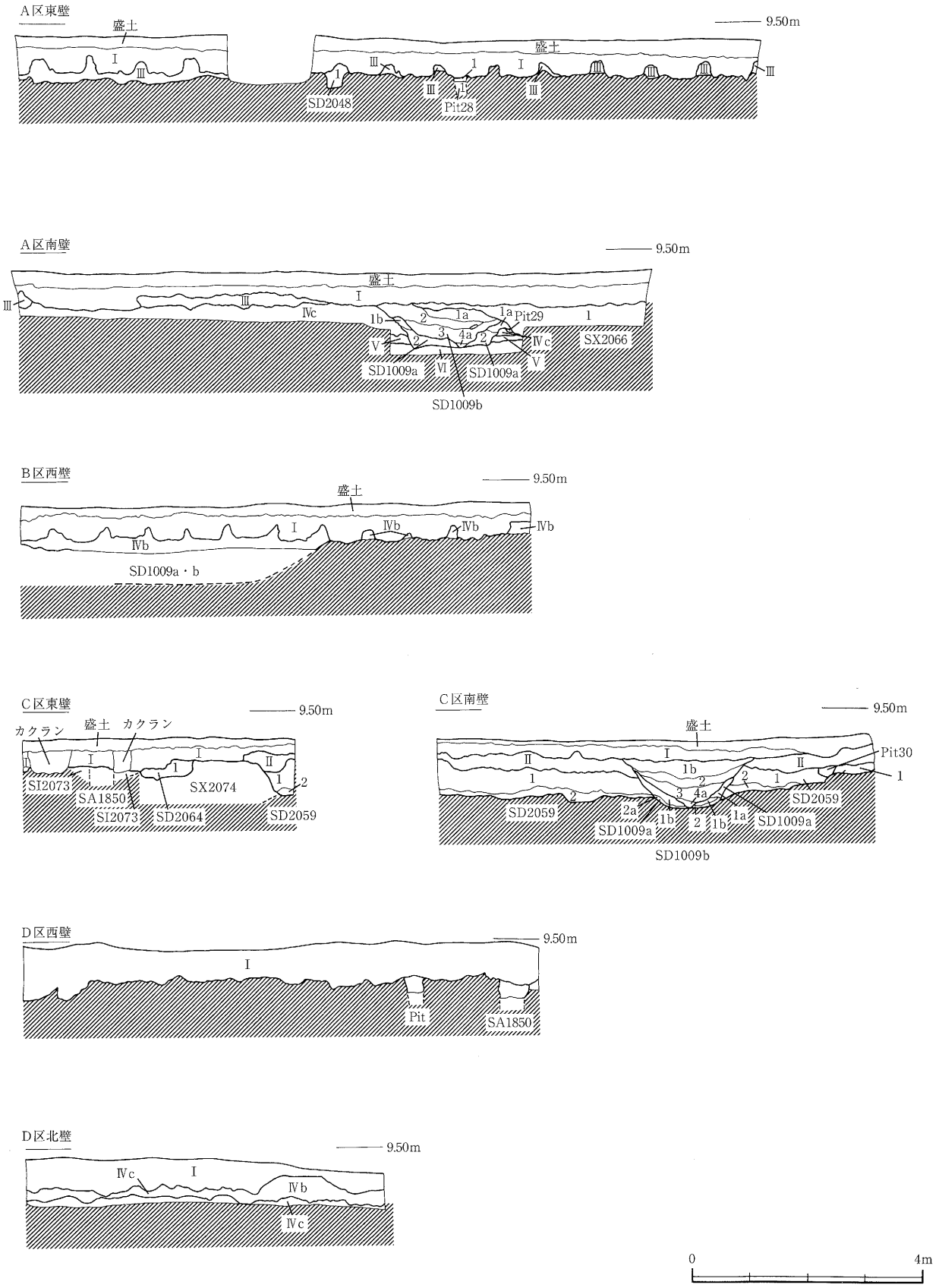
今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡１棟、材木列１列、溝跡13条、竪穴住居跡２軒、土坑９基、性格



第４図　第146次調査区位置図



第５図　第146次調査区遺構配置図（1/200）



第６図　第146次調査区断面図（1/100）

第146次観察表

遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
基本層位	Ⅰa	10YR3/2　黒褐色	シルト	現耕作土
	Ⅰb	10YR3/3　暗褐色	シルト	天地返し
	Ⅱ	10YR2/1　黒色	シルト	旧耕作土
	Ⅲa	10YR2/2　黒褐色	シルト	褐色シルトを含む
	Ⅲb	10YR3/3　暗褐色	シルト	黒褐色シルトを含む
	Ⅳa	10YR3/4　暗褐色	シルト	黒褐色土を含む
	Ⅳb	10YR4/6　褐色	砂質シルト	黒褐色土を含む（B区以南）
	Ⅳc	10YR4/6　褐色	砂質シルト	砂質が強い
	Ⅳd	10YR6/8　明黄褐色	粘　土	
	Ⅴ	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘　土	石器出土（A区南端）
	Ⅵ	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質粘土	砂質が強い
A区東壁				
SD2048	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	全体に小ブロックで火山灰を含む。上層には炭粒を含む
Pit28	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	褐色土を含む
A・C区南壁				
SD1009a	1a	10YR4/1　褐灰色	シルト	褐色砂を小ブロックで含む
	1b	10YR3/1　黒褐色	シルト	褐色砂を小ブロックで含む
	2a	10YR4/1　褐灰色	粘　土	褐色砂との互層となり、数次の堆積が認められる
	2b	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂	
	2c	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘　土	
SD1009b	1a	10YR4/6　褐色	砂質シルト	黒褐色土をブロックで含む
	1b	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	黒褐色土をブロックで含む
	2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	
	3a	10YR4/1　褐灰色	粘　土	
	3c	10YR3/1　黒褐色	砂質粘土	混合層
		10YR4/6　褐色		
	4a	10YR7/6　明黄褐色	粘　土	底面に酸化鉄が集積
	4b	10YR4/1　褐灰色	粘　土	全体に酸化鉄を含み、底部には白色粘土を含む。円面硯出土（C区）
SX2066	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	
Pit29	1	10YR3/2　黒褐色	砂質シルト	Ⅲb層を含む
C区東壁				
SI2073	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	貼り床
SA1850	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	白色粘土を小ブロックで含む
SD2059	1	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	褐色土、褐灰色土を小ブロックで含む
	2	10YR6/6　明黄褐色	粘　土	黒褐色粘土を含む
SD2064	1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	褐色土をブロックで含む
SX2074	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	
	2	10YR4/4　褐色	シルト	暗褐色土を含む
	3	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	褐色粘土を細かく含む
C区南壁				
Pit30	1	10YR3/2　黒褐色	粘　土	褐色土、褐灰色土を小ブロックで含む
D区西壁				
SA1850	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	白色粘土を小ブロックで含む

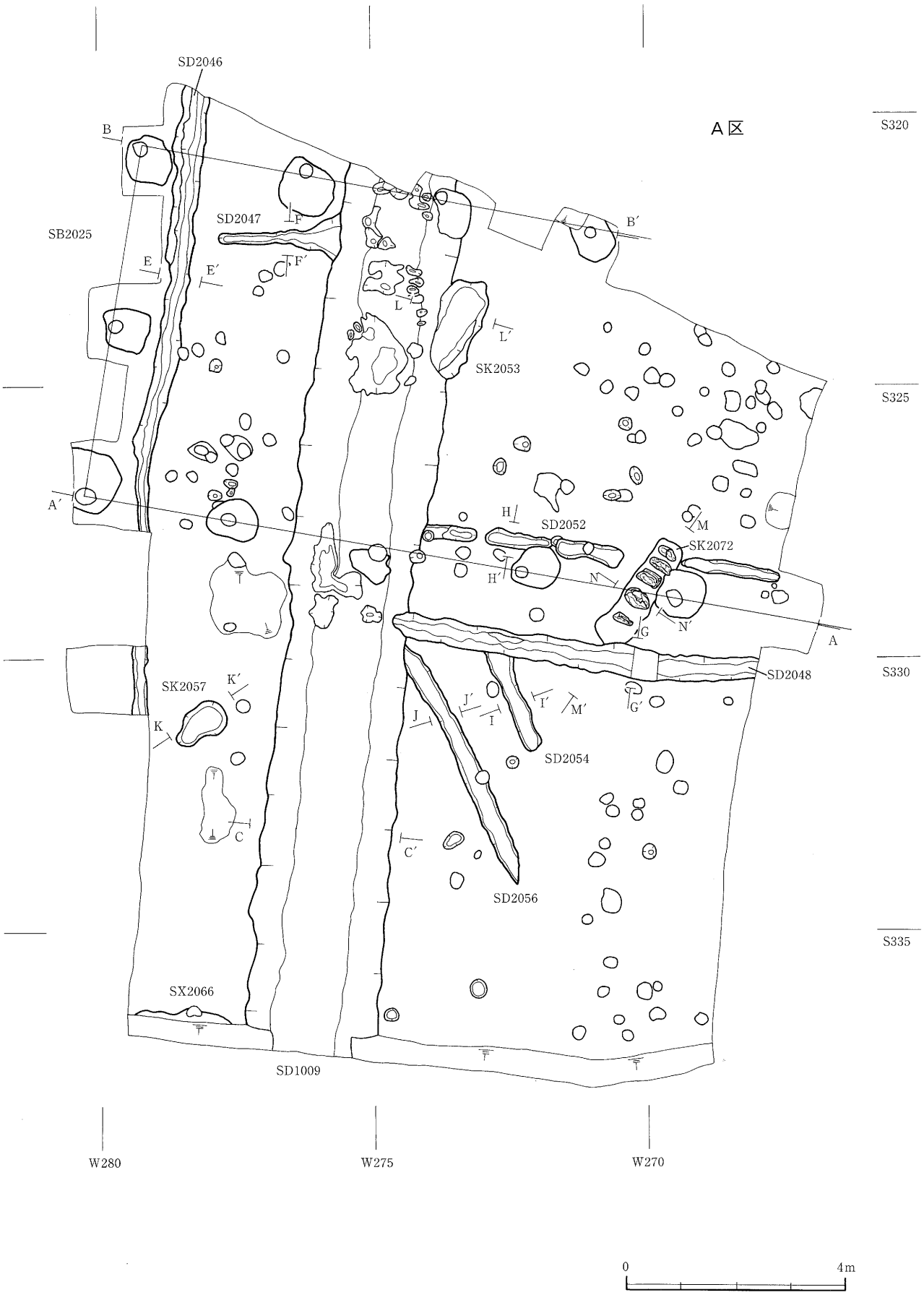
不明遺構２基、ピットなどである。これらの遺構は基本層位第Ⅳ層上面で検出されているが、調査区の壁断面における検討の結果、SD1009a・b溝跡のみは第Ⅲ層上面より掘り込まれた遺構であることを確認した。

SB2025掘立柱建物跡　梁行２間（総長6.5m、柱間寸法320～330cm）、桁行５間以上（総長10.8m以上、柱間寸法250～280cm）の東西棟の掘立柱建物跡である。方向は南桁行でＥ－３°－Ｓである。柱穴は一辺70～110cm程の隅丸方形で、柱痕跡は20～30cmの円形または楕円形である。柱穴には抜き取り穴が認められず、柱痕跡中に炭化物・焼土が含まれていることから建物が焼失したものと考えられる。

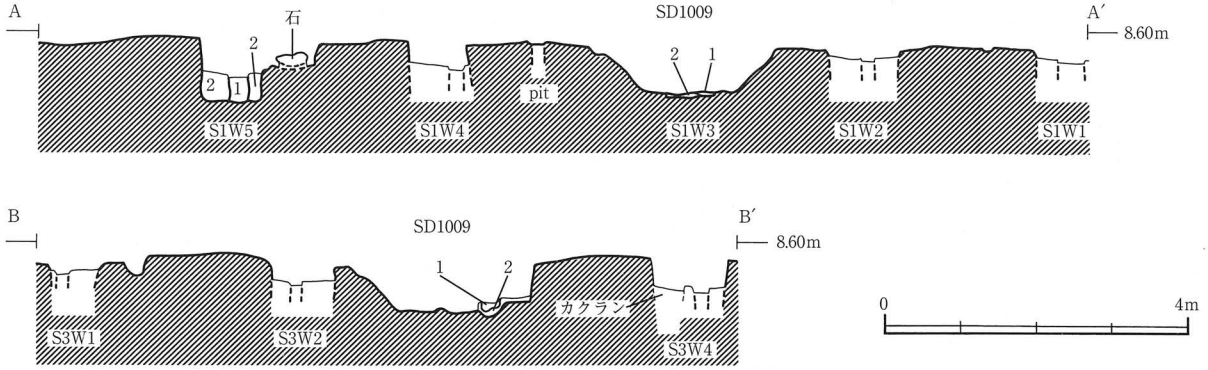
遺物は掘り方中ではS1W4から凸面に縄叩きののち擦り消し、凹面には縄叩きで箍（たが）状の痕跡のある平瓦Ｇ－116（第14図14）が、土師器の小片とともに出土している。また同様にS1W5、S2W1、S3W2、S3W4よりは瓦の小片が出土している。S1W3、S2W1を除き各柱穴掘り方よりは土師器の小片が少量出土している。柱痕跡ではS3W2の最上層よりロクロ使用の土師器で回転糸切り無調整の底部片が出土し、S3W1からもロクロ使用の土師器小片が、S1W5からは瓦の小片が出土している。またS1W2、S1W3、S3W4の柱痕跡からも土師器の小片が少量出土している。

SD2052溝跡、SK2072土坑、SX2074を切り、SD1009溝跡に切られている。

SD1009a・b溝跡　調査区を南北に縦断する溝跡である。北に隣接する昭和61年度の第66次調査で検出したSD1009溝跡の南への延長部分と考えられる。上幅200～250cm、底面幅35～65cm、深さ70～80cm、断面形は逆台形の溝跡で、底面はおおむね平坦である。方向はＡ区付近の北部ではＮ－０°－Ｅであるが、Ｂ区付近の調査区南部

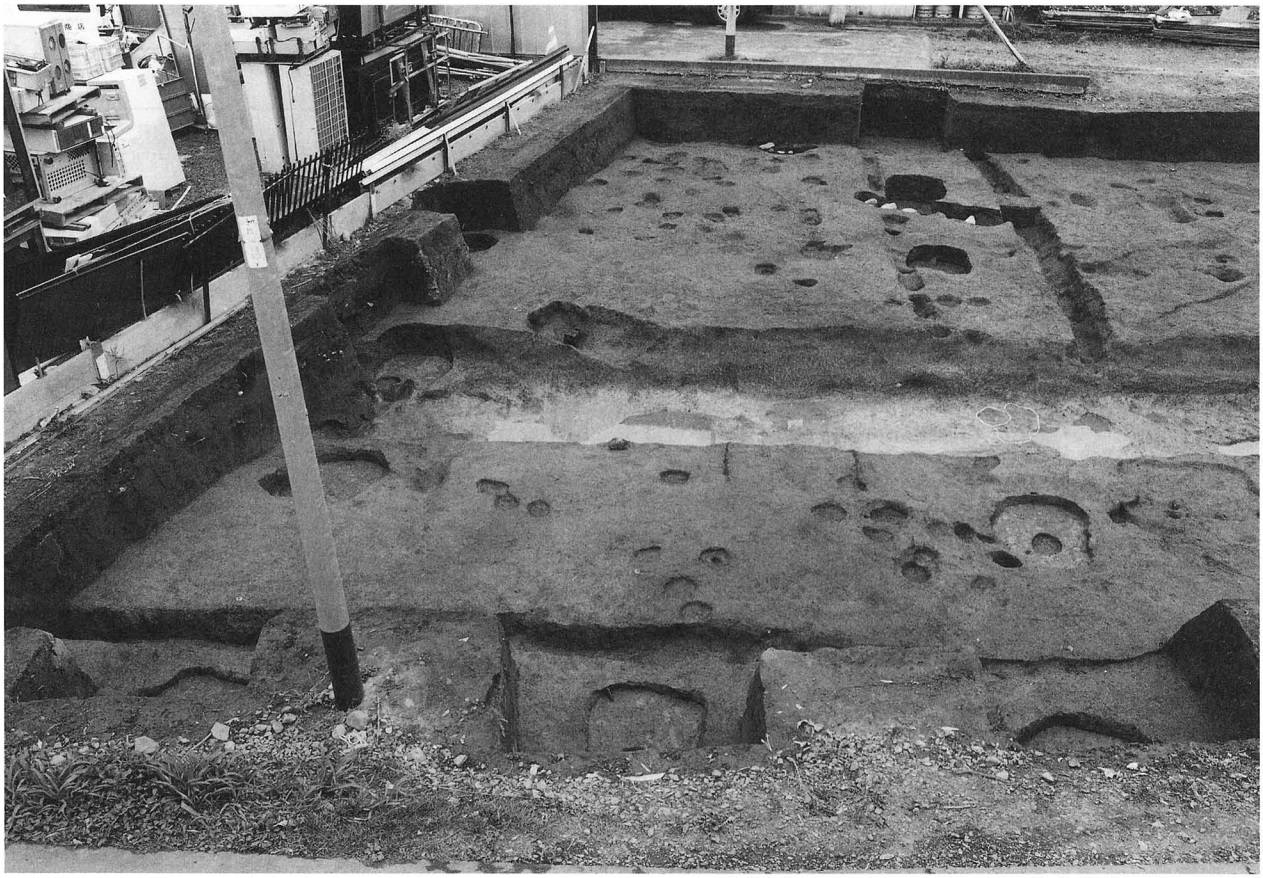


第７図　第146次調査Ａ区平面図（1/100）



遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
S1W5				
柱痕跡	1	10YR3/3　暗褐色	砂質粘土	
掘り方	2	10YR7/2　にぶい黄橙色	粘　土	混合層
		10YR2/2　黒褐色	粘　土	
		10YR4/4　褐色	砂質粘土	
S1W3				
柱痕跡	1	10YR5/2　灰黄褐色	粘　土	砂、黒褐色粘土を含む、２層より砂が多い
堀り方	2	10YR6/2　灰黄褐色	粘　土	砂、黒褐色粘土を含む
S3W3				
柱痕跡	1	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	白色土、炭化物を含む
堀り方	2	10YR7/3　にぶい黄褐色	粘　土	柱穴掘り方埋土、柱痕跡の下は砂質が強く粘土がきわめて少ない
		10YR4/4　褐色	砂	

第８図　SB2025南桁行断面図（1/100）



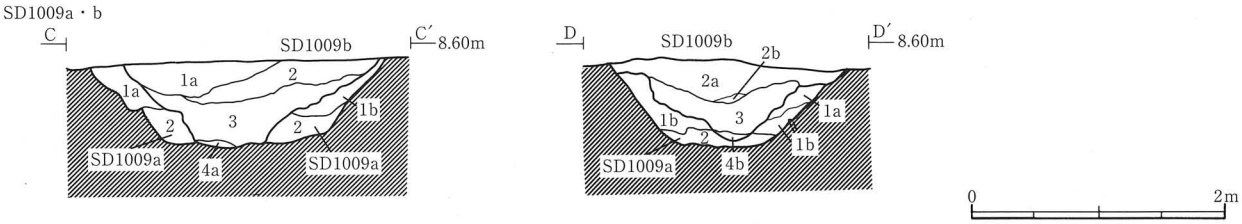
３　SB2025建物跡（西より）

4　北桁行柱穴（西より）

5　南桁行柱穴（西より）

ではN－5°－Wとなりやや蛇行気味となる。検出総長は約35mである。堆積土の観察から２時期（a→b）あると考えられる。

遺物はSD1009a溝跡の第１層からは小型の赤焼き土器D－83坏（第10図４）の他に、土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦の小片、陶器丸皿片が、第２層からも赤焼き土器、瓦片などが出土している。SD1009b溝跡からも第１層から小型の赤焼き土器D－84、87坏（第10図１、２）の他に土師器、赤焼き土器、瓦片、陶器Ⅰ－54埦または鉢の小片、第２層からは土師器高坏、須恵器甕片やそれらの小片、瓦片、陶器Ⅰ－53香炉、Ⅰ－57大鉢、Ⅰ－55皿、Ⅰ－56埦などが出土している（註１）。第３層からは小型の赤焼き土器D－86坏（第10図５）、D－91高台付坏（第10図６）、第４層からは十字型の透かしのあるE－476円面硯（第10図９）が、底面から赤焼き土器D－89坏（第10図７）が出土している。その他SD1009b溝跡の上層からはやや扁平な赤焼き土器D－90坏（第10図３）、これまで郡



遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
SD1009a	1a	10YR4/1　褐灰色	シルト	褐色砂を小ブロックで含む
	1b	10YR3/1　黒褐色	シルト	褐色砂を小ブロックで含む
	2	10YR4/1　褐灰色	粘　土	褐色砂との互層となり、数次の堆積が認められる
SD1009b	1a	10YR4/6　褐色	砂質シルト	黒褐色土をブロックで含む
	2a	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	
	2b	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	
	3	10YR4/1　褐灰色	粘　土	
	4a	10YR7/6　明黄褐色	粘　土	底面に酸化鉄が集積
	4b	10YR4/1　褐灰色	粘　土	酸化鉄を全体に含み、底部には白色粘土を含む

第９図　SD1009溝跡断面図（1/60）

図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	写真図版
				出土遺構	層位					
1	D－84	赤焼き土器	坏	SD1009b	1	口径12.2　器高3.5　底径5	口縁部～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		33
2	D－87	赤焼き土器	坏	SD1009b	1	口径12.2　器高3.2　底径5.2	口縁部～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		35
3	D－90	赤焼き土器	坏	SD1009b	1	口径12.8　器高3.05　底径4.9	口縁部～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		37
4	D－83	赤焼き土器	坏	SD1009a	1	口径6.4　器高3　底径5	口縁部～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		32
5	D－86	赤焼き土器	坏	SD1009b	3a	口径12.6　器高3.15　底径5	口縁部～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		34
6	D－91	赤焼き土器	高台付坏	SD1009a	1	口径12.5　器高4.8　底径8	口縁部～体部ロクロナデ、脚部ナデ 底部回転糸切り後、一部ナデ	ロクロナデ		38
7	D－89	赤焼き土器	坏	SD1009b	底面	口径11.6　器高3.6　底径4.8	口縁部～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		36
8	F－96	瓦	軒丸瓦	SD1009b					単弁蓮華文	44
9	E－476		円面硯	SD1009b	4	残存高3.5　底径（19.4）				39

第10図　SD1009遺構出土遺物

山廃寺から出土している単弁蓮華文軒丸瓦と同様な文様であるF－96軒丸瓦片（第10図８）やN－114、115鉄滓（写真40、41）などが出土している。

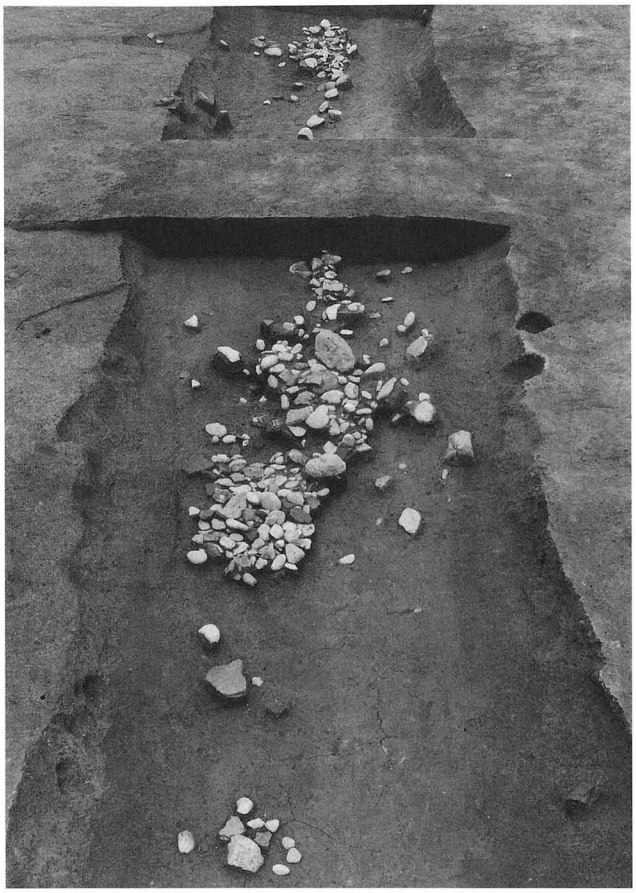
SA1850材木列、SB2025掘立柱建物跡、SD2047・2048・2056・2059溝跡、SI2071竪穴住居跡、SK2053土坑、SX2074性格不明遺構を切り、SX2066性格不明遺構に切られている。

SD2046溝跡　上幅20～55cm、底面幅10～20cm程、深さ20cm程で、断面形はおおむね逆台形の溝跡であるが北部では西壁中に段を持つ。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面は平坦である。方向は北部ではN－0°－E（真北方向）であるが、南部ではやや屈曲気味となる。検出した総長は11.5mである。堆積土は２層である。

遺物は第１層より頸部が「く」の字状の須恵器甕口縁部片、瓦片、第２層より平瓦片が10点出土している。

SD2047溝跡　上幅20～90cm程、底面幅10～55cm程、深さ３～10cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。東側はSD1009溝跡に向かって落ち込むような形状

6　SD1009溝跡（南より）



7　SD1009b溝跡　第２層上面（南より）

となっている。方向は北部ではＮ－７°－Ｗである。検出した総長は2.2ｍである。堆積土は１層である。遺物は出土していない。

SD1009溝跡に切られている。

SD2048溝跡　上幅24～55㎝、底面幅10～20㎝程、深さ30～45㎝程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦であるが鋤先状の痕跡の凹凸がある。方向は西部ではＥ－３°－Ｎであるが、東部ではＥ－７°－Ｎとなる。検出した総長は6.8ｍである。堆積土は１層である。

遺物は小型で底部の極めて小ぶりな赤焼き土器Ｄ－81坏（第14図５）、底部切り離し技法が回転糸切り無調整の須恵器Ｅ－474坏（第14図８）、Ｅ－475坏（第14図７）、平瓦片13点、丸瓦１点、その他の瓦片３点、多数の土師器、須恵器、赤焼き土器の小片が出土している。また底面よりは須恵器甕片が出土している。

SD2054溝跡、SK2072土坑を切り、SD1009溝跡に切られている。

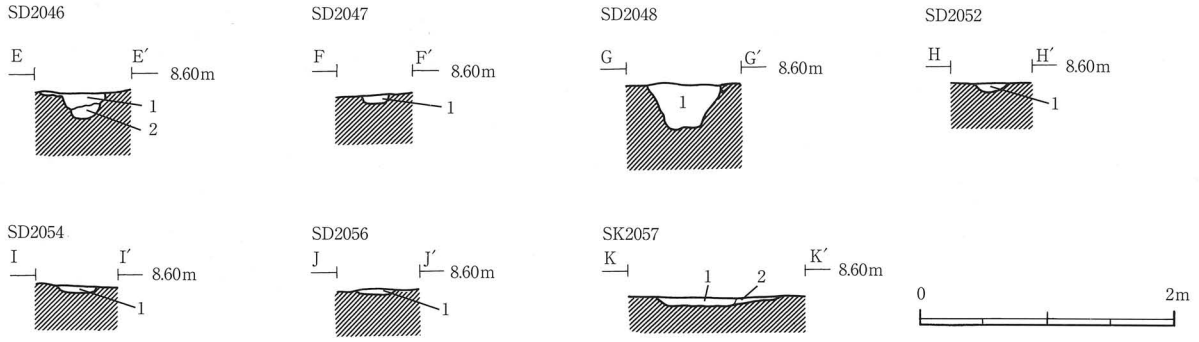
SD2052溝跡　上幅20～30㎝、底面幅10～20㎝程、深さ5㎝程で、断面形は逆台形の溝跡である。遺構の上部が削平されているため断続的な溝跡である。底面はおおむね平坦である。方向は西部ではＮ－１°－Ｅである。検出した総長は6.5ｍである。堆積土は1層である。

遺物は瓦片、土師器の小片が少量出土している。

SB2025掘立柱建物跡、SD1009溝跡に切られている。SK2072土坑との重複は確認されなかった。

SD2054溝跡　上幅25～40㎝、底面幅20～25㎝程、深さ５㎝程で、断面形は逆台形の溝跡である。遺構が削平されているため壁の立ち上がりの形状は明らかではない。底面はおおむね平坦である。方向は西部ではＮ－30°－Ｗである。検出した総長は２ｍである。堆積土は１層である。遺物は出土していない。

SD2048溝跡に切られている。



遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
SD2046　E－E′				
	1	10YR33　暗褐色	粘　土	
	2	7.5YR3/1　黒褐色	粘　土	
SD2047　F－F′				
	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	
SD2048　G－G′				
	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	
SD2052　H－H′				
	1	10YR6/6　明黄褐色	粘土質シルト	

遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
SD2054　I－I′				
	1	10YR6/6　明黄褐色	粘土質シルト	
SD2056　J－J′				
	1	10YR6/6　明黄褐色	粘土質シルト	
SK2057　K－K′				
	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘　土	
	2	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘　土	

第11図　第146次調査Ａ区溝跡・土坑断面図（1/60）

SD2056溝跡　上幅30～35cm、底面幅15～30cm程、深さ５cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。遺構が削平されているため壁の立ち上がりの形状は明らかではない。底面はおおむね平坦である。方向は西部ではＮ－31°－Ｗである。検出した総長は4.8mである。堆積土は１層である。

遺物は土師器の小片が１点出土している。

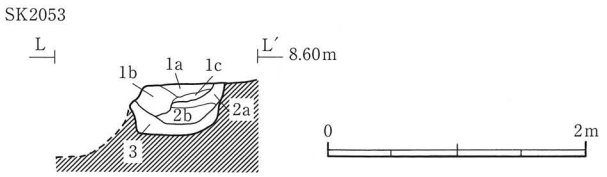
SD1009溝跡に切られている。

SK2053土坑　長軸170cm以上、短軸75cm程の楕円形の土坑と推定され、深さは40cm程である。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向は長軸でＮ－21°－Ｅである。埋土は３層である。

遺物は土坑の北部から金銅製のＮ－117・118耳環（第14図12、13）が15cm程離れて出土し（写真８）、底面よりは土師器の小片が１点出土した。なおこの検出時に直上から内外面が漆仕上げされたと見られる（註２）口縁部と体部の境に屈曲があり内外面ミガキ調整された土師器Ｃ－939坏（第14図11）が出土し（写真24）、この土坑に伴っていた可能性が高い。

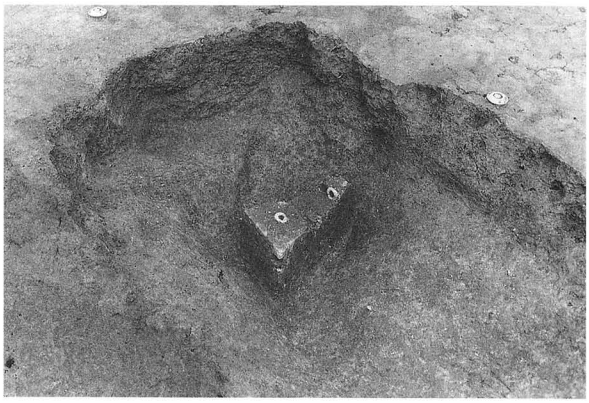
SD1009溝跡に切られる。

SK2057土坑　長軸100cm、短軸65cmのゆがんだ形状の土坑で、深さは７cm程である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。堆積土は２層である。遺物は出土しなかった。

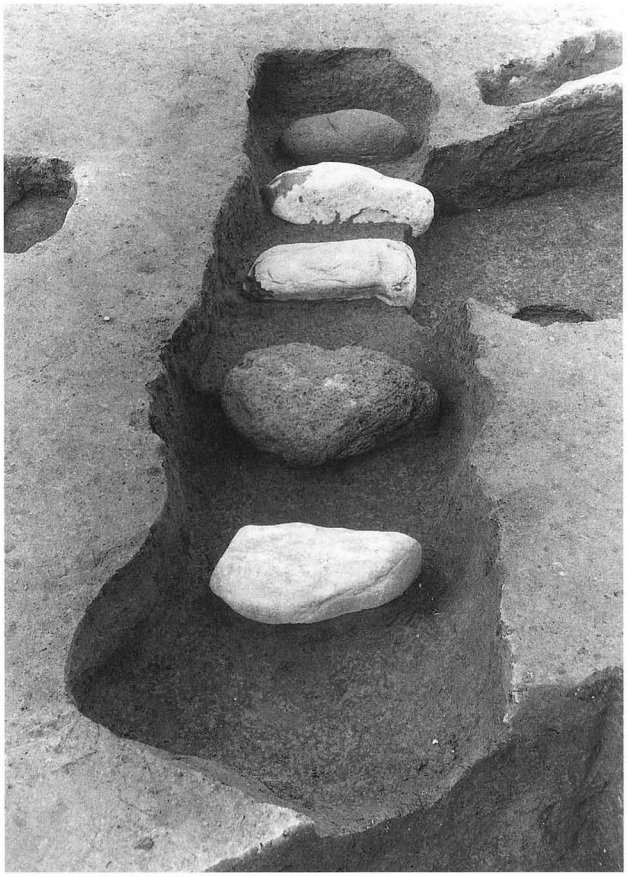


層位	土　色	土　性	備　考
SK2053　L－L′			
1a	10YR3/3　暗褐色	粘　土	明黄褐色粘土を少量含む
1b	10YR3/3　暗褐色	粘　土	明黄褐色粘土を多量に含む。耳環N－118出土
1c	10YR3/3　暗褐色	粘　土	明黄褐色粘土をブロック状に含む
2a	10YR2/3　黒褐色	粘　土	耳環N－117出土
2b	10YR2/3　黒褐色	粘　土	明黄褐色粘土を少量含む
3	10YR5/2　灰黄褐色	粘　土	砂、黒褐色土を含む

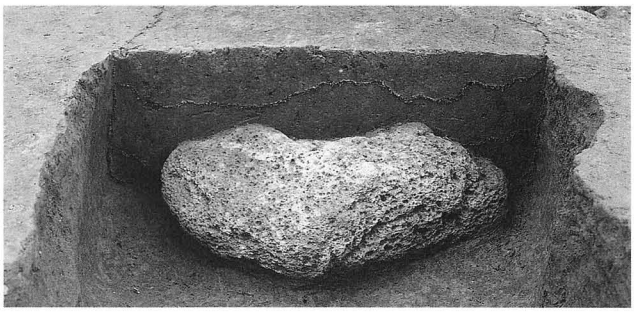
第12図　SK2053土坑断面図（1/60）



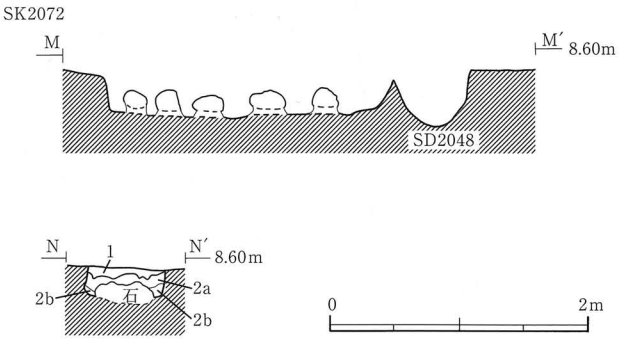
8　SK2053遺物出土状況



10　SK2072　全景（南より）



9　SK2072断面（南より）



層位	土　色	土 性	備　考
SK2072　N－N′			
1	10YR2/3　黒褐色	シルト	褐色土等の混合層
2a	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	
2b	10YR3/4　暗褐色	砂	地山と殆ど変わらない

第13図　SK2072土坑断面図（1/60）

SK2072土坑　長軸220cm程、短軸55～60cm程の隅丸長方形の土坑で、深さは25～30cmである。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向は長軸でN－26°－Eで、埋土は3層である。底面に人頭大の河原石5石が長辺を横にして並んで配置されている（写真10）。

遺物は第3層より土師器の小片が1点出土している。

SD2052溝跡を切り、SB2025掘立柱建物跡、SD2048溝跡に切られている。

SX2066性格不明遺構　調査区A区の南壁ぎわで遺構の一部を発見した。詳細については不明である。

遺物は土師器の小片が出土している。

SD1009溝跡を切る。

SA1850材木列　東西に延びる材木列であり、東に隣接する平成11年度の第128次調査で検出したSB1880門跡に取り付くSA1850材木列の延長部分と考えられる。方向はE－0°－S（真東西）である。上幅40～60cmで、抜き取りが施され、その下層より掘り方と直径10～15cmの柱痕跡が連続して検出された。検出した掘り方総長は約12.6mである。柱材の深さや材先端の形状は一定していない。

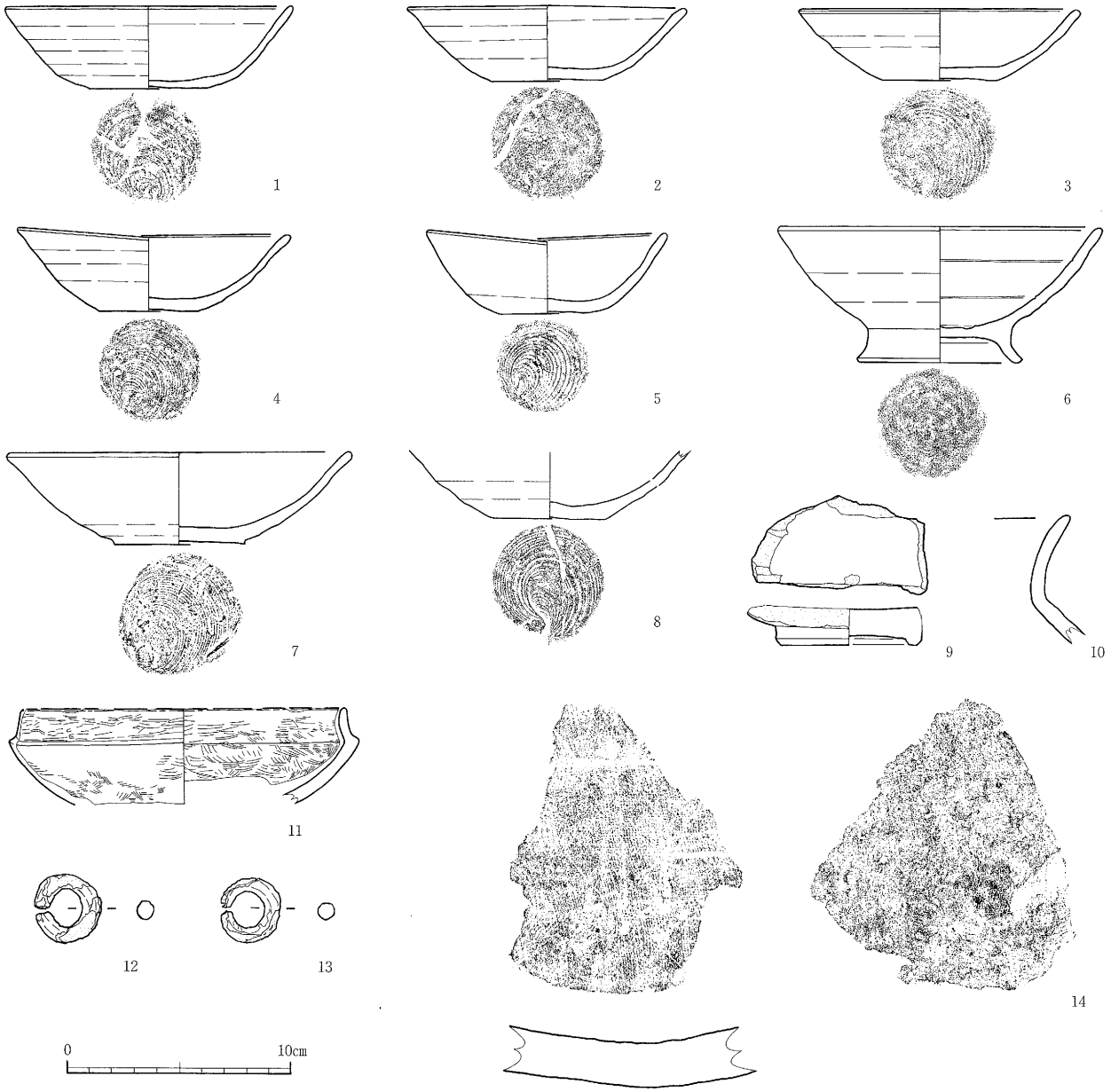
遺物は抜き取りより須恵器甕片、土師器の小片が少量出土している。

SI2073竪穴住居跡、SX2074性格不明遺構を切り、SD1009溝跡に切られている。

SD2049溝跡　平面形が逆「コ」の字型の溝跡である。上幅35～45cm、底面幅20～30cm程、深さ20～25cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。方向は西部ではN－9°－E、北部ではE－1°－Sとなる。

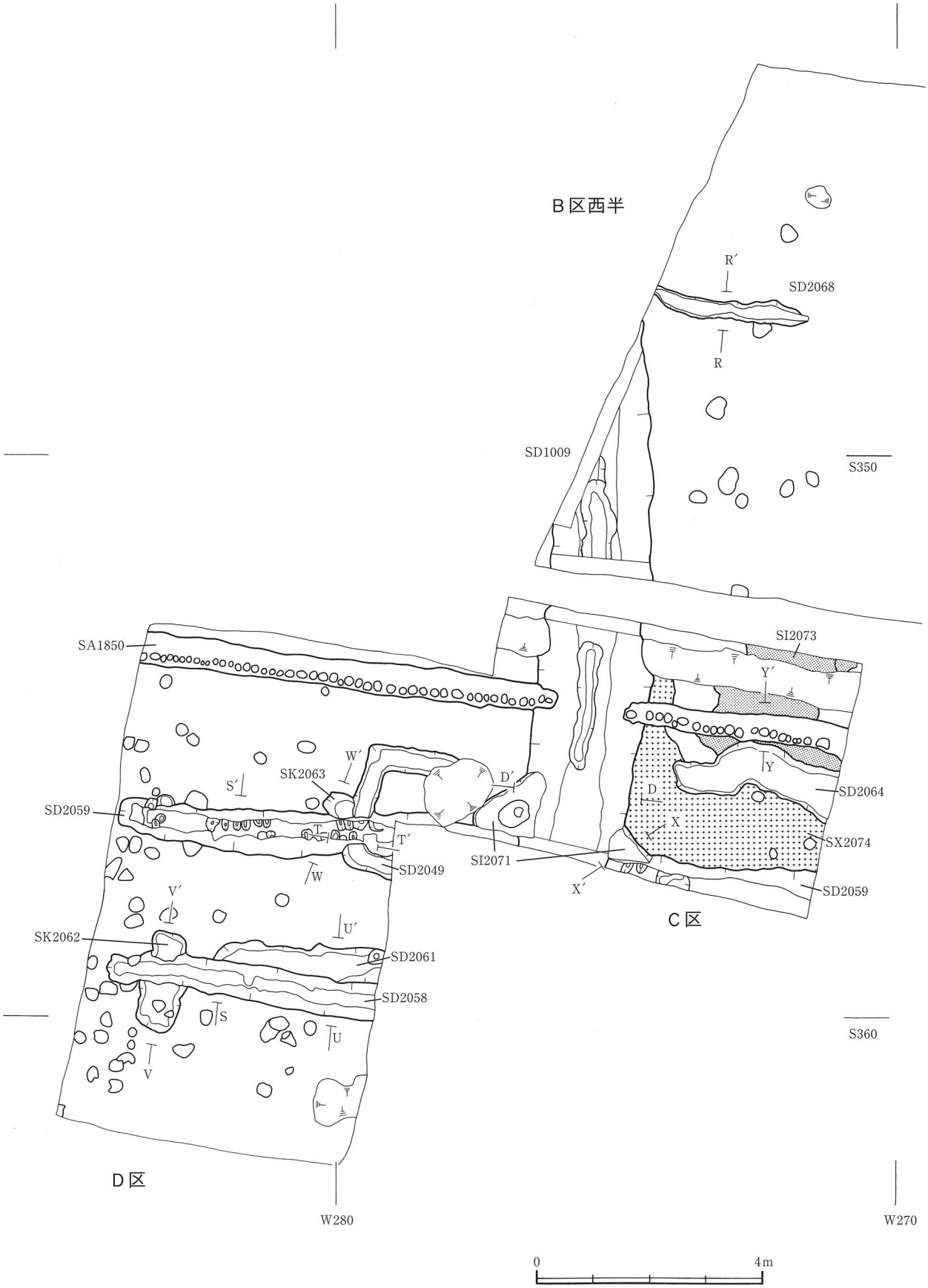
遺物は平瓦片が2点出土している。

SD2059溝跡を切っている。

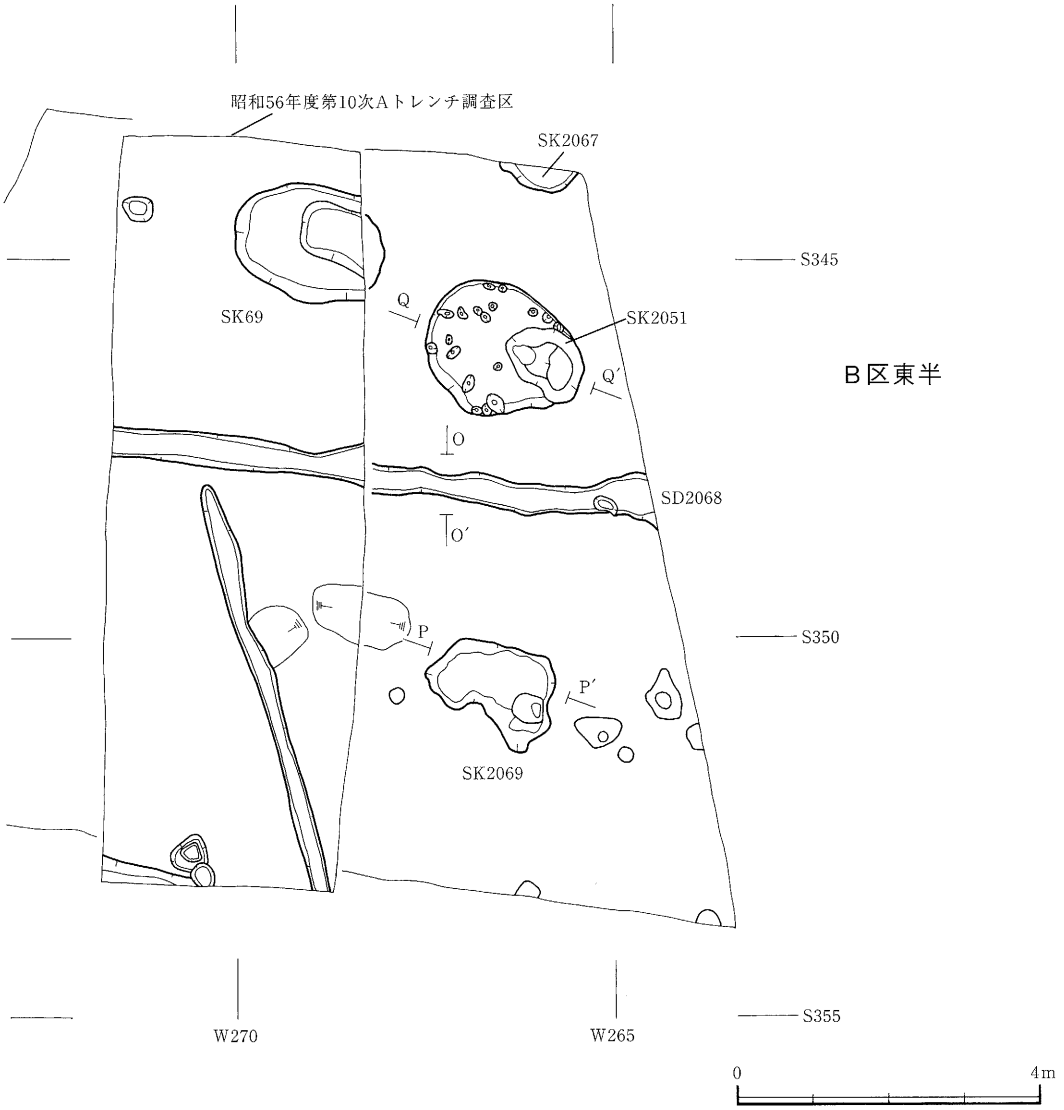


図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点 出土遺構	出土地点 層位	法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	D－88	赤焼き土器	坏	カクラン		器高3.8　口径12.9　底径2.6	口縁部～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		57
2	D－82	赤焼き土器	坏	カクラン		器高3.4　口径12.6　底径 5	口縁部～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		55
3	D－85	赤焼き土器	坏	カクラン		器高3.2　口径12.6　底径5.5	口縁部～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		56
4	D－80	赤焼き土器	坏	カクラン		器高3.8　口径6.2　底径4.4	口縁部～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		54
5	D－81	赤焼き土器	坏	SD2048		器高3.7　口径5.5～5.9　底径 4	口縁部～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		52
6	D－92	赤焼き土器	高台付坏	Ⅲ層		器高6.1　口径14.4　底径7.4	口縁部～体部ロクロナデ	ロクロナデ		59
7	E－475	須恵器	坏	SD2048 SD2046	1 1	器高4.15　口径15.5 底径5.2～5.6	口縁部～体部ロクロナデ	ロクロナデ		51
8	E－474	須恵器	坏	SD2048		器高（3）口径（12.6）底径2.5	体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		50
9	J－12	磁　器	Ⅲ	SD2059	1	残存高1.7　底径4.9	底部以外釉あり	釉のみ		53
10	C－940	土師器	甕	SI2071		残存高4.7	口縁部ナデ→ヘラケズリ	口縁部ナデ		58
11	C－939	土師器	坏	遺構検出面		残存高4.25　口径14.4	口縁部ミガキ、体部ミガキ	口縁部ミガキ、体部ミガキ	内・外面漆仕上げ	48
12	N－117	金属製品	耳環	SK2053	2a	太さ0.7～0.85　隙間0.2　外径2.9～3.1　内径1.4～1.7			完形（東）	46
13	N－118	金属製品	耳環	SK2053	1b	太さ0.7　隙間0.2　外径2.6～2.9　内径1.4～1.6			完形（西）	47
14	G－116	瓦	平瓦	SB2025S1W4	柱穴	凸面縄叩きのちスリ消し痕跡、凹面布目痕、桶巻き、タガ痕跡				49

第14図　第146次調査区出土遺物



第15図　第146次調査B・C・D区平面図（1/100）



第16図　第146次調査B区東半平面図（1/100）

SD2058溝跡　上幅50～70cm、底面幅20～25cm程、深さ30cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。方向はN－0°－E（真北方向）である。検出した総長は4.8mである。堆積土は2層である。

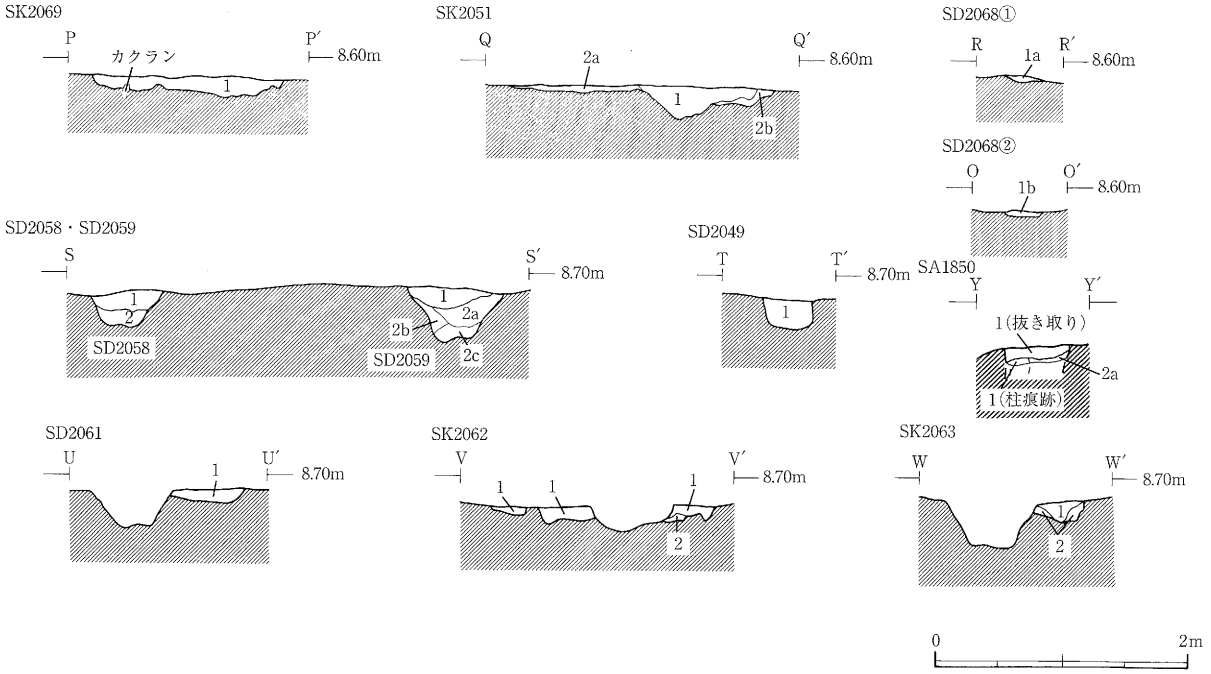
遺物は第1層から平瓦片5点、土師器小片、中形の礫などが出土している。

SD2061溝跡、SK2062土坑を切っている。

SD2059溝跡　上幅60～80cm、底面幅20～30cm程、深さ40～45cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面からは鋤先痕跡が明瞭であるが、おおむね平坦である。方向は西部ではE－3°－Nであるが中央部から東部ではやや屈曲気味となる。C区からD区にかけて検出した総長は12.4mである。堆積土は2層である。

遺物は第1層中から高台の付く磁器J－12皿（第14図9）、土師器、須恵器、瓦片、礫が少量と、第2層中から土師器、瓦、中形の礫が少量出土している。

SI2071竪穴住居跡、SK2063土坑、SX2074性格不明遺構を切り、SD1009溝跡、SD2049溝跡に切られている。



遺構名	層位	土色	土性	備考
SK2069 P－P′				
	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	瓦片を少量含む
SK2051 Q－Q′				
	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	
	2a	10YR2/3 黒褐色	シルト	地山がまじる
	2b	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトを層下半に含む
SD2068① R－R′				
	1a	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	
SD2068② O－O′				
	1b	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
SD2058・2059 S－S′				
SD2058	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	黄橙色粘土をブロック状に含む
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	黄橙色粘土を多量に含む
SD2059	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	
	2a	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	黄橙色粘土をブック状に含む
	2b	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
	2c	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	黄橙色粘土を多量に含む

遺構名	層位	土色	土性	備考
SD2049 T－T′				
	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色土を全体にブロックで含む
SD2061 U－U′				
	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	黄橙色粘土を少量含む
SK2062 V－V′				
	1	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	浅黄橙色シルトをブロック状に含む
	2	10YR7/6 明黄褐色	シルト質粘土	黒褐色粘土を少量含む
SK2063 W－W′				
	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	
	2	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	
SA1850 Y－Y′				
	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	抜き取り
	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	柱痕跡
	2a	10YR3/2 黒褐色	粘土	掘り方埋土

第17図　第146次調査区遺構断面図（1/60）

SD2061溝跡　上幅60cm以上、底面幅30～50cm以上、深さ10cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁はゆるやかに立ち上がり、底面はおおむね平坦である。方向はE－5°－Nである。検出した総長は3mである。堆積土は1層である。

遺物は土師器の小片、平瓦片、中形の礫が出土している。

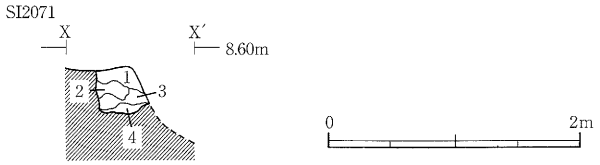
SD2058溝跡に切られている。

SD2064溝跡　上幅60～100cm、底面幅50～70cm程、深さ10cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。 壁は直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。検出した総長は2.9mである。堆積土は1層である。

遺物は土師器の小片、割れた中形の礫が出土している。

SD2068溝跡　昭和56年度調査の第10次調査Aトレンチで検出した遺構の延長部分である。上幅25～60cm、底面幅5～45cm程、深さ10cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がるが、遺構の削平が著しい。底面はおおむね平坦である。方向はE－0°－S（真東西）である。検出した総長は10mである。遺物は出土していない。

SI2071竪穴住居跡　東西2.4m以上、南北2.2m以上の竪穴住居跡である。方向は西壁でN－50°－Eである。床面までの深さは15cmほどである。床面から主柱穴と考えられる長軸60cm、短軸40cmの楕円形の掘り方とそのほぼ中



層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	粘　土	
2	10YR3/1　黒褐色	粘　土	
3	10YR3/3　暗褐色	粘　土	
4	10YR5/6　黄褐色	粘　土	黒褐色粘土斑状に含む（掘り方埋土）

第18図　SI2071竪穴住居跡断面図（1/60）

央部に直径15cmの柱痕跡を検出した。

遺物は床面より口縁部が「く」の字状に屈曲し、体部外面がハケメ状の細いナデ痕跡があり、内面下半が輪積痕跡が顕著な体部片が接合すると推測される土師器C－940甕（第14図10）、貫通穿の穿たれた直径７ミリ程のK－275玉や、扁平な河原石が出土している。また掘り方埋土中よりも土師器の小片が出土している。

SD1009溝跡、SD2059溝跡に切られている。

SI2073竪穴住居跡　耕作により著しく削平され、掘り方と焼面の一部が残存している。遺物は出土していない。

SA1850材木列、SD2064溝跡に切られている。

SK69土坑　昭和56年度調査の第10次調査Ａトレンチで検出した遺構の一部である。長軸２ｍ程、短軸1.5ｍ程の楕円形の土坑で、深さは20cm程で、東部にはさらに40cm程下がる落ち込みがある。壁は削平されているためほとんど立ち上がらないが、落ち込み部分は直立気味となっている。堆積土は１層である。

SK2051土坑　長軸2.1ｍ、短軸1.8ｍのややゆがんだ土坑で、深さは10cm程でさらに東部は20～50cm程下がる落ち込みがある。壁は削平されている箇所では立ち上がりが認められないが、東部では直線的に傾斜を持って立ち上がる箇所がある。堆積土は２層である。

遺物は土師器片が２点出土している。

SK2062土坑　長辺175cm、短辺75cmの隅丸長方形の土坑で、深さは10～12cmである。壁は北部は直線的に立ち上がるが、南部では極めて緩やかに立ち上がる。底面は凹凸がある。堆積土は２層である。

遺物は割れた中形の礫が出土している。

SD2058溝跡に切られている。

SK2063土坑　長軸55cm以上、短軸45cm以上の楕円形の土坑と推定され、深さは30cm程である。壁はほぼ直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。堆積土は２層である。

遺物は平瓦片、土師器の小片が各１点出土している。

SD2049溝跡、SD2059溝跡に切られている。

SK2067土坑　調査区Ｂ区の北東隅で遺構の一部を発見した。詳細については不明である。

遺物は平瓦片が１点出土している。

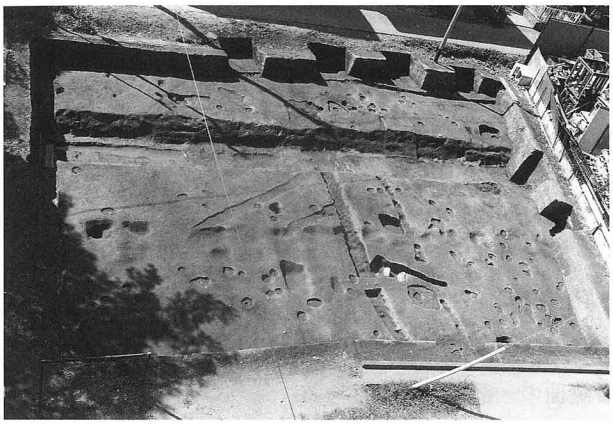
SK2069土坑　長軸160cm、短軸80～140cmの不整円形の土坑で、深さは20～45cm程である。壁は直立気味に立ち上がり、底面には凹凸がある。堆積土は１層である。

遺物は第１層より鴟尾Ｈ－30の小破片、土師器小片、平瓦片、礫が少量出土している。

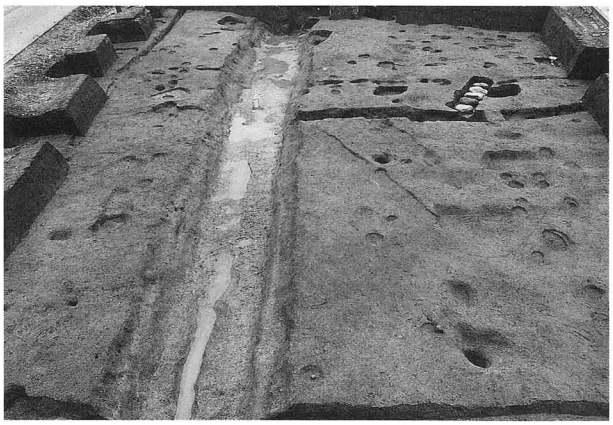
SX2074性格不明遺構　調査区Ｃ区の東部で遺構の一部を発見した。SD2059溝跡やSD1009溝跡の断面で観察すると深さ10cm以上の箇所もあり、竪穴住居跡か整地等の痕跡の可能性がある。詳細については明らかにできなかった。

SA1850材木列、SD1009溝跡、SD2059溝跡に切られている。

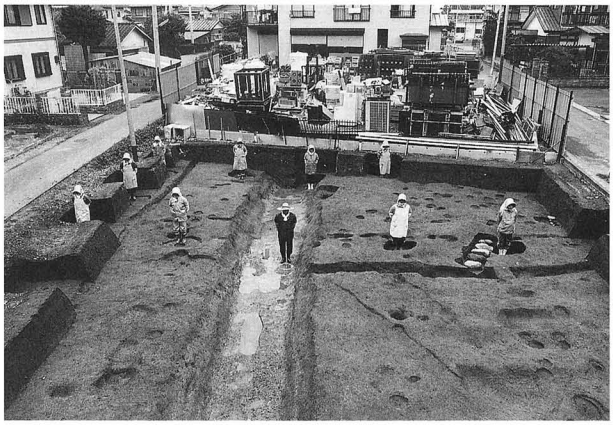
またこの他に表土中よりロクロ使用の土師質で土器表面に鉱滓状の付着物のあるＤ－79坏片（写真69）や、炉壁状の粘土が着いたＮ－116鉄滓（写真60）が出土している。また第Ⅲ層中よりやや大型の赤焼き土器で内面に輪積み痕跡の明瞭なＤ－92高台付坏（第14図６）が、攪乱（樹痕）より小型の赤焼き土器Ｄ－80、82、85、88坏（第14図４、２、３、１）が出土している。



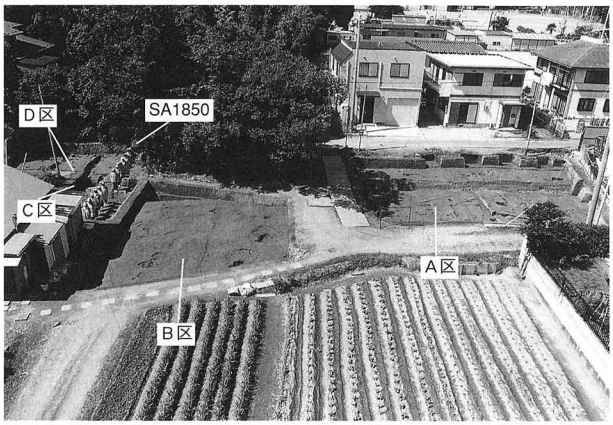
11　第146次調査Ａ区全景（東より）



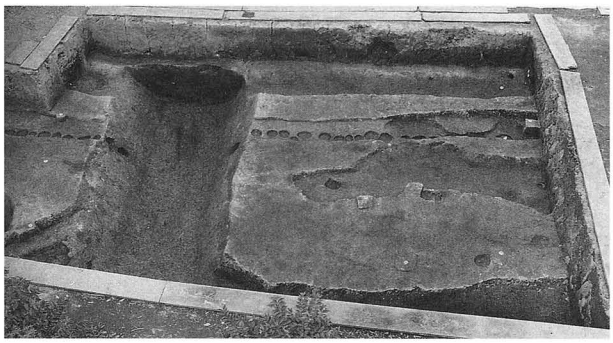
12　第146次調査Ａ区全景（南より）



13　SB2025建物跡（南より）

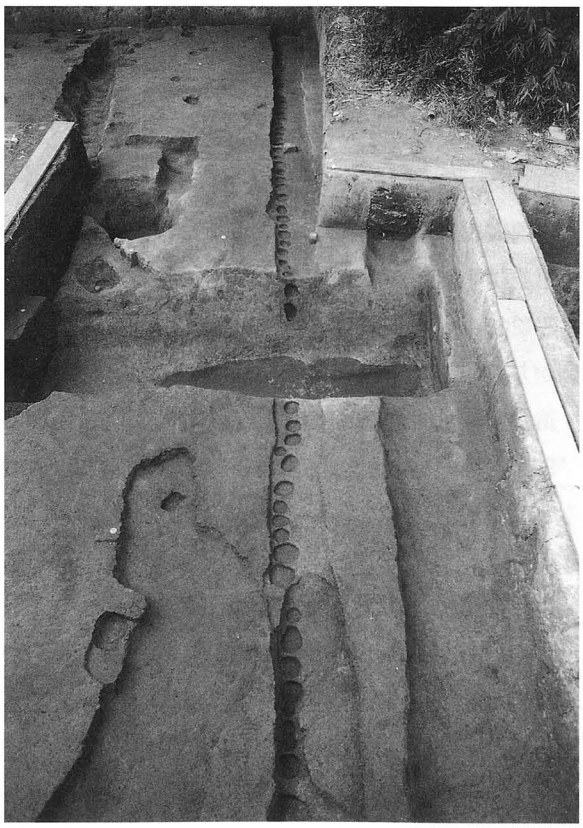


14　第146次調査区全景（東より）

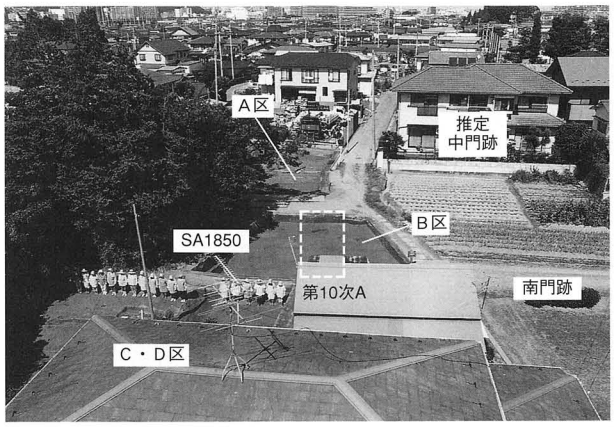


15　146次調査Ｃ区全景（南より）

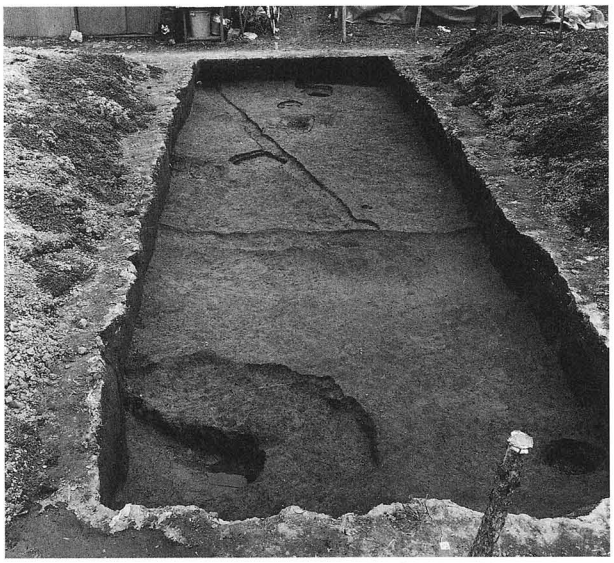
16　第146次調査Ｄ区全景（東より）



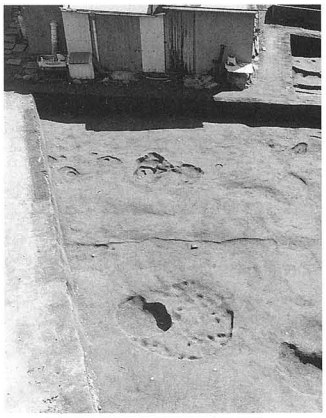
17　SA1850材木列（東より）



18　第146次調査区周辺



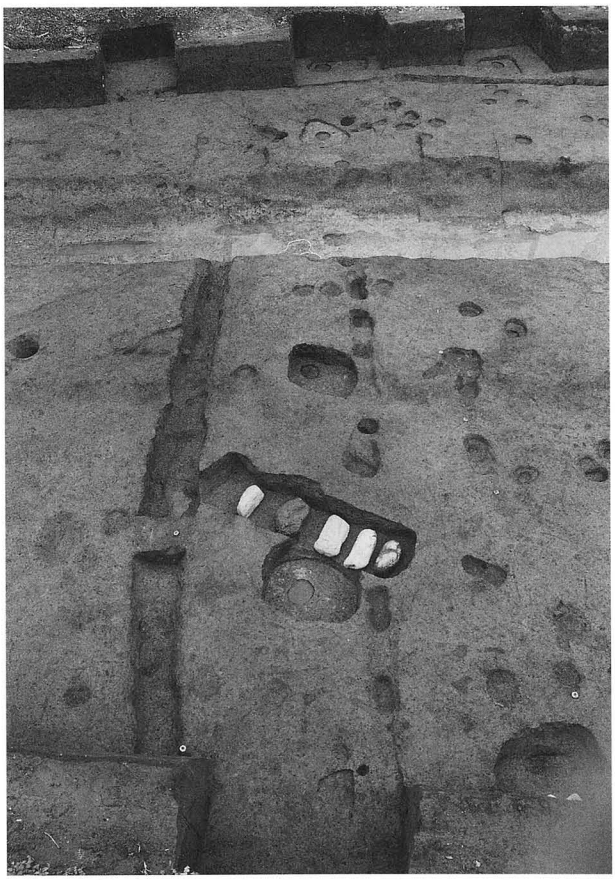
19　第10次Aトレンチ調査区（北より）ー昭和56年ー



20　第46次調査Ｂ区
東半（北より）

21　SD2046溝跡
（北より・Ａ区）

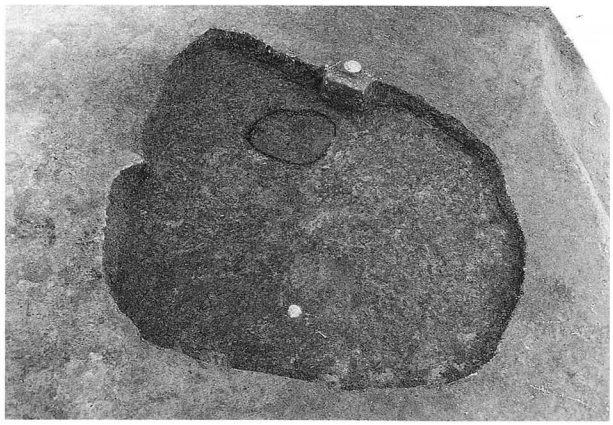
22　SK2072土坑（東より）



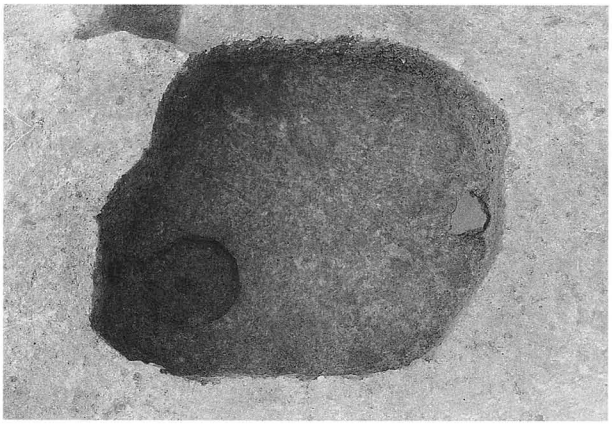
23　SK2072土坑とSB2025建物跡

24　SK2053土坑検出面出土遺物（Ｃ－939）

25　SK2053土坑（南より）

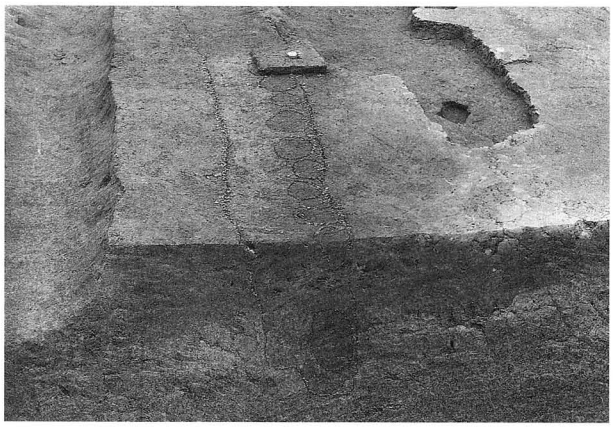


26　SB2025建物跡　S3W2柱穴



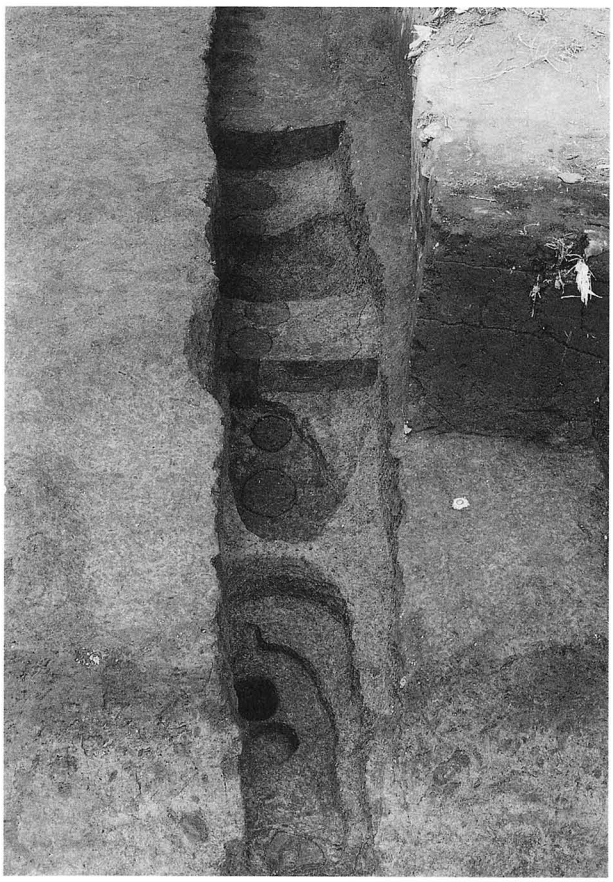
27　SB2025建物跡　S1W4柱穴

28　SB2025建物跡　S3W2遺物出土状況



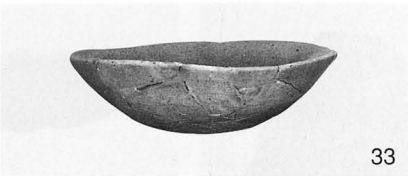
29　SA1850材木列掘り方検出状況

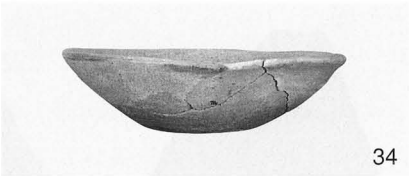
30　SA1850材木列抜き取り状況



31　SA1850材木列掘り方底面

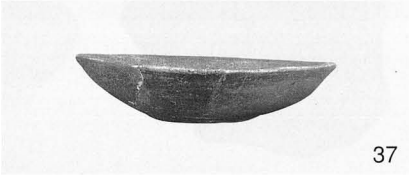
32


33

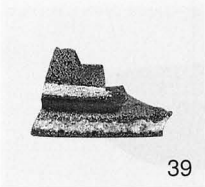

34

35

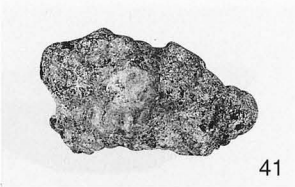
36

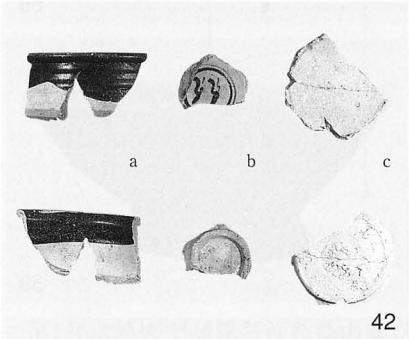

37

38

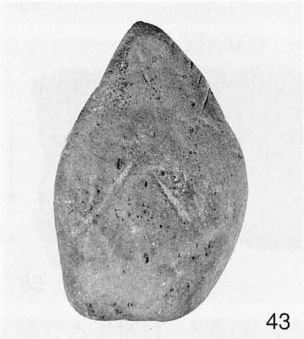

39

40

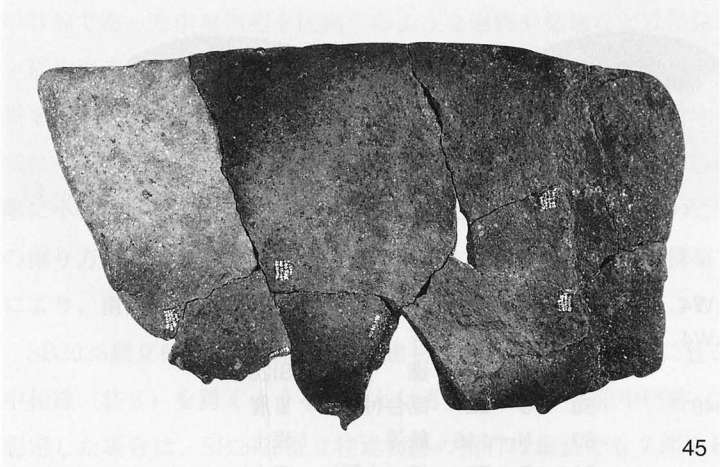

41



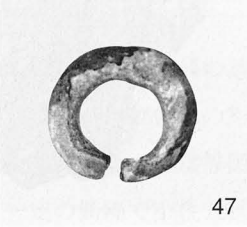
42


43

44

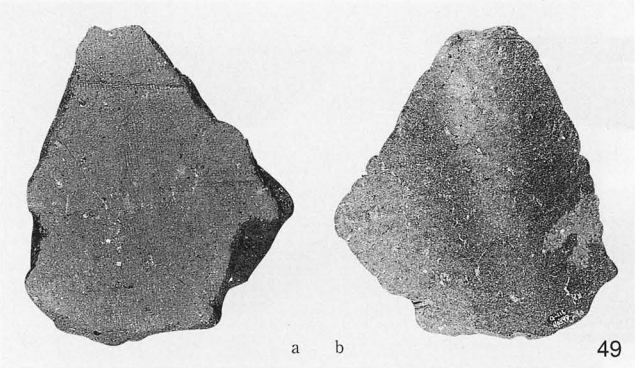

45

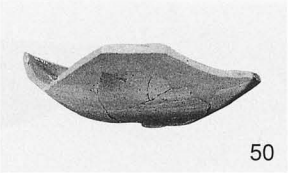
46

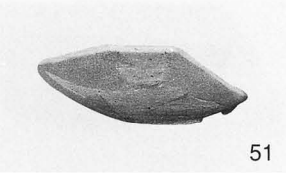

47

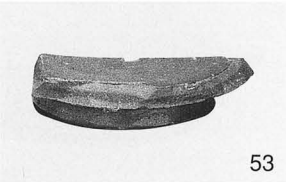
48

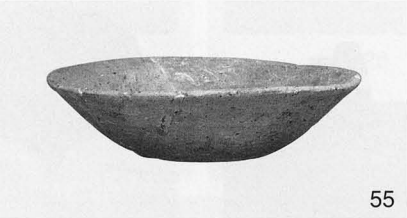
32	D－83	坏	SD1009a ℓ 1
33	D－84	坏	SD1009b ℓ 3a
34	D－86	坏	SD1009b ℓ 3a
35	D－87	坏	SD1009b ℓ 1
36	D－89	坏	SD1009底面
37	D－90	坏	SD1009b ℓ 1
38	D－91	高台付坏	SD1009a ℓ 1
39	E－476	円面硯	SD1009b ℓ 4
40	N－114	鉄滓	SD1009b
41	N－115	鉄滓	SD1009b
42a	I－53		SD1009b
b	I－54		SD1009b
c	I－55		SD1009b
43	K－270	礫線刻カ	SD1009b
44	F－96	軒丸瓦	SD1009b
45	K－244		SD1009b
46	N－117	耳環	SK2053（東側）
47	N－118	耳環	SK2053（西側）
48	C－939	坏	遺構検出面

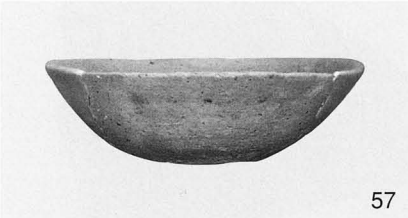


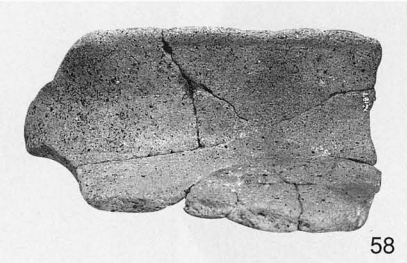


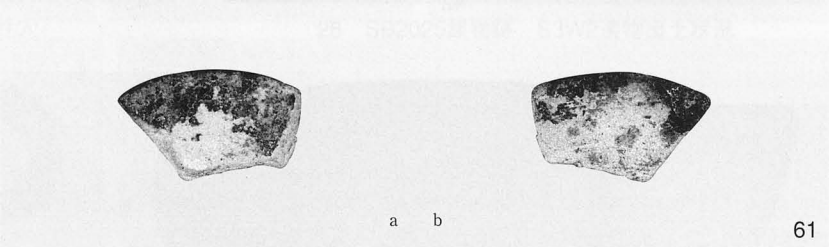








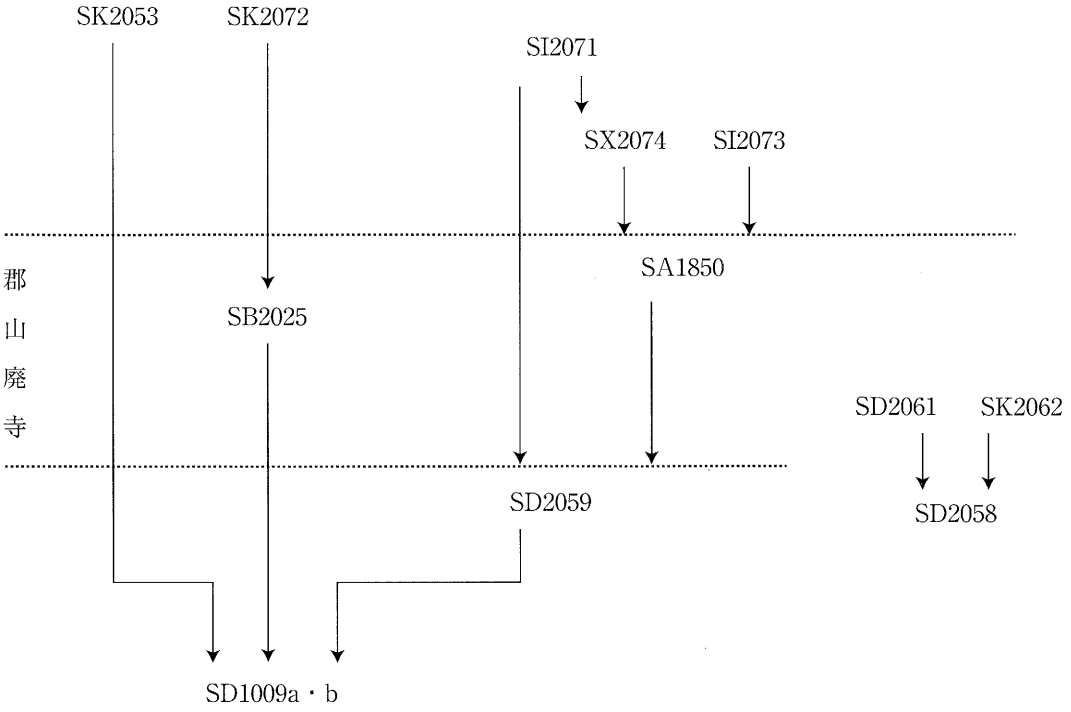




49a	G－116	平瓦（凹面）	SB2025 S1W4	
b	G－116	平瓦（凸面）	SB2025 S1W4	
50	E－474	坏	SD2048	
51	E－475	坏	SD2046・2048	
52	D－81	坏	Ⅰ層	
53	J－12	皿	SD2059ℓ1	
54	D－80	坏	カクラン	
55	D－82	坏	カクラン	
56	D－85	坏	カクラン	
57	D－88	坏	カクラン	
58	C－940	甕	SI2071	
59	D－92	高台付坏	Ⅲ層	
60	N－116	鉄滓	表土	
61a	D－79	坏（内面）	表土	
b	D－79	坏（外面）	表土	

3．まとめ

今回発見された遺構のうち、主な遺構の重複関係は以下のようなものである。



第146次調査で発見された郡山廃寺に関わる遺構は、SA1850材木列とSB2025掘立柱建物跡である。今回の調査の目的であった中枢伽藍を区画するような廻廊や築地などは発見されなかった。

郡山廃寺南辺となるSA1850材木列は、平成11年度の第128次調査で検出したSB1880門跡に取り付く材木列の延長部分であり、ほぼ想定された位置で発見されている。この材木列の掘り方底面における柱材の深さや材先端の形状は一定していない。これは平成13年度の第133次調査で検出した同じ南辺での掘り方底面においては、ほぼ等間隔に小柱穴の掘り方が検出されていたのとは違いがある。このことは材木列の掘り方底面に一定の間隔で小柱穴状の掘り方を掘り、材を据えてその間に材木を充填するような構築方法をとっていると見ていたことが、今回の調査により、南辺の材木列は地点によって構築方法に違いがあることが明らかになった。

SB2025掘立柱建物跡は東西棟の建物跡であり、さらに東に延びていく。南門跡や講堂基壇から推定された仮想中軸線（註３）を跨ぐような遺構とは考えがたく、推定中門跡（写真18）を多賀城廃寺跡と同等の規模（註４）で想定した場合は、SB2025掘立柱建物跡の桁行は最長でも７間を越えるものではなく、桁行５～６間程度の東西棟建物跡と見られる。また複数の柱穴掘り方から平瓦の小片が出土していることから、郡山廃寺の創建期まで遡る建物跡ではないと考えられる。これは柱痕跡上部からロクロ使用の土師器片が出土していることからも言えることで、郡山廃寺の終末の問題にも関わるが、ロクロ使用の土師器が存在した時期まで寺院内の建物が存続していたことを窺わせることになろう。

なおSB2025掘立柱建物跡の南桁行の方向はＥ－３°－Ｓで、南辺となるSA1850材木列がＥ－０°－Ｓの真東西方向を示すのとは微妙な違いを見せている。そのため材木列とSB2025S1W1柱穴間の距離は26.7ｍであるが、S1W5柱穴間の距離は26mとなっている。SB2025東端の柱穴との距離はおそらくさらに短くなっているのであろう。したがって南辺材木列が創建期の遺構とした場合、SB2025掘立柱建物跡は別時期に建てられたと見られ、創建期の後に付加されたと見るべきであろう。

今回発見された土坑のうちSK2053土坑とSK2072土坑が他の土坑とは特徴を異にしている。SK2053土坑からは土坑内の北部から金銅製の耳環２点が15cm程離れて出土している。対になって出土していることと、出土位置からは人頭大の距離間を保って出土しているため、遺体と伴に埋葬されたと見ることができ、SK2053土坑が墓坑であった可能性が高い。なお遺構の検出面上からは関東地方の古墳時代の土師器編年で鬼高式とされる特徴を示す坏（Ｃ－939）が出土し、土坑に伴っていたと考えられる。

またSB2025掘立柱建物跡に切られるSK2072土坑からは、底面に河原石５石が長辺を横にして並んで発見された。土坑の大きさや河原石の頂部の高さが揃っていることなどから、木棺が直葬されその棺座のように使用された可能性がある。先述のSK2053土坑の長軸方向がＮ－21°－Ｅで、SK2072土坑もＮ－26°－Ｅとなっており、ほぼ同方向をむいている。ともにⅡ期官衙造営以前の土坑墓である可能性があり、郡山廃寺の創建される以前の墓域として使われていた地区（註５）である可能性が出てきた。

第146次調査区を縦断するSD1009a・b溝跡は、昭和61年度の第66次調査区で遺構の一部を検出していた。その際には溝中より瓦が出土していることから、古代の遺構として報告されている（註６）。今回の調査でもｂ期の第２層中より多量の瓦と河原石が出土していた。しかしその他に赤焼け土器や陶磁器片（註７）が出土し、それらの年代観からは16～18世紀までのものが含まれている。近世まで溝として機能していたものと考えられ、さらにその溝跡のｂ期で上層が埋没する時に多量の瓦と河原石とが投棄されたものである。周辺に河原石を含むような土層がないことから、これらの河原石は人為的に運ばれてきたものである。ともに出土している瓦は小破片であるが、これまで郡山廃寺から出土している瓦と同じ特徴を示している。これらが溝中に面をなして集積しているということは、溝中に投棄されるまで周辺の地表に残されていたことを示すものであり、礎石建物跡の根石や耕作中に細片となった瓦としてそれまで残存していたものではないだろうか。それが近世後半の一時期のうちに溝中に投棄されたものと想定されよう。

註１　これら陶磁器片についてはⅠ－53は16世紀と推定される鉄釉された瀬戸美濃香炉、Ⅰ－54は17世紀前半と考えられる志野織部碗または鉢、Ⅰ－55は17世紀前半と考えられる鉄絵が施された志野織部皿、Ⅰ－56は17世紀前半から18世紀と考えられる透明釉が施された肥前碗、Ⅰ－57は17世紀後半と推定されるハケメ紋唐津大鉢、その他17世紀の岸窯系の香炉片などが含まれているという見解を仙台市博物館　佐藤洋氏よりいただいた。

註２　永嶋正春「鹿沼市稲荷塚遺跡出土品の材質と技法」『栃木県埋蔵文化財調査報告第84集　稲荷塚・大野原』栃木県教育委員会1987

永嶋正春「漆仕上げ土師器について」『東金市久我台遺跡』（財）千葉県文化財センター1988

註３　本書　Ｐ53・54　第34図　遺跡南部遺構配置図参照

註４　宮城県教育委員会・多賀城町『多賀城跡調査報告書Ⅰ　－多賀城廃寺跡－』1970.3

多賀城廃寺跡の中門跡は八脚門で、桁行総長11.284mである。

註５　仙台市文化財調査報告書第169集『郡山遺跡ⅩⅢ　－平成４年度発掘調査概報－』1993.3

第96次調査で古墳の周溝状の溝跡が発見されていた。Ⅰ期官衙、Ⅱ期官衙の遺構に切られていた。

註６　仙台市文化財調査報告書第96集『郡山遺跡Ⅶ　－昭和61年度発掘調査概報－』1987.3

Ⅶ　第66次調査　Ｐ69～75

註７　註１に同じ

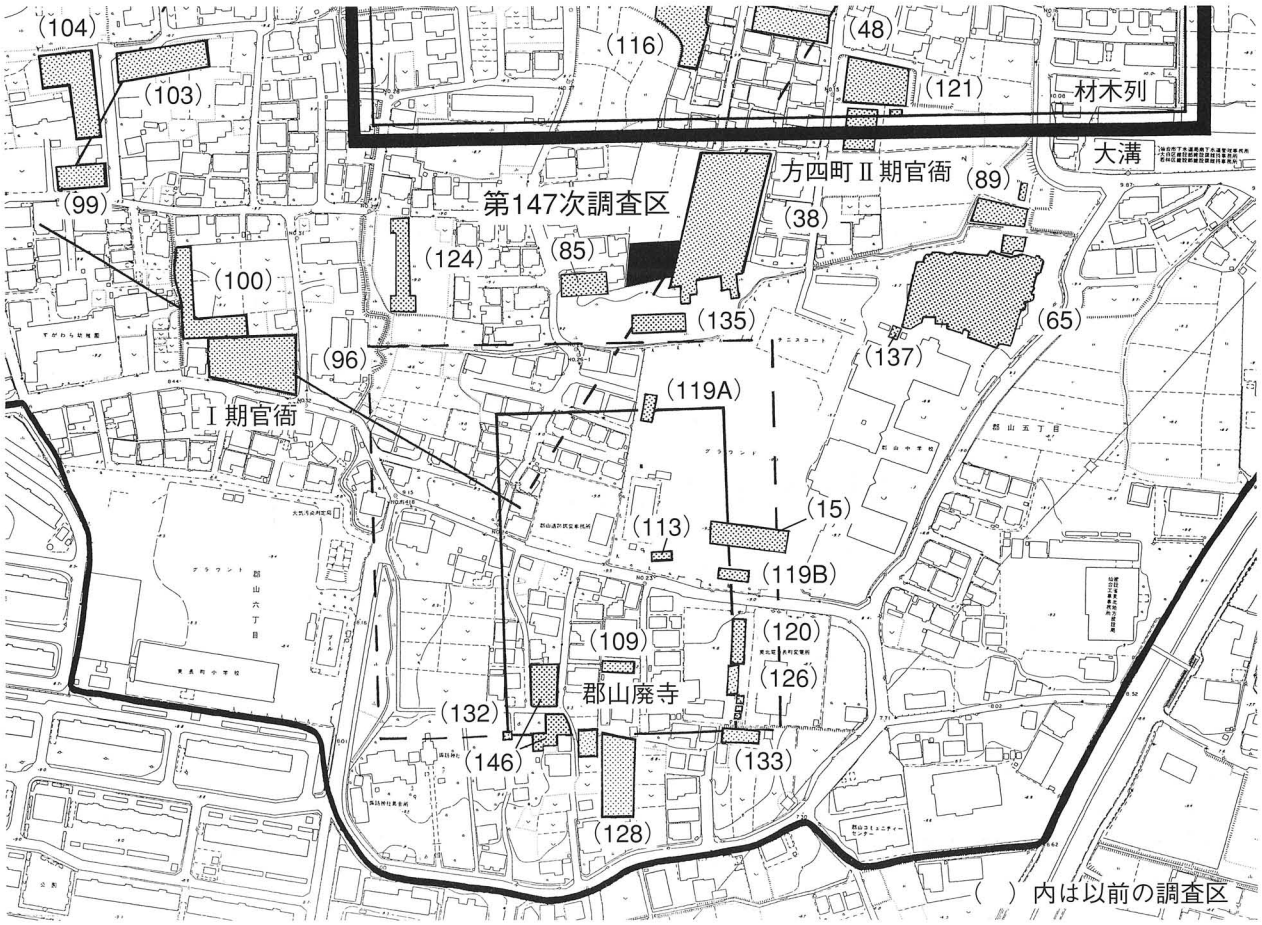
Ⅴ　第147次発掘調査

1．調査経過

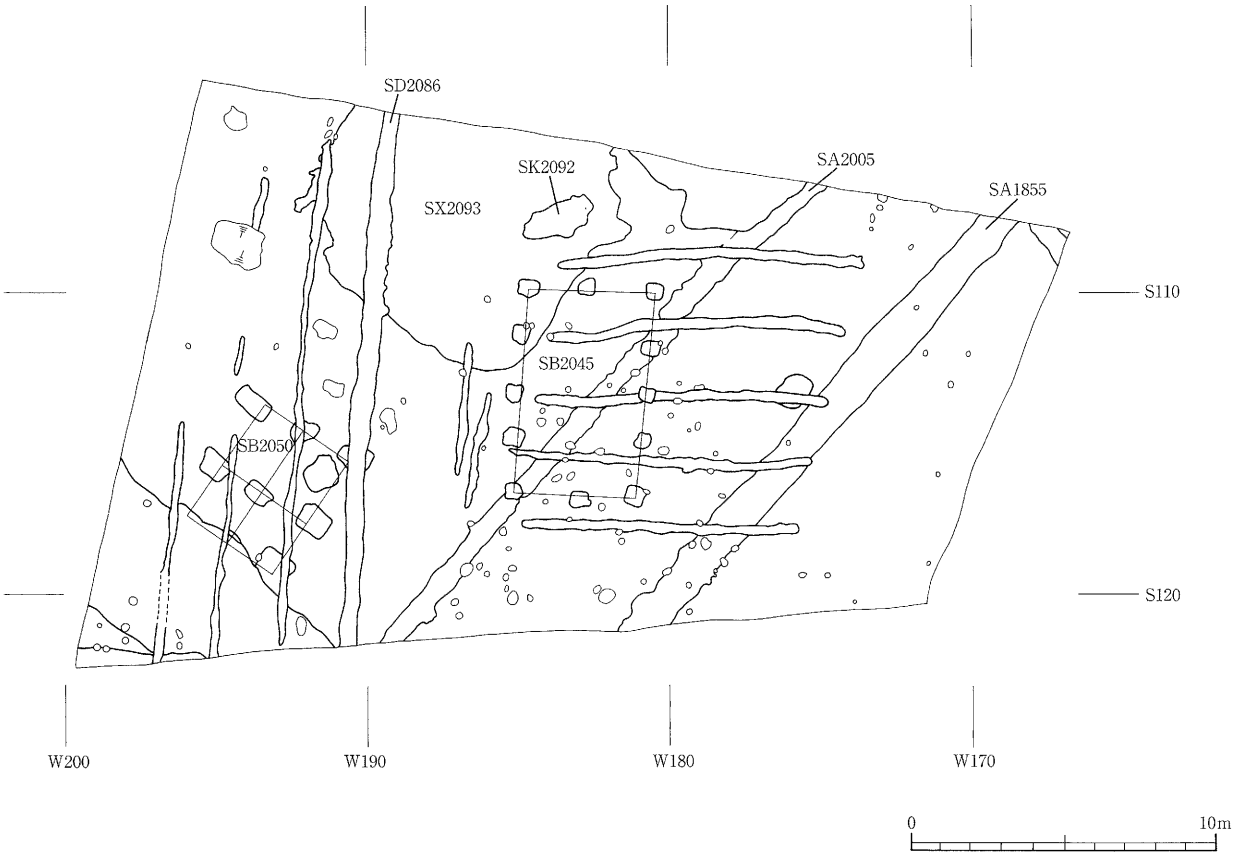
第147次調査区は昨年度調査を実施した第138次調査区に隣接し、方四町Ⅱ期官衙と郡山廃寺の間に広がる南方官衙西地区の中に位置している。昨年度までの調査で、方四町Ⅱ期官衙外郭となる材木列と大溝の外側の様相は、西辺と南辺では大溝と並行するほぼ同規模な溝跡（＝外溝）があり外郭との間に約50mの空閑地を形成していた。南方官衙地区は、この「外溝」を境に南に位置し、官衙の中枢部に配置されるような建物と同等の構造や規模をもつ大型の建物が配置されている。方四町Ⅱ期官衙のみならずその外側にも重要な官衙ブロックが広がっている地区である。今年度は昨年度の第138次調査で発見されたような大型の建物が建ち並ぶのかどうかを確認するため第147次調査を実施した。調査区の現況は、旧水田で仙台市土地開発公社の所有地となっている。今回は第85次調査で発見されたSB1277掘立柱建物跡と昨年度の調査（第138次）で発見されたSB2010・2015掘立柱建物跡の間に約470㎡の調査区を設定して実施した。しかし今年度急遽個人住宅建築に伴う第148次調査を実施する必要があったため、遺構認にとどめた。来年度に詳細な発掘調査を実施することにしている。そのため調査遺構配置図は遺構検出段階でのものである。

2．発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡２棟、材木列２列、溝跡13条、土坑３基以上、性格不明遺構１、ピットなどである。これらの遺構は基本層位第Ⅱ層上面で検出されている。表土（第Ⅰ層）の厚さは10cm～20cmである。以下ここで報告するのは、第Ⅱ層上面で検出された主な遺構である。



第19図　第147次調査区位置図



第20図　第147次調査遺構配置図（1/200）

SA1855材木列　Ⅰ期官衙の遺構と見られる南北に延びる材木列で、東に隣接する昨年度の第138次調査区で検出したSA1855材木列の延長部分と考えられる。

SA2005材木列　Ⅰ期官衙の遺構と見られる南北に延びる材木列で、東に隣接する昨年度の第138次調査区で検出したSA2005材木列の延長部分と考えられる。

SB2045掘立柱建物跡に切られている。

SB2045掘立柱建物跡　東西梁行２間（推定総長4.2m）、南北桁行４間（推定総長6.9m）の掘立柱建物跡である。柱穴は一辺70～140cm程の隅丸長方形である。

SA2005材木列、SX2093性格不明遺構を切る。

SB2050掘立柱建物跡　Ⅰ期官衙の遺構と見られる東西２間（推定総長3.2m）、南北２間（推定総長3.9m）の総柱建物跡と見られる。柱穴は一辺80～130cm程の隅丸長方形である。

SD2086溝跡に切られている。

SD2086溝跡　南北に延びる溝跡で、調査区を縦断する。上幅50～80cm、検出総長は約18mである。

SB2050掘立柱建物跡、SX2093性格不明遺構を切っている。

SX2093性格不明遺構　調査区の北部で検出された遺構である。

遺物は第１層中から多量の土師器片、須恵器片、割れた河原石などが出土している。

３．まとめ

第147次調査ではこれまで南方官衙地区で発見されてきたような大型の建物跡は発見されなかった。SB2045掘立柱建物跡は、これまでのこの地区で発見された建物跡と比較すると規模が小さく、柱穴・掘り方も小規模である。第147次調査の詳細については次年度の調査で明らかにしていくこととする。

62　第147次調査区全景（東より）

63　第147次調査区遺物出土状況（北より）

Ⅵ　第148次発掘調査

１．調査経過

第148次調査は、仙台市太白区郡山三丁目９－18矢口正史氏より、仙台市太白区郡山三丁目33－６において住宅新築に伴う発掘届が、平成14年９月28日付けで提出されたことにより実施した。住宅の基礎工事の深度が遺構の検出面より深く、遺構が損なわれると想定されたためである。調査地は方四町Ⅱ期官衙北辺推定線上に位置するため調査以前から北辺材木列の検出が予想され、北辺のほぼ中央部にあたることから北門跡の検出も考えられた。これまで北辺の調査は住宅が密集した地域であるため、北辺材木列については配管工事などに伴う断面観察が主であった。本格的な調査については小規模ではあるが昭和56年度の第14次調査と昭和63年度の第79次調査を実施し、第79次調査において北辺の大溝とみられるSD617溝跡を検出していた。調査は住宅の建つ部分を対象に東西９ｍ、南北８ｍの調査区を設定し、平成14年10月３日に表土排除を行った。

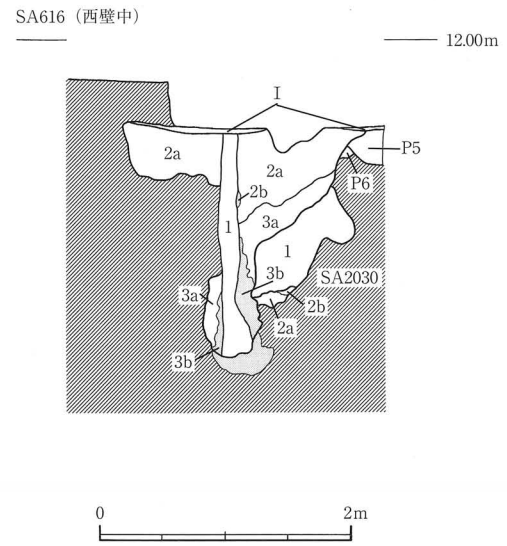
現況より深さ50㎝程で遺構を検出し、調査は10月31日に終了した。わずか72㎡の調査区ではあるが、Ⅰ期官衙、Ⅱ期官衙さらに官衙以前の重要な遺構が良好な遺存状況で検出された。

２．発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡１棟、材木列３列、溝跡１条、竪穴住居跡１軒、土坑８基、性格不明遺構２、ピットなどである。これらの遺構は基本層位第Ⅲ層上面で検出されている。第Ⅰ層は現代の整地層、第Ⅱ層は畑の旧耕作土と考えられる。以下ここで報告するのは、第Ⅲ層上面で検出された遺構である。

SA616材木列　東西に延びる材木列であり、上幅50～240㎝以上の掘り方とそのほぼ中央部に直径15～30㎝の柱痕跡が連続して30本分検出された。検出した総長は東西約9.15ｍである。方向はＥ－１°－Ｎであり、さらに東西方向に延びている。掘り方の深さは検出された上面より190㎝程で、柱痕跡は底面より上面まで立ち上がっている。抜き取りの痕跡は確認されなかった。堆積土は２層であるが柱痕跡周辺下部が白色に変色し粘土化している。

第21図　第148次調査区位置図



64　SA616断面

遺構名	層位	土　色	土性	備　考
SA616				
柱痕跡	1	10YR4/4　褐色	粘土	縁辺部に白色粘土、酸化鉄が集積している
	2a	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土	黒色粘土を斑状に含む
	2b	10YR7/2　にぶい黄橙色	粘土	黒色粘土を含む
	3a	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	白色粘土を斑状に含む
	3b	10YR7/2　にぶい黄橙色	粘土	黒色粘土を含む

遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
SA2030				
抜き取り溝	1	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト	黒色粘土をブロック状に含む
掘り方	2a	10YR7/6　明黄褐色	粘土質シルト	黒色粘土を少量含む
	2b	10YR6/2　灰黄褐色	粘　土	酸化鉄が集積している
Pit 5	1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	
Pit 6	1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	

第22図　SA616材木列断面図（1/60）

遺物は掘り方埋土より扁平な搾痕、敲打痕のあるＫ－254礫石器（第28図10）、その他多数の土師器、須恵器の小片が出土している。柱痕跡よりも土師器、須恵器の小片が少量出土している。

SA2030材木列、SB2040掘立柱建物跡、SK2096土坑を切り、SD2076溝跡、SK2077土坑に切られている。

SA2030材木列　上幅55～90cmの溝状の抜き取り底面において、掘り方とその内部から直径20～25cmの柱痕跡が検出された。柱痕跡の深さは一定していない。柱痕跡より深い深度で抜き取りを受けている箇所も見られる。方向はＥ－30°－Ｓである。検出した総長は約10.8mである。

遺物は抜き取りより内面にミガキが施され、口縁部がやや内弯した土師器Ｃ－929坏（第28図２）、その他土師器片、須恵器蓋片などが出土している。

SB2040掘立柱建物跡を切り、SA616材木列、SD2076溝跡、SK2097土坑に切られている。

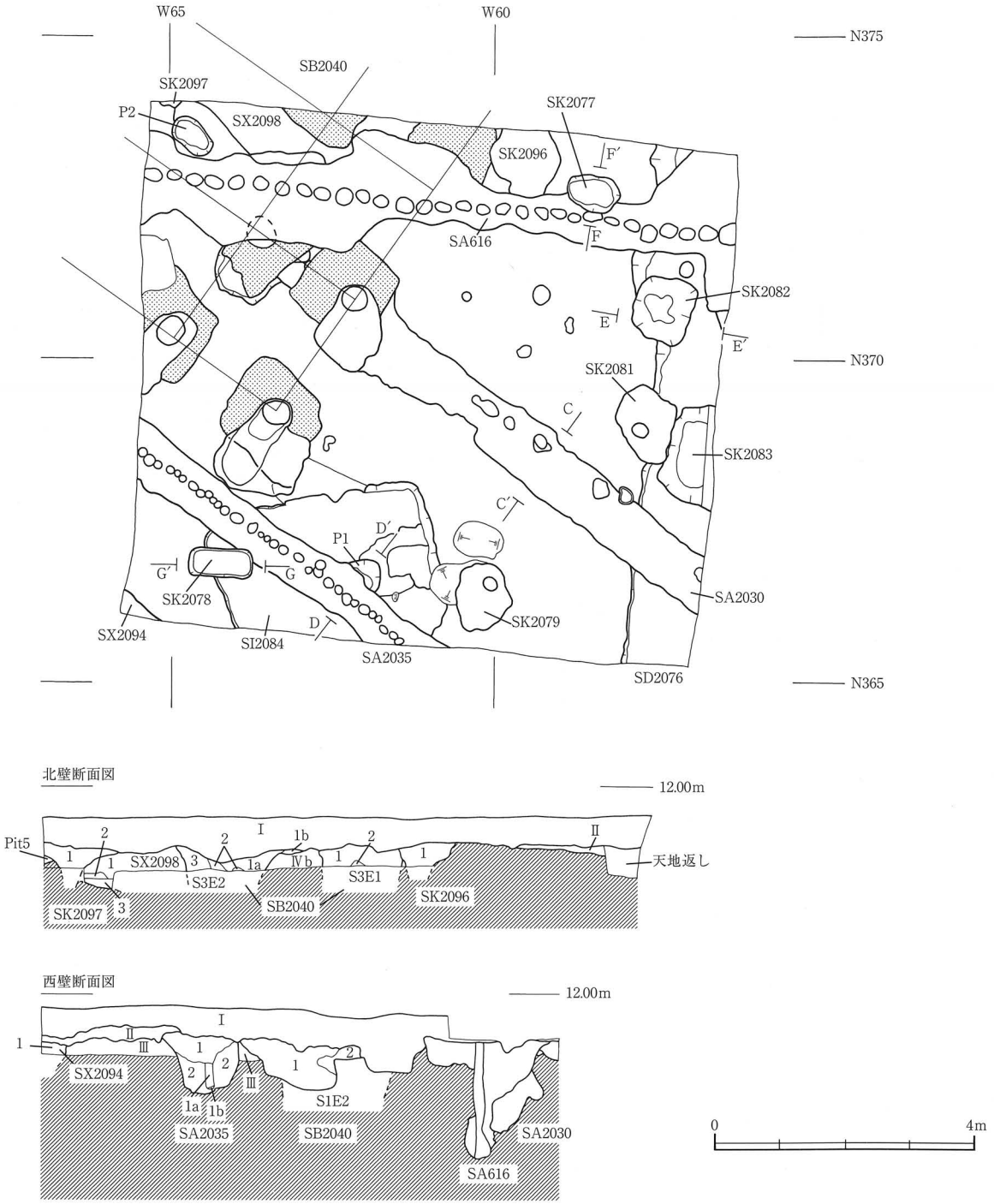
SA2035材木列　上幅60～70cmで、掘り方とそのほぼ中央部に直径10～20cmの柱痕跡が連続して検出された。柱痕跡底面の深さはほぼ一定している。方向はＥ－29°－Ｓである。検出した総長は約６ｍである。

遺物は掘り方より口縁部と内外面がヨコナデ調整され、黒色の土師器Ｃ－935坏片、その他少量の土師器の小片が、抜き取りよりも土師器の小片が少量出土している。

SI2084竪穴住居跡を切り、SK2078土坑、ピット１に切られている。

SB2040掘立柱建物跡　東西１間以上、総長205cm以上（柱間寸法205cm）、南北２間以上、総長420cm以上（柱間寸法210cm）の掘立柱建物跡である。方向は南柱列でＥ－28°－Ｓである。柱穴の掘り方はS1E1柱穴で150cm×135cm程の方形で、柱痕跡は直径40～45cmである。柱痕跡には抜き取りが施されている。

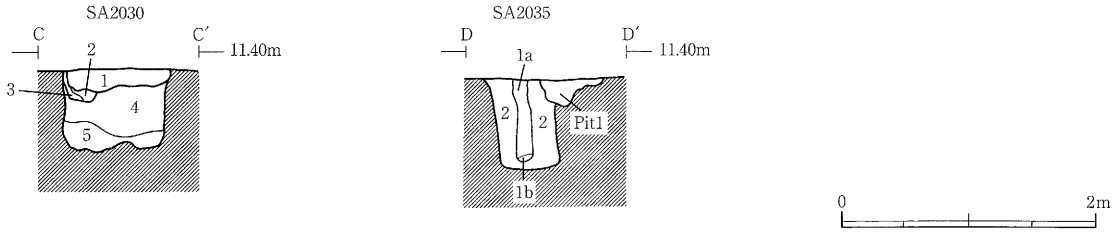
遺物は掘り方中ではS1E2より内外面が黒色処理され、口縁部の内外面にヨコナデが施され、体部外面のハケメ



遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
基本層位	Ⅰ	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	上層にコンクリート、石含む
	Ⅱ	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土	旧耕作土
	Ⅲ	10YR7/6　明黄褐色	シルト質粘土	黒色粘土を少量含む
	Ⅳa	10YR4/1　褐灰色	粘　土	
	Ⅳb	10YR3/1　黒褐色	粘　土	暗褐色土を霜降り状に含む
SK2096	1	2.5Y7/4　浅黄色	粘　土	黒色粘土をブロック状に含む
SK2097	1	10YR7/6　明黄褐色	粘　土	黒色粘土を少量含む
SX2098	1	10YR7/6　明黄褐色	粘土質シルト	
	2	10YR3/2　黒褐色	粘　土	
	3	10YR6/6　明黄褐色	粘　土	黒褐色粘土をブロック状に含む
SX2094	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘　土	
Pit 5	1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	
SB2040　S3E1				
	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘　土	浅黄橙色粘土をブロック状に含む
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘　土	焼土を少量含む

遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
SB2040　S3E2				
	1a	10YR6/2　灰黄褐色	粘　土	白色粘土、酸化鉄を少量含む、抜き取り穴の可能性あり
	1b	10YR6/6　明黄褐色	粘　土	抜き取り穴の可能性あり
	2	10YR6/3　にぶい黄橙色	粘　土	白色粘土、酸化鉄を多量に含む
	3	10YR6/6　明黄褐色	粘　土	黄橙色粘土をブロック状に含む
SB2040　S1E2				
	1	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘　土	黄橙色粘土を斑状に含む
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘　土	
SA2035				
抜き取り	1	10YR7/4　にぶい黄橙色	粘　土	
柱痕跡	1a	10YR3/2　黒褐色	粘　土	
	1b	10YR7/2　にぶい黄橙色	粘　土	底面に酸化鉄集積あり
掘り方	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘　土	明黄褐色粘土をブロック状に含む

第23図　第148次調査区平・断面図（1/100）



遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
SA2030　C－C′				
抜き取り穴	1	10YR6/6　明黄褐色	粘　土	
柱痕跡	2	10YR5/2　灰黄褐色	粘　土	白色粘土、酸化鉄を含む
掘り方	3	10YR6/6　明黄褐色	粘土質シルト	
	4	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト	黒色粘土をブロックで多量に含む
	5	10YR7/4　にぶい黄橙色	粘　土	黒色粘土を含む
SA2035　D－D′				
柱痕跡	1a	10YR3/2　黒褐色	粘　土	
	1b	10YR7/2　にぶい黄橙色	粘　土	底面に酸化鉄集積あり
掘り方	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘　土	明黄褐色粘土をブロック状に含む
Pit 1	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘　土	

第24図　SA2030・SA2035材木列断面図（1/60）

調整が明瞭な土師器C－931不明品（第28図１）が出土し、その他にS1E1、S1E2、S2E1、S2E2の各柱穴より少量の土師器小片が出土した。抜き取り中ではS2E2より内外面が漆仕上げされたと見られる土師器C－937坏（第28図４）、S1E1より土師器甕底部、須恵器蓋片が、その他S1E1、S1E2、S2E1、S2E2の各抜き取りより少量の土師器小片が出土している。

SA616・2030材木列に切られている。

SD2076溝跡　上幅100～165cm以上、底面幅80～135cm以上、断面形は扁平な溝跡である。遺構が削平されているため壁の立ち上がりの形状は明らかではない。底面はおおむね平坦である。方向はN－１°－Wである。検出した総長は約８ｍで調査区の東壁ぎわを縦断する。堆積土は１層である。

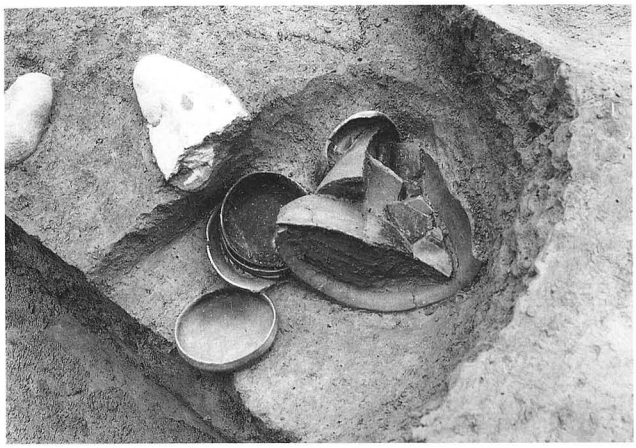
遺物は堆積土中より小型で内面にカエリのある須恵器E－472蓋（第28図８）、その他に土師器、須恵器の小片が少量と陶磁器の小片が２点出土している。底面よりも土師器、須恵器、燻瓦の小片が出土している。

SA616・2030材木列、SK2081・2082・2083土坑を切っている。

SI2084竪穴住居跡　東西350cm、南北250cm以上の竪穴住居跡である。方向は北壁方向でE－18°－Nである。床面までの深さは20～30cm程である。カマドの痕跡は東壁中で確認されたが、ソデや天井部の構築土は残存せずソデの痕跡のみの検出で、煙道部も発見されなかった。

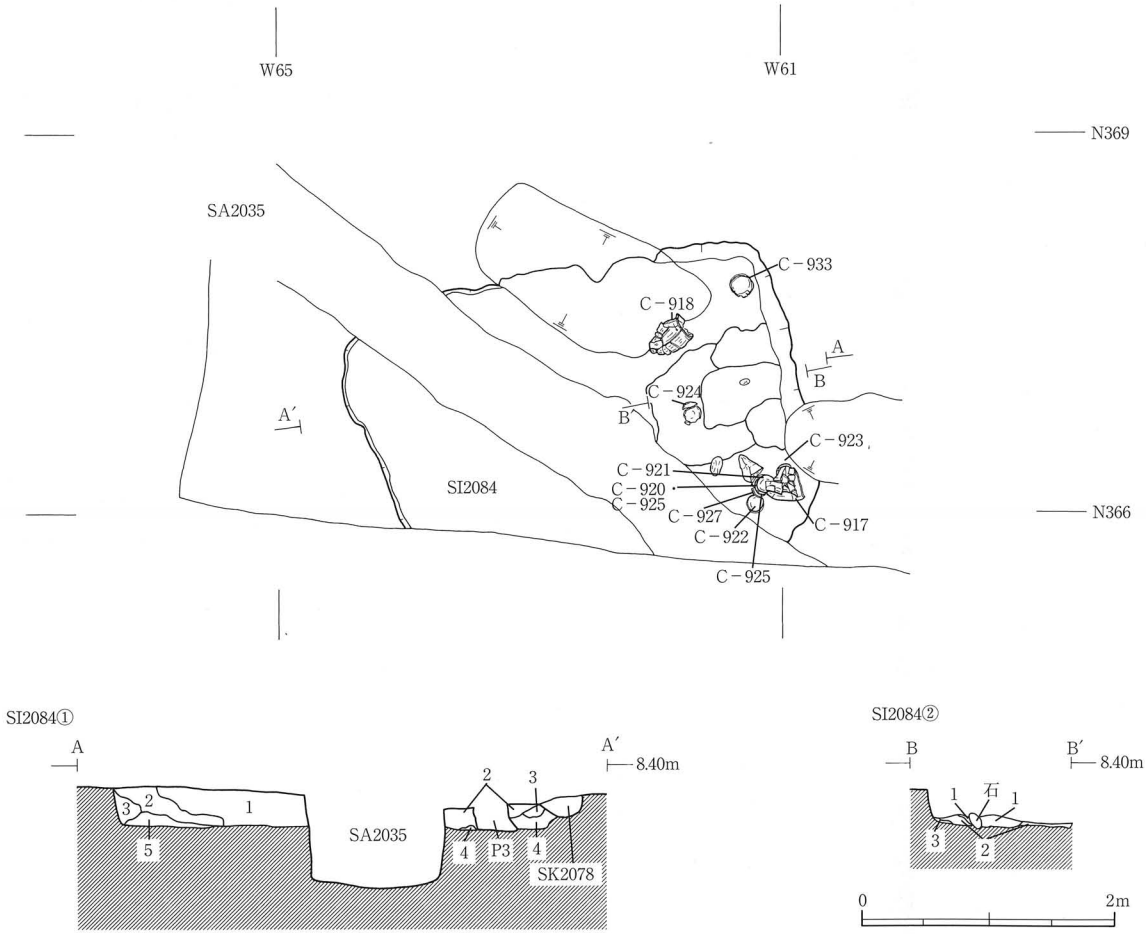
遺物はカマド周辺と床面からまとまって出土した。カマド北側の床面上からは、土師器C－933埦、C－918甕、カマド西側の前面からは土師器C－924坏、カマド南側の床面上からは土師器C－917甑が出土し、甑底部付近の下から土師器C－923坏が、甑の口縁部付近の下からは土師器C－921坏、920坏、925坏、927坏の４点が重なって出土した。またこの４点の坏類の横（南）からは密着して土師器C－922坏が出土した。坏類については極めて良好な残存状況を示している。これらの土器の周辺からは割れ面のある礫が２点出土している。火熱などを受けた痕跡はない。

これら出土した土師器坏類は口縁部が直立または内弯する形態で、口縁部の内外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリが施される共通した特徴がある。各々の詳細な特徴を見ると土師器C－920坏（第26図１）は、口縁部がやや屈曲しながら直立気味となり、内面にヘラミガキが施されている。土師器C－921坏（第26図２）は口縁部がやや外側に屈曲し、内外面ともヘラミガキが施され、両面黒色処理された可能性がある。土師器C－925坏（第26図６）は口縁部が内弯気味となり、内面にヘラミガキが施されている。土師器C－927坏（第26図８）は、伴に出土した坏類では最も大型である。入れ子状に重ねられた４点（C－921、920、925、927）のうち最下部に位置してい



65　SI2084遺物出土状況

66　SI2084全景



遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
SI2084①				
	1	10YR3/1　黒褐色	粘　土	黄橙色粘土をブロック状に含む
	2	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘　土	黄橙色粘土を少量含む
	3	10YR7/3　にぶい黄橙色	粘　土	
	4	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘　土	
	5	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を含む
Pit 3	1	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘　土	黄橙色粘土を斑点状態に含む
SI2084②				
	1	7.5YR2/2　黒褐色	粘　土	焼土・炭化物を含む
	2	10YR1.7/1　黒褐色	粘　土	炭化物が中心で褐色土を含む
	3	10YR4/4　褐色	粘　土	

第25図　SI2084竪穴住居跡平・断面図（1/60）

図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点 出土遺構	出土地点 層位	法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	C－920	土師器	坏	SI2084	床面	器高5.1 口径14.5～14.9 体部径15.2～15.6	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ 体部ヘラミガキ		84
2	C－921	土師器	坏	SI2084	床面	器高5.75 口径14.9	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ 体部ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラミガキ	内外面とも黒色処理	85
3	C－922	土師器	坏	SI2084	床面	器高5.2 口径7.15～7.6 体部径15.3	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ 体部ヘラナデ→ヘラミガキ		86
4	C－923	土師器	坏	SI2084	床面	器高5.3 口径14.0～14.8 体部径14.7～15.6	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ナデ→ヘラミガキ	内面黒色処理	87
5	C－924	土師器	坏	SI2084	床面	器高4.8 口径14.4	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部ヨコナデ 体部ミガキ	内面再酸化の可能性	88
6	C－925	土師器	坏	SI2084	床面	器高5.05 口径14.6 体部径14.75	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ→ミガキ・ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→ミガキ 体部ヨコナデ→ミガキ・ミガキ		89
7	C－933	土師器	埦	SI2084	床面	器高7.9 口径18.7	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ 体部ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ 体部ヘラミガキ	内外面とも黒色処理	91
8	C－927	土師器	坏	SI2084	床面	器高6.7 口径19.0～19.6 体部径19.4	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ 体部ナデ→ヘラミガキ		90
9	C－917	土師器	甑	SI2084	床面	口径24.6 残存高23	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ナデ		93
10	C－918	土師器	甕	SI2084	床面	器高27 口径16.5～17.8 底径6.4	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→ヘラナデ 体部ヘラナデ→指ナデ		92
11	C－938	土師器	坏	SI2084	2	口径14.9 残存高4.5	口縁部ヘラナデ→ミガキ 体部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部ヘラナデ→ミガキ 体部ミガキ	内外面共漆仕上げ	94
12	C－928	土師器	坏	SI2084	1土	口径14.5 残存高2.5	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ヨコナデ		

第26図　SI2084竪穴住居跡出土遺物

た。土師器Ｃ－923坏（第26図４）は最も口縁部が内弯しているもので、内面は黒色処理されている。土師器Ｃ－922坏（第26図３）は、口縁部がやや直線的に内傾するもので、内面の口縁部と体部の境に稜を有するものである。土師器Ｃ－924坏（第26図５）は、他の坏に比べ短い口縁部で直立気味となり内面黒色処理されている。土師器Ｃ－933埦（第26図７）は器面調整では他の坏とほぼ同じ特徴を有し、両面黒色処理されている。Ｃ－921、923坏に比べると発色が薄くやや粗いものである。

この他に土師器Ｃ－917甑（第26図９）は口縁部の内外面にヨコナデが施され、体部外面がヘラケズリされたものである。土師器Ｃ－918甕（第26図10）は、長胴型で最大径が体部中央にあるものである。

堆積土中よりは口縁部の内外面がヨコナデされ、体部外面がヘラケズリされた土師器Ｃ－928坏（第26図12）や、器面の特徴からＣ－928坏と同一個体の可能性のある土師器Ｃ－930坏（写真95）が出土している。また内外面が漆仕上げされたとみられる土師器Ｃ－938坏（第26図11）や形態的特徴がよく似た土師器Ｃ－936坏（第28図３）などが出土している。

SA2035材木列、SK2078土坑に切られている。

SK2077土坑　東西85cm、南北55cmの土坑で、深さは10cm程である。壁は北側では直線的に立ち上がり、南側では緩やかに立ち上がる。底面はおおむね平坦である。堆積土は１層である。

遺物は土師器の小片が少量出土している。

SA616材木列を切っている。

SK2078土坑　長軸95cm、短軸45cmの長方形の土坑で、深さは15cm程である。壁は直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。堆積土は１層である。遺物は出土していない。

SA2035材木列、SI2084竪穴住居跡を切っている。

SK2079土坑　東西85cm、南北110cmの不整形の土坑で、深さは75cm程である。壁は直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。底面より柱痕跡が検出されたことから柱穴となる可能性がある。堆積土は４層である。

遺物は土師器、須恵器の小片が少量出土している。

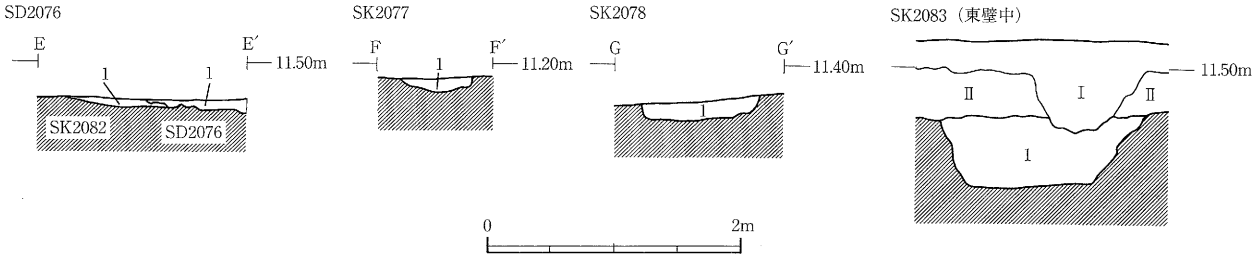
SK2081土坑　東西95cm、南北125cmの不整形の土坑で、深さは35cm程である。壁は直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。底面より柱痕跡が検出されたことから柱穴となる可能性がある。堆積土は１層である。

遺物は土師器甕片の他に土師器、須恵器の小片が少量出土している。

SD2076溝跡に切られる。SK2083土坑との重複は確認されなかった。

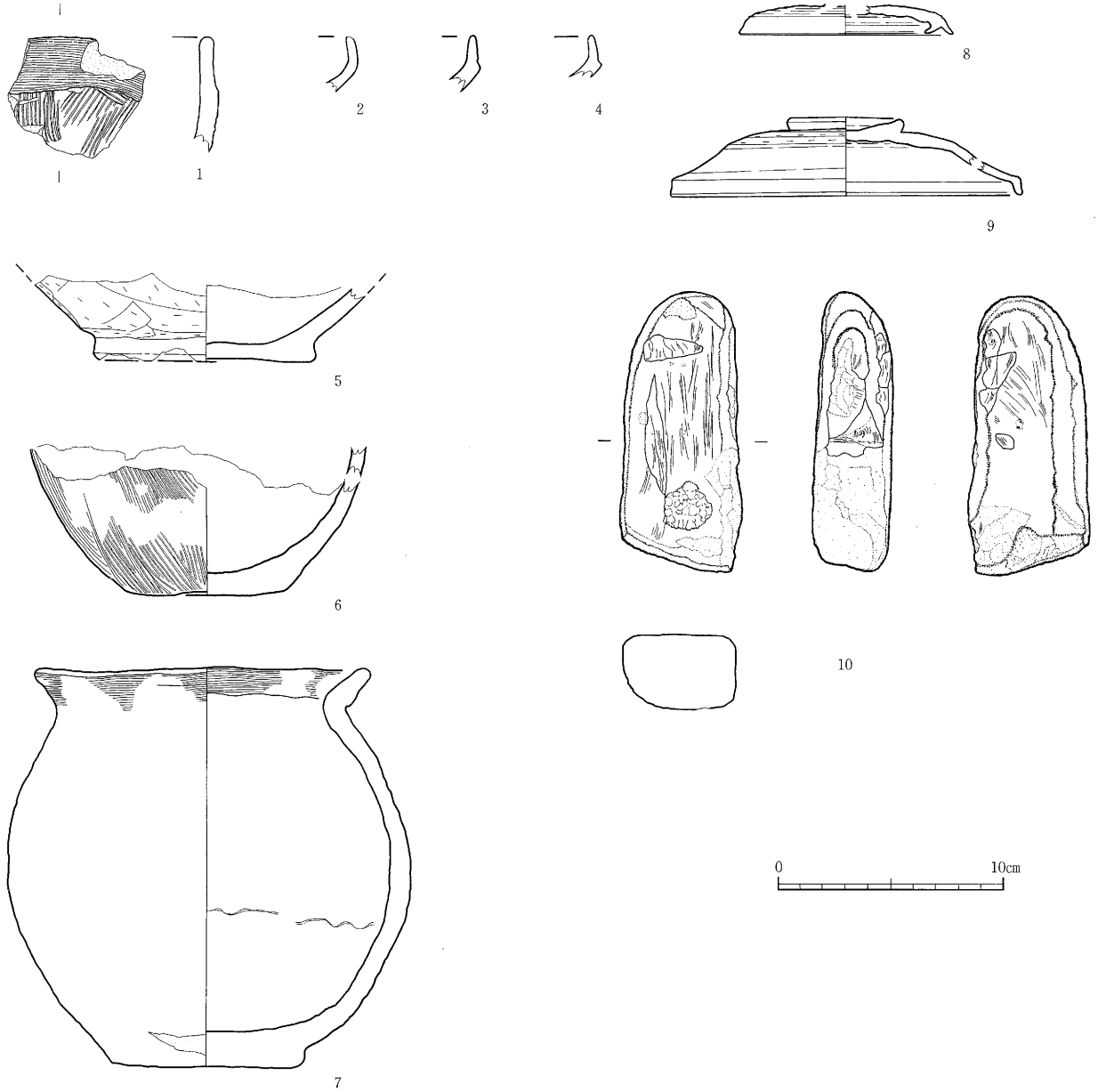
SK2082土坑　東西90cm、南北100cmの方形の土坑で、深さは40cm程である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はおおむね平坦である。堆積土は１層である。

遺物は土師器の小片が少量出土している。



遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
E－E′				
SD2076	1	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	
SK2082	1	10YR6/3　にぶい黄橙色	粘　土	
F－F′				
SK2077	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	
G－G′				
SK2078	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	褐色土を細かいブロックで含む
東壁中				
SK2083	1	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	基本層位Ⅱ、Ⅲ層をブロック状に含む

第27図　第148次遺構断面図（1/60）



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整	内面調整	備考	写真図版
				出土遺構	層位					
1	C－931	土師器	不明	SB2040 S1E1	掘り方	口径（15.8）器高5.4	口縁部ヨコナデ 体部ミガキ、ハケメ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ、ヘラミガキ	内外面黒色処理	102
2	C－929	土師器	坏	SA2030	1		口縁部ナデ	口縁部ミガキ		
3	C－936	土師器	坏	SI2084	2	残存高（2.6）	口縁部ヨコナデ 体部ケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ミガキ		101b
4	C－937	土師器	坏	SB2040 S2E2	柱抜取穴	残存高（2）	口縁部ヨコナデ 体部ケズリ	口縁部ヨコナデ	外面黒色（うるし？）	101a
5	C－926	土師器	甕	表土		底径9.6	体部ヘラケズリ、ナデ 底部ヘラケズリ	ヘラナデ		99
6	C－919	土師器	甕	SK2083		残存高（6.6）底径7	ハケ目		摩滅	100
7	C－932	土師器	甕	Ⅱ層		口径15 器高17.8 底径8.4	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	摩滅	97
8	E－472	須恵器	蓋	SD2076		口径9.4 器高1.8	ロクロナデ	ロクロナデ		96
9	E－471	須恵器	蓋	Ⅱ層		口径（15.6）器高4.5	回転ヘラケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ		98
10	K－254	石製品	不明	SA616	掘り方	最大幅5 最大厚3.4			搾痕敲打痕あり	103

第28図　第148次調査区出土遺物

SD2076溝跡に切られている。

SK2083土坑　調査区東壁ぎわで発見された土坑で、東西90cm以上、南北155cm、深さは55cm程である。壁は直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。堆積土は１層である。

遺物は体部から底部にかけて全面にハケメ調整された土師器Ｃ－919甕（第28図６）、土師器の小片、割れた礫が少量出土している。

SD2076溝跡に切られている。SK2081土坑との重複は確認されなかった。

SK2096土坑　調査区北壁ぎわで発見された土坑である。東西110cm、南北100cm以上である。遺物は出土していない。

SB2040掘立柱建物跡を切り、SA616材木列に切られている。

SK2097土坑　調査区北西隅で発見された土坑である。詳細については不明である。

SA2030材木列、SX2098性格不明遺構、ピット５を切る。

SX2094性格不明遺構　調査区の南西隅で発見した遺構である。詳細については不明である。

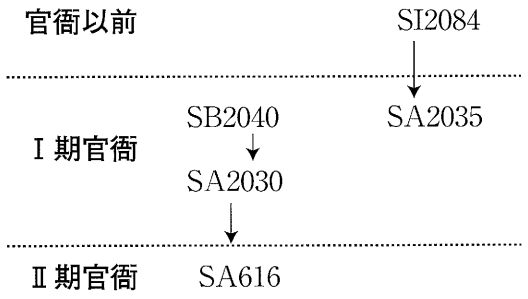
SX2098性格不明遺構　調査区北壁ぎわで発見された遺構である。詳細については不明である。

SA616材木列、SB2040掘立柱建物跡、SA2035材木列、SK2097土坑に切られている。

その他に表土中より土師器Ｃ－926甕（第28図５）、第Ⅱ層より体部が球形の土師器Ｃ－932甕（第28図７）、リング状のつまみで天井部にふくらみをもつ須恵器Ｅ－471蓋（第28図９）などが出土している。

３．まとめ

今回の調査ではほぼ推定した位置より方四町Ⅱ期官衙北辺材木列が検出された。さらにⅠ期官衙の材木列や官衙以前にさかのぼる竪穴住居跡も発見されている。今回発見された主な遺構の重複関係を整理すれば次のとおりである。



SA616材木列は方四町Ⅱ期官衙外郭北辺となる材木列である。材木列の掘り方は南側では深さ40cm程で一度平坦になってから直立気味に掘り込まれ、北側ではろうと状に傾斜を保ちながら深さ90cm程で直立気味となっている。材は掘り方南壁に密着して据えられており、南壁下部では材を充填した際に材先端により抉られたと見られる箇所がある。掘り方北側の形状と合わせて考えると、材は北側から充填され立てられたものと考えられる。材底面は平坦に加工されている。材は腐食しており、上部が空洞化して木質部は残存していなかったが、遺構検出面からは長さが約190cmの材痕跡が確認された。秋田県仙北町に所在する払田柵跡の調査成果では「材木塀の材木は全長4.6mあり、地下部分が１m、地上高は3.6mである。」と報告されている（註１）。地下に埋設されていた部分の深さからは、郡山遺跡の方四町Ⅱ期官衙に伴う材木列も地上では同等かそれ以上の高さを持った塀であった可能性が考えられる。

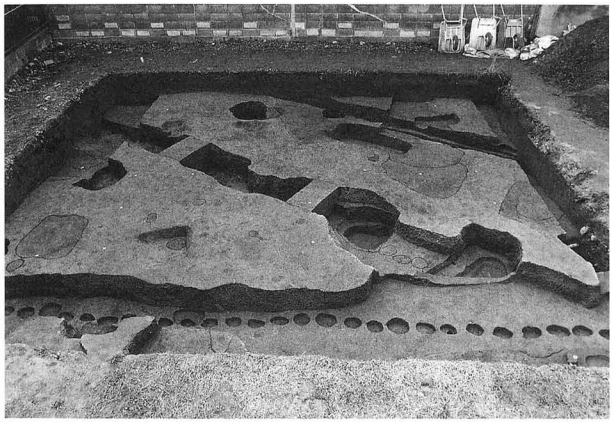
今回の調査区の位置から方四町Ⅱ期官衙の北門跡が発見されることも予想されていた。しかし材木列に伴うⅡ期官衙の柱穴等は発見されなかった。ただし調査区の東端で材木列の掘り方が広がりを見せ、特に南側ではやや方形気味に角張る形状を示している。このような形状は、昭和56年度の第16次調査における方四町Ⅱ期官衙西辺の材木列に取り付くSB134掘立柱建物跡でも検出されている（註２）。SB134掘立柱建物跡は、SA138材木列を跨ぐように２間×２間かそれ以上の総柱建物跡と見られ、西辺に取り付く櫓状建物跡と考えられている。SA138材木列の掘り

方がSB134建物跡の棟通りを兼ねる部分では掘り方が広がり一部角張り方形気味になっている。このような材木列掘り方の形状の変化から今回の調査区の東隣接地にも材木列を跨ぐような柱穴があり、櫓状建物跡や門跡となる遺構が存在することが充分考えられる。

方四町Ⅱ期官衙の材木列に先行するⅠ期官衙の材木列が約３ｍ離れ、並行して調査区を横断している。このような規模、形状の材木列が平行して発見されている例は、昭和59年度の第48次調査区のSA577、578材木列と平成４年度の第96次調査区のSA272、1380材木列（註３）でⅠ期官衙東辺と南辺においてである。よってある時期に今回の調査区で発見されたSA2030とSA2035材木列がⅠ期官衙の北辺になっていたと見ることも可能である。しかし、SA2030材木列に先行するSB2040建物跡との関係に注目したい。SB2040建物跡は総柱建物跡で柱穴の規模等からはⅠ期官衙の中枢部分の周辺で発見されている倉庫建物跡と同様の遺構と見ることができる。この建物跡はSA2035材木列とは重複がなく約170㎝離れて平行している。必ずしも同時存在したとは断定できないが、SB2040掘立柱建物跡の柱穴抜き取り穴がSA2035材木列と重複していないことから、SB2040掘立柱建物跡の南外側をSA2035材木列が区画していたと解釈することができる。

この建物を切るSA2030材木列は抜き取りが深く、材痕跡がほとんど残っていない。このことは建物を遮蔽したと推定したSA2035材木列が一部抜き取りは見られるが材痕跡が残っているものと大きな違いである。これは後に方四町Ⅱ期官衙北辺となるSA616材木列の構築に伴いSA2030材木列が徹底して抜かれていることを示しているのではなかろうか。よってSB2040・SA2035→（抜き取り）→SA2030→（抜き取り）→SA616の変遷を想定しておくことにする。そうであるならばSA2035は内部区画であり、SA2030の時期については周辺の様相が明らかにできないのでⅠ期官衙北辺となるかについては今のところ速断することをさけたい。いずれにしても今回の調査によりⅠ期官衙の遺構はこれまで確認されていた建物跡や材木列の地点より北へ50ｍ程広がったことになる。Ⅰ期官衙の南辺と東辺は直行せず、角度が鈍角となるため今回のⅠ期官衙材木列と南辺との距離を計測するのが難しいが、Ⅰ期官衙の南北はおおむね600ｍ程の広がりを有することになる（註４）。この調査区より北部においては住宅の密集地となっているためⅠ期官衙の広がりをさらに確認することは困難であるが、今後小規模な調査を積み重ね、検討を加えていくことにする。

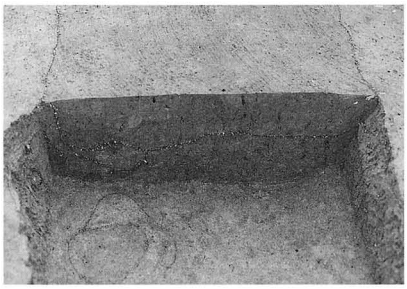
SA2035材木列に切られるSI2084竪穴住居跡からは土師器坏７点、埦１点、甑１点、甕１点が床面やカマド周辺から出土し同時期に使われていたものと考えられる。特に坏類はきわめて良好な残存状況であった。Ⅰ期官衙以前の土師器類がこれほどまとまって出土するのは稀である。特に坏類の形態が東北地方の土師器編年で古墳時代後半の標識土器とされる「栗囲式」の土師器坏とはまったく異なっている。体部中に段や稜がなく口縁部が内弯あるいは直立気味になるものがほとんどで、口縁部内外面にはヨコナデ調整され、内面黒色処理されないものが含まれている。このような特徴は関東地方の古墳時代の土師器の「鬼高式」と呼ばれるものに共通する特徴をもつものである。これについては近年仙台平野の各所から出土が報告され（註５）、６世紀後半から７世紀中葉の年代観が示されている（註６）。これらは須恵器坏模倣形態とも言われ、本遺跡でも昭和57年度の第24次調査においてⅠ期官衙より遡る竪穴住居跡（SI260・290・301）から同様の土師器坏類が出土している。SI2084竪穴住居跡から出土した土師器坏類と比較してみると、今回出土したものは口縁部の屈曲に鋭さがなくなり、丸みをもっている。このような形態の差を時間的な経過による形態変化とするか、移民などにより持ち込まれた関東地方の地域差によるものなのかについては、今の段階では明らかにするのは難しい。ただ黒色処理の技術が導入されていることからは東北地方の土師器製作から影響を受けていることは間違いないであろう。これらをさらに検討するためには関東地方の土師器と在地の土師器の共伴関係における形態や調整の変化、さらに関東地方の地域の変化による土師器の違いをより詳細に吟味していく必要があると思われる。



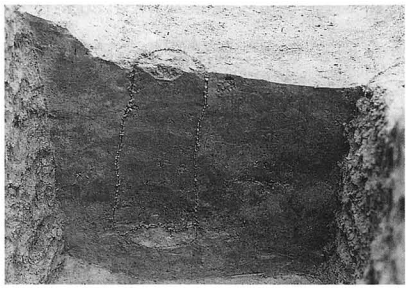
67　第148次調査区全景（北より）

68　第148次調査区全景（西より）

69　SA616断面



70　SA2030断面

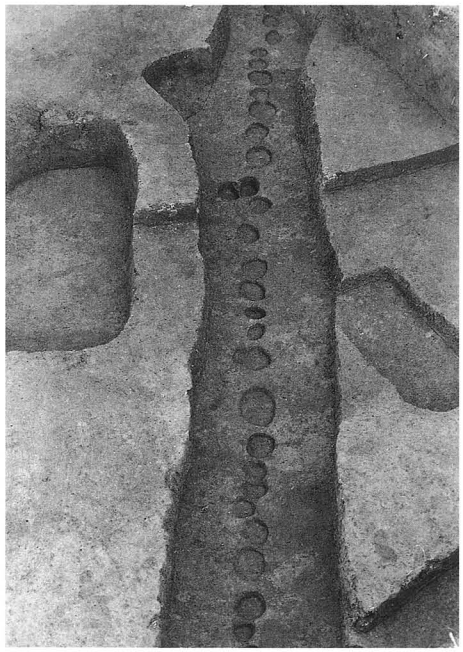


71　SA2035断面

72　SB2040S2E2柱穴

73　SB2040S1E2柱穴

74　SB2040S1E1柱穴



75　SA2035全景（西より）

76　SI2084全景（西より）

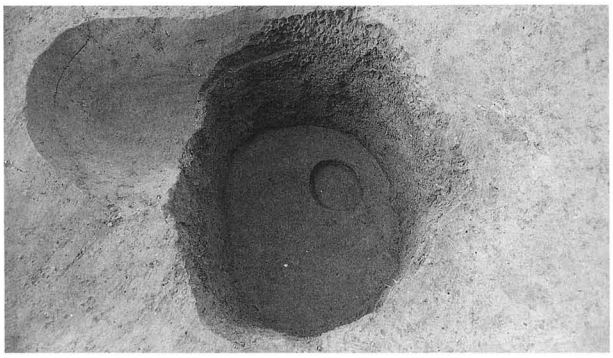
77　SI2084遺物出土状況（西より）

78　SI2084カマド断面（北より）

79　SI2084遺物出土状況（南より）

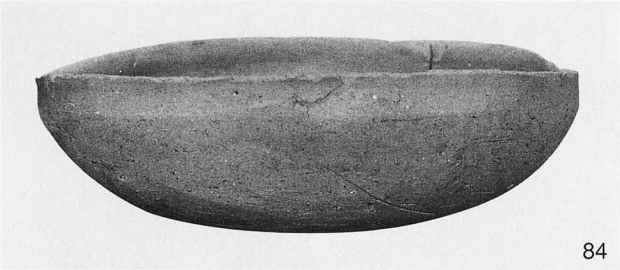
80　SI2084遺物出土状況（C-933）

81　SI2084遺物出土状況（C-918）



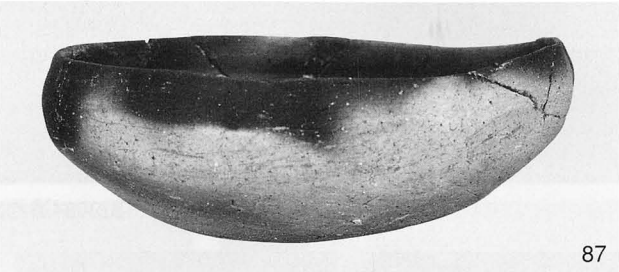
82　SK2079土坑（南より）

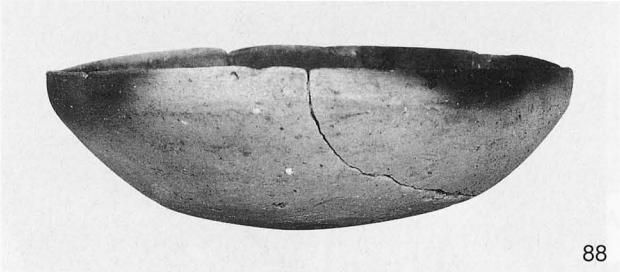
83　第148次調査区遺物出土状況（C-932甕、E-471蓋）


84

85

86


87


88

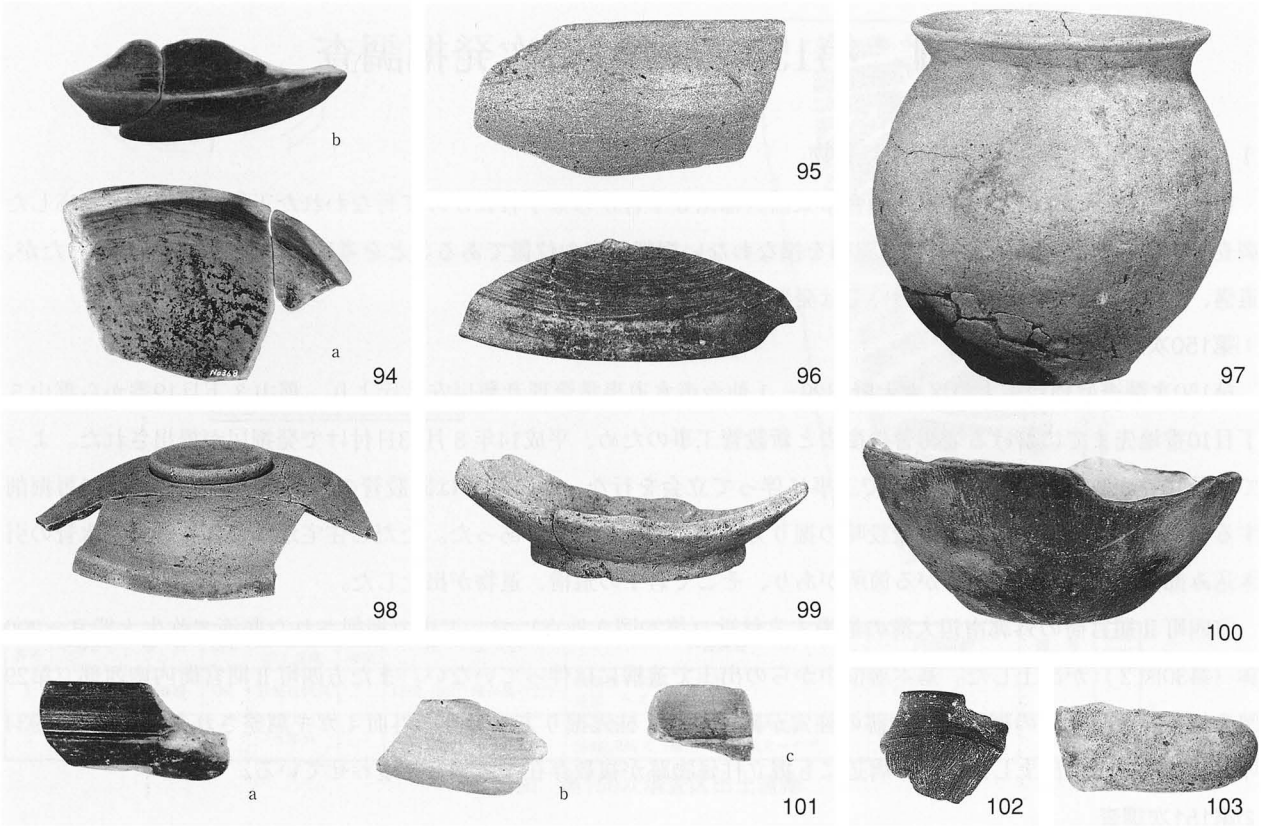
89

90

91

92

93



84	C－920	坏	SI2084床面
85	C－921	坏	SI2084床面
86	C－922	坏	SI2084床面
87	C－923	坏	SI2084床面
88	C－924	坏	SI2084床面
89	C－925	坏	SI2084床面
90	C－927	坏	SI2084床面
91	C－933	鉢	SI2084床面
92	C－918	甕	SI2084床面
93	C－917	甑	SI2084床面
94a	C－938	坏（上面）	SA2030・2035
b	C－938	坏（側面）	SA2030・2035
95	C－930	坏	SI2084
96	E－472	蓋	SD2076ℓ1
97	C－932	甕	Ⅱ層
98	E－471	蓋	Ⅱ層
99	C－926	甕	表土
100	C－919	甕	SK2083
101a	C－937	坏	SB2040　S2E2抜き取り
b	C－936	坏	SI2084ℓ2
c	C－935	坏	SA2035
102	C－931	不明品	SB2040　S1E2
103	K－254	不明品	SA616

註１　秋田県埋蔵文化財調査報告書第289集「払田柵跡Ⅱ　－区画施設－」1999.3

註２　「Ⅶ　第16次発掘調査」　仙台市文化財調査報告書第38集『郡山遺跡Ⅱ　－昭和56年度発掘調査概報－』1982.3

註３　「Ⅷ　第48次発掘調査」　仙台市文化財調査報告書第74集『郡山遺跡Ⅴ　－昭和59年度発掘調査概報－』1985.3

「Ⅳ　第96次発掘調査」　仙台市文化財調査報告書第109集『郡山遺跡ⅩⅢ　－平成４年度発掘調査概報－』1993.3

註４　南辺から東辺付近で約605m、西辺付近では約620m北へ広がっている。

註５　村田晃一「７世紀集落研究の視点(1)－宮城県山王遺跡・市川橋遺跡を中心として－」『宮城考古学　第４号』2002.5

註６　註５に同じ　P66　註３

Ⅶ　第150次・第151次発掘調査

１．調査経過と発見遺構・出土遺物

第150次調査と第151次調査は、仙台市太白区郡山３丁目から６丁目にかけて行なわれた工事に関連して対応した調査である。両工事とも基本的には遺構を損なわない掘削深度や位置であることを考慮した立会調査で対応したが、遺構、遺物が発見された箇所においては発掘調査を実施した。

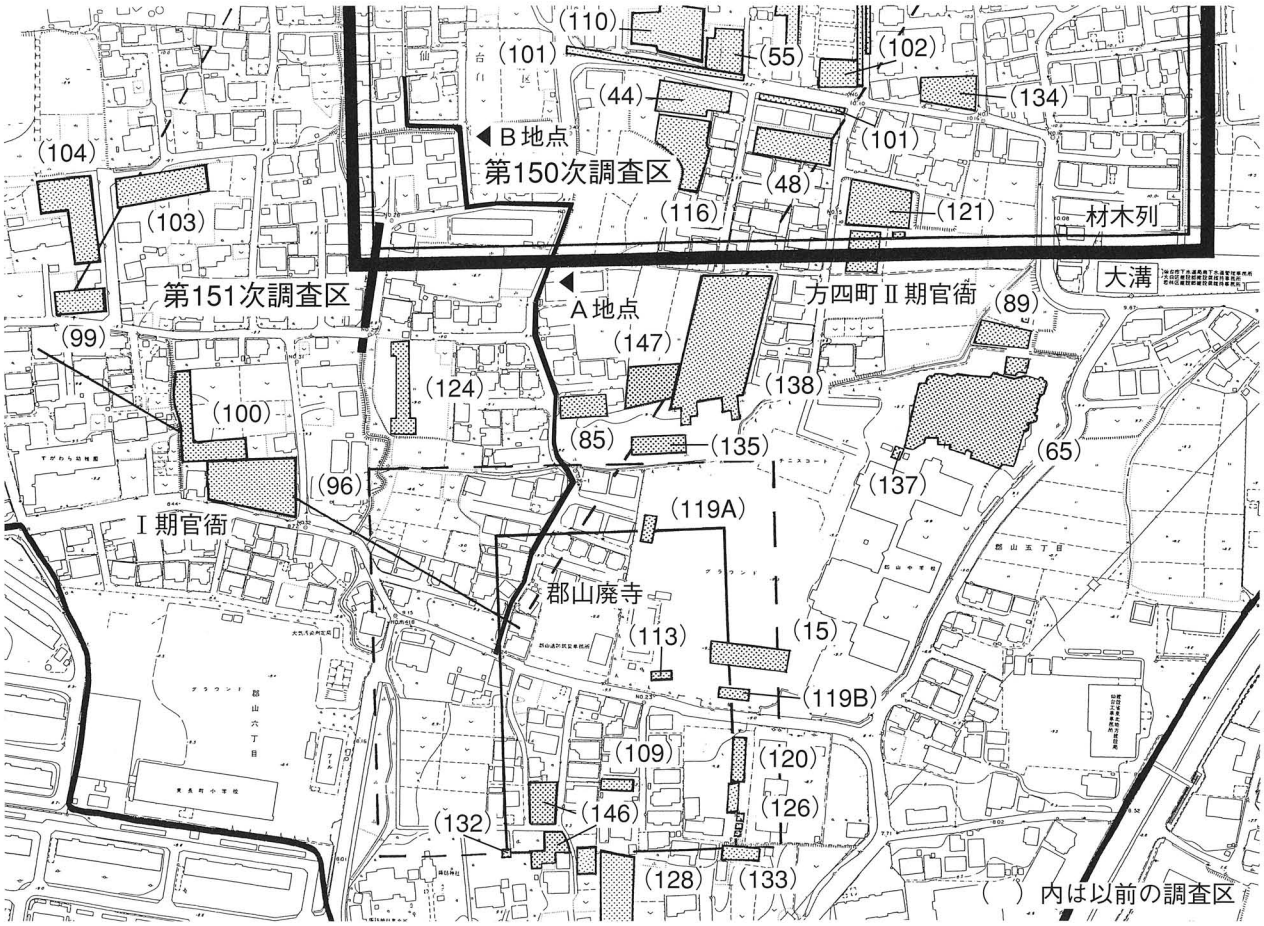
⑴第150次調査

第150次調査は仙台市太白区南大野田29－１仙台市水道事業管理者瀬川安弘氏より、郡山３丁目19番から郡山５丁目10番地先までにおける老朽管の撤去と新設管工事のため、平成14年８月23日付けで発掘届が提出された。よって９月10日から11月13日までの間で工事に伴って立会を行なった。工事は既設管の掘削範囲を深さ0.8mで再掘削するもので、ほとんどが既設管埋設時の掘り方の中に納まるものであった。ただし住宅地へのガス管や下水管の引き込み部分では掘削深度が下がる箇所があり、そこで若干の遺構、遺物が出土した。

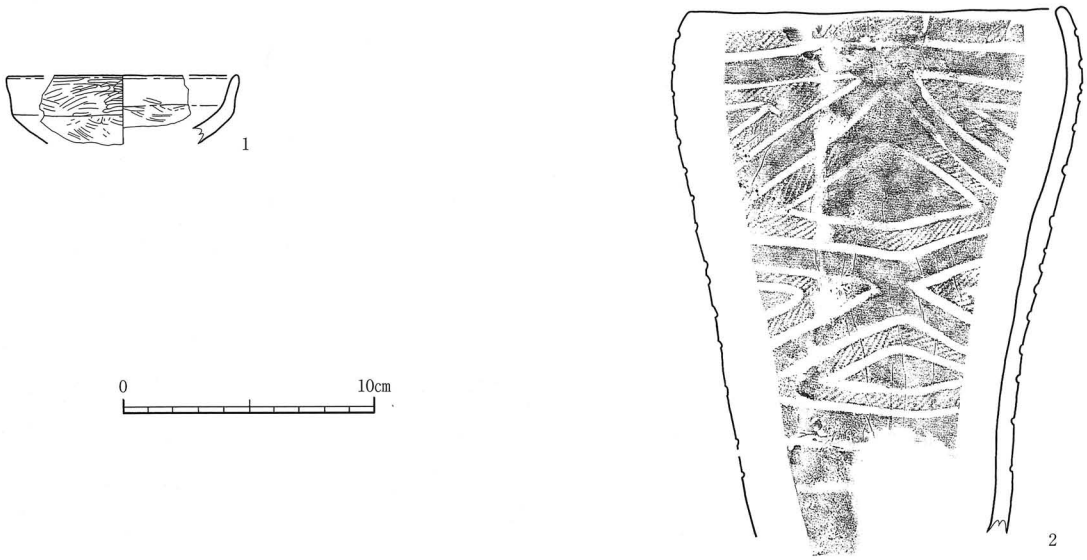
方四町Ⅱ期官衙の外郭南辺大溝の通過する付近（第29図Ａ地点）で、工事で掘削された底面で弥生土器Ｂ－290鉢（第30図２）が出土した。基本層位中からの出土で遺構には伴っていない。また方四町Ⅱ期官衙内南西部（第29図Ｂ地点）では複数の掘立柱建物跡の柱穴が観察され、柱穴掘り方中より内外面ミガキ調整された土師器Ｃ－934坏（第30図１）が出土した。この周辺にも掘立柱建物跡が複数存在することを窺わせている。

⑵第151次調査

第151次調査は仙台市太白区長町南三丁目１－15仙台市太白区長菅野昭夫氏より、郡山２丁目11－16から郡山６



第29図　第150次・第151次調査区位置図



図版番号	登録番号	種　別	器形	出土地点		法　　量（cm）	外面調整	内面調整	備　考	写真図版
				出土遺構	層位					
1	C－934	土師器	坏	B地点柱穴		口径（9.2）残存高（2.7）	口縁部～体部　ミガキ 底部　ケズリ→ミガキ	ミガキ		
2	B－290	弥生土器	鉢	A地点		口径14.8　残存高20.9	口縁端部　LR縄文（横位）→沈線（横位） 体部LR縄文（横位）→沈線文→ナデ	ナデ		

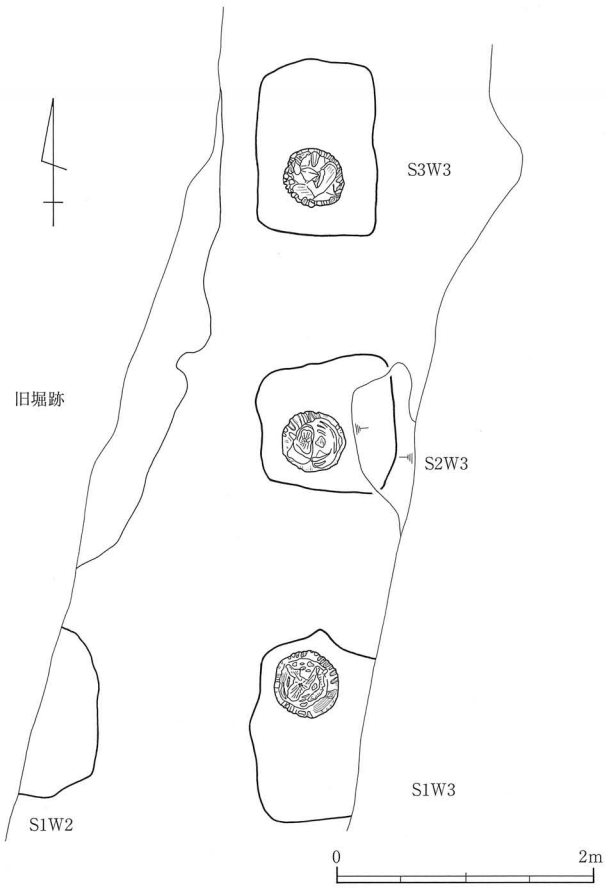
第30図　第150次調査区出土遺物

丁目226番地先までにおける農業用排水路（天王掘）改修工事に伴って対応したものである。現状は既に水路となっており古代の遺構を削平している。ただし昭和55年度の第７次調査において当時の水路底面で、方四町Ⅱ期官衙南西コーナーとなる櫓状建物跡と西辺材木列が発見されている。その後周辺の宅地化が進み住宅地における排水路の整備が求められるようになり、今回水路の現況より35cm～51cm程掘削を伴う改修工事が必要となった。工事に伴って立会を行ない、櫓状建物跡の一部が発見された箇所で平成15年３月３日から３月５日まで発掘調査を実施した。なお遺構が損なわれないよう工法の変更について協議し、施工後も保護されることになった。

方四町Ⅱ期官衙外郭南西コーナーとなるSB51櫓状建物跡は２間×２間の総柱建物跡と推定されている。第７次調査において西から２列目までの柱穴を検出し、S3W2柱穴の掘り方が北へ延びSA65西辺材木列（註１）となっていた。今回これらの遺構の存在が想定された箇所は、宅地への出入口となっているコンクリート製の橋の直下である。橋の撤去後に直径50～55cmの柱材の上部と一辺90～135cmの掘り方を検出した。柱間寸法は200～210cmである。検出した柱穴の形状とSA65西辺材木列が取り付いていないことから、昭和55年に検出した櫓状建物跡の柱ではなく、さらに１列東側の西３列目の柱列を検出したものと考えられる。周辺が宅地化した際にやや蛇行していた水路を東寄りに付け直したため、水路の位置が微妙に東へ移動したものと見られる。

なお、このSB51櫓状建物跡については、規模や形態について「Ⅷ総括（２）」で改めて検討する。

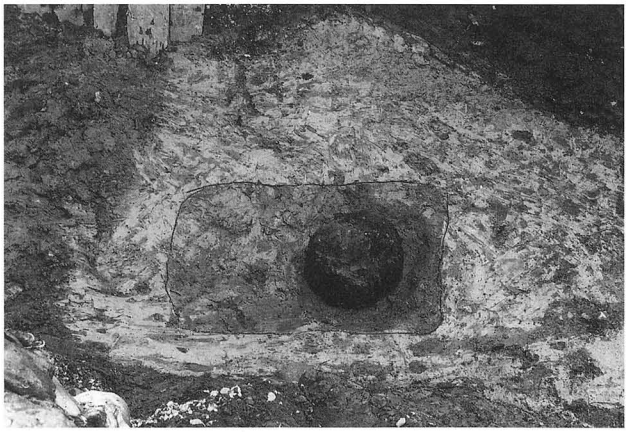
註１　「Ⅶ２.⑵　第７次調査区」P21・22　仙台市文化財調査報告書第29集『郡山遺跡Ⅰ－昭和55年度発掘調査概報－』1981.3



第31図　第151次調査区平面図（1/60）

104　SB51西３柱列（南より）

106　SB51　S2W3柱穴（東より）



105　SB51　S3W3柱穴（西より）

Ⅷ 総　　括

今年度の調査は第５次５ヵ年計画の第３年次目にあたり郡山廃寺南部と南方官衙西地区の調査などを行った。郡山廃寺南部では廻廊や築地などで金堂や塔を囲む寺院内でも最も重要な地区の南端が含まれると考えられた地点である。南方官衙西地区はⅠ期官衙東辺とも重複しておりⅠ期官衙、Ⅱ期官衙双方の視点から重要な地点である。また、個人住宅の建替えのうち、基礎構造が深く遺構を損なうような住宅建築については「仙台平野の遺跡群」として２件の小規模な調査を実施した。

（１）郡山廃寺の調査

第146次調査では想定した位置からは金堂（区画溝跡）や塔（推定）を区画するような遺構は発見することができなかった。これはこの地点が元々空閑地となっているのか、または築地など地表に盛り上げられた遺構が完全に削平されて失われているのかということである。今回の調査では創建期ではないが東西棟のSB2025掘立柱建物跡が発見されていることから、この地点には寺院内の重要な部分を区画する遺構は通過していないと見ておくべきであろう。寺院南辺となるSA1850材木列から北へ35mまで調査区を連続して設定して調査したので、その間に新たな区画施設がない以上さらに北側に存在するものと見ておく。住宅地内での調査であるため制約が多く、これ以外の地点での追加した調査は難しい状況にある。

SB2025掘立柱建物跡は郡山廃寺の創建期の建物ではないと考えられた。昭和61年度の第63次調査で講堂基壇の北側から掘り方や柱痕跡の規模が同じ様な掘立柱建物跡が数棟存在しており、Ⅱ期官衙と並行する郡山廃寺の時期の中で３期の変遷を考えた。これらの遺構についても配置や重複関係から創建期まで遡らない建物跡も含まれているということである。それらと同じく今回発見されたSB2025掘立柱建物跡も創建期に遡らない遺構であるということである。そこで問題になるのがその下限の年代である。

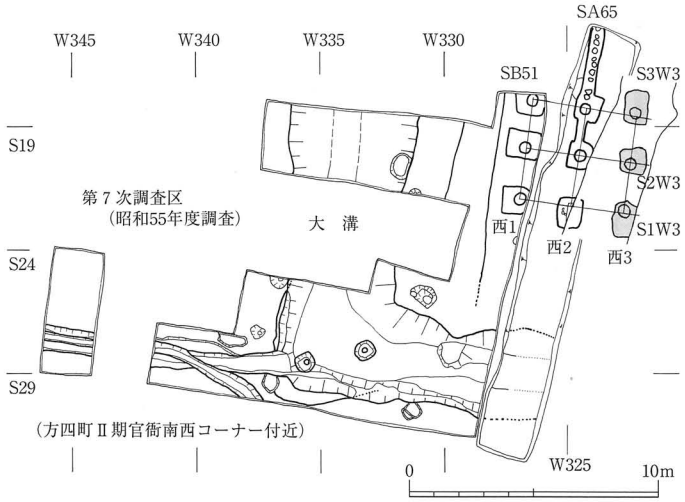
これまで郡山廃寺はⅡ期官衙が廃絶する時期と時を同じくして廃絶していると考えてきたが、今回の調査成果からは多賀城廃寺が創建される時期以降も存続している可能性が出てきた。Ⅱ期官衙が多賀城以前の初期陸奥国府（衙）と考えられている（註１）ことから、郡山廃寺も多賀城廃寺の前身の国府の寺として機能していたとすると、陸奥国が管轄する寺院が多賀城と郡山と両方に存在していた時期があると考えられるのではないだろうか。

畿内では藤原京から平城京への移転に伴い飛鳥に存在した官営寺院もまもなく飛鳥から奈良に移転する。しかしなお飛鳥の地においても寺院として存続している。元興寺が建立されたのちも飛鳥寺の伽藍はそのまま残されており、双方を一つの寺院として扱われている。薬師寺についても寺院が移転した後の８世紀代にも元薬師寺がなお存続している可能性が指摘されている。

（２）Ⅱ期官衙の調査

第147次調査の南方官衙地区の調査では昨年度の第138次調査で発見されたようなSB2010・2015掘立柱建物跡などのような大規模な廂付建物はないようである。また、第148次調査では方四町Ⅱ期官衙の北辺（材木列）を推定位置で検出し、南辺などと同じ構造になっていることを確認した。

第151次調査では、方四町Ⅱ期官衙南西コーナーの櫓状建物跡の一部を発見した。これは昭和55年度の第７次調査で発見されていたSB51掘立柱建物跡で、これまで南北２間、東西２間（柱間寸法210cm等間）の総柱建物跡であると考えてきた遺構である（註２）。この建物跡の北側には方四町Ⅱ期官衙西辺材木列であるSA65材木列が柱穴掘り方に接続して北に延びている。南辺材木列との接続部分についても方四町Ⅱ期官衙南辺材木列であるSA33材木

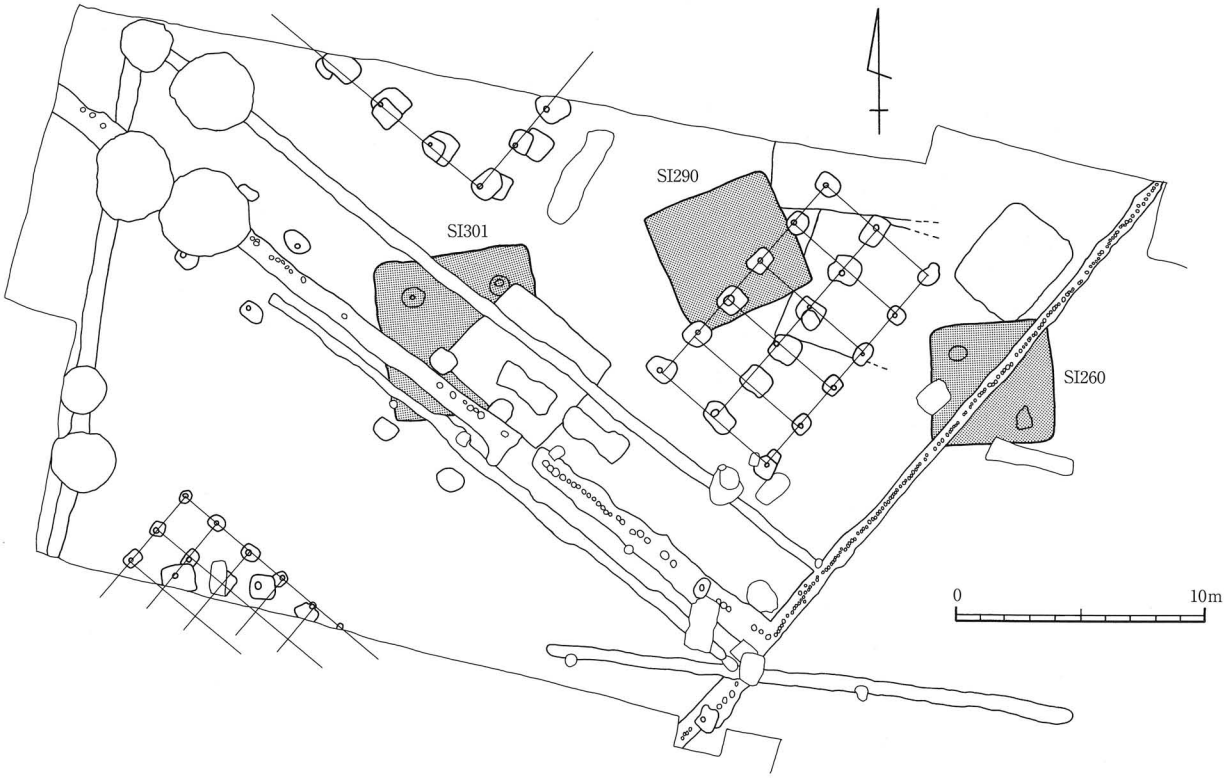


第32図　第７次・第151次調査区遺構配置図

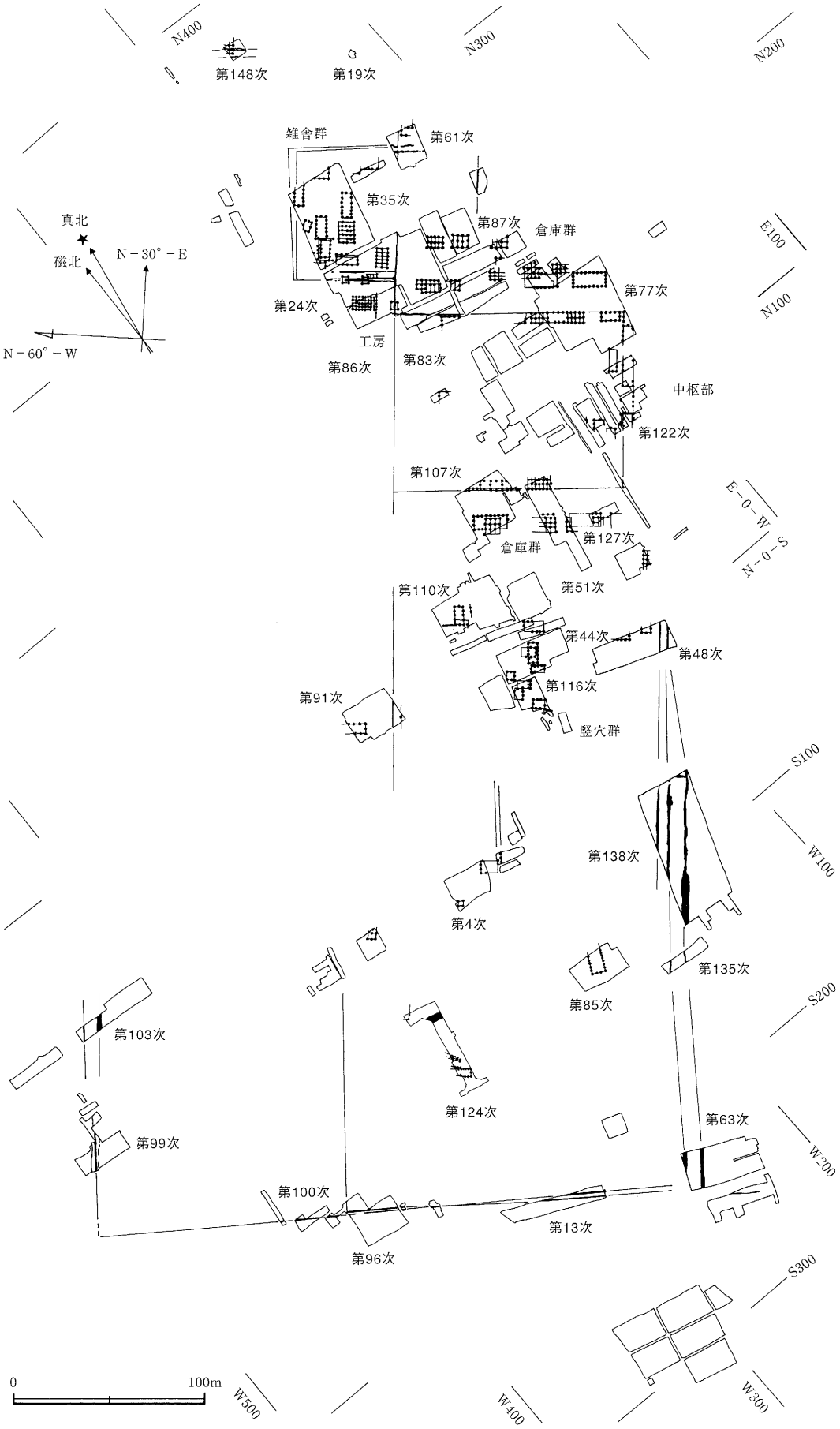
列の延長部がSB51掘立柱建物跡の東西中心線と一致することから接続部は同様である考えてきた。第151次調査では第７次調査の西に隣接した部分での調査であったため、これまで想定していた西３柱穴列が発見された。しかし西柱穴列中央の柱穴（S2W3）に接続すると考えていた方四町Ⅱ期官衙南辺材木列の掘り方は発見されなかった（写真106）。遺構が検出された標高からは材木列の掘り方が削平されているとは考えられない。よってSB51掘立柱建物跡の東側にはさらに建物が延びて柱穴列が存在していると考えられ、SB51掘立柱建物跡は南北２間、東西３間以上の規模を持つ可能性が高いのではないだろうか。柱穴が存在すると考えられる東側は既存道路が存在し今後調査することが難しい地点ではあるが、SB51の詳細については周辺での調査成果を待ってさらに検討していきたい。

（３）Ⅰ期官衙とそれ以前の遺構の調査

第148次調査においてⅠ期官衙関連の遺構とそれ以前の遺構が発見された。この地区では調査の制約が多く、さらにどのくらいⅠ期官衙が北へ延びるかは早急に確認することは難しいであろう。Ⅰ期官衙以前の竪穴住居跡は第24次調査で発見されていたが、それを含めても４例目である（第33図参照）。SI260竪穴住居跡やSI301竪穴住居跡から出土した口縁部が内面に傾き外部に稜線を形成するような形態の土師器坏は、本遺跡においては千葉県地方と



第33図　第24次調査区平面図から（1/300）



第34図　Ⅰ期官衙全体図

の土師器の比較（註３）から、関東地方の土師器編年で古墳時代後期に位置付けられている鬼高式後葉の土師器に類似性のあることを指摘していた（註４）。発見された昭和58年当時には仙台平野の中で他に発見例が乏しいことから、Ⅰ期官衙建設に何らかの関わりを持つ人々の住居跡に伴ったものであろうとしておいた。しかしその後に同様の形態のものが、南小泉遺跡や藤田新田遺跡、下飯田遺跡などで発見されている。これによりこのような形態のものが仙台平野内で複数存在することが確認されてきた。

そのような中でこれらの土器について長谷川厚氏は千葉県印旛沼周辺の土師器坏に酷似することを指摘した（註５）。また村田晃一氏は宮城県域内の７世紀後葉から８世紀代にかけての土師器の検討の中で、関東地方からの移民に伴った土師器の県内での分布などを論じ、関東地方の鬼高式の形態に類似したものを「須恵器坏模倣」として扱っている（註６）。また同氏は近年、７世紀の集落の在り方の検討の中で、仙台周辺から宮城県南部の沿岸部にかけて千葉県印旛沼周辺地域との間に交流圏が形成されているとの論考を提示するに至っている（註７）。

このように複数の地点から関東系土師器の出土が報告され、関東地方との交流が指摘されると単に拠点的な官衙の造営に伴っての人々の移住とだけは見れないと考える次第である。これらの出土した遺跡が仙台平野の中央から北部に及び、個体数も一箇所からまとまって出土している様子を見ると仙台平野への移住のような大規模な行動が行なわれて、その後官衙の造営に結びついたと考えられるのではないだろうか。

今回出土した土師器類も細部を検討していかなければならないが、上記のような官衙成立以前の状況下で遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。

註１　仙台市史編さん委員会『仙台市史　通史編２　古代中世』第２章「陸奥の国と仙台平野」（今泉隆雄）2000
今泉隆雄「多賀城の創建－郡山遺跡から多賀城へ－」『条里制・古代都市研究　通巻17号』2001　ほか

註２　「Ⅶ　２．⑵第７次調査区」　仙台市文化財調査報告書第29集『郡山遺跡Ⅰ　－昭和55年度発掘調査概報－』1981.3

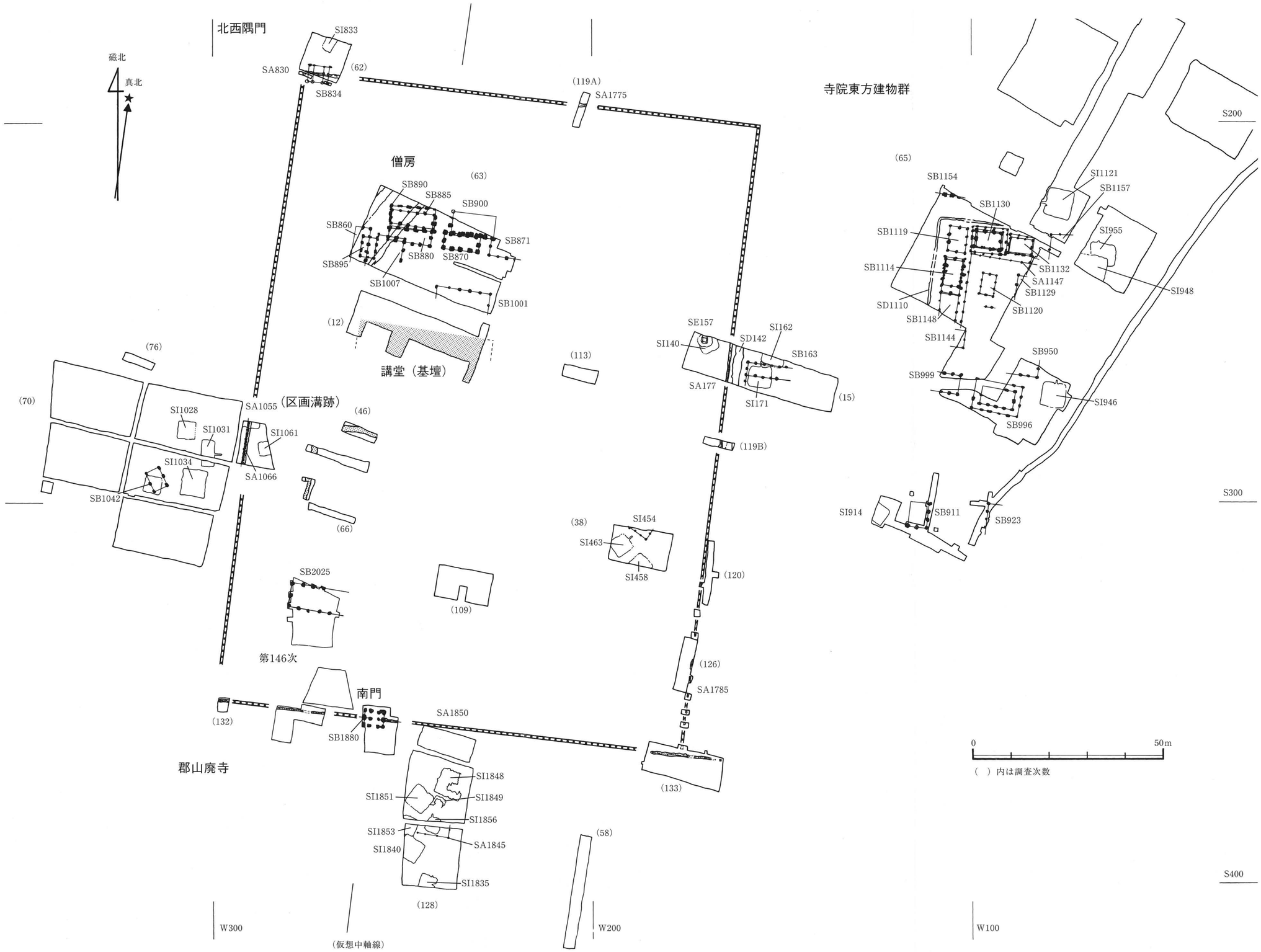
註３　昭和58年当事に千葉県印旛郡栄町向台遺跡、同大畑遺跡、佐倉市大崎台遺跡出土遺物と直接比較し、検討を行った。

註４　「Ⅲ　第35次発掘調査」P53、P74　仙台市文化財調査報告書第64集『郡山遺跡Ⅶ　－昭和58年度発掘調査概報－』1984.3

註５　長谷川厚「関東から東北へ－律令成立前後の関東地方と東北地方の関係について」
『21世紀の考古学』櫻井清彦先生古希記念論文集　雄山閣1993

註６　村田晃一「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺－移民の時代－」『宮城考古学　第２号』2000.5

註７　村田晃一「７世紀集落研究の視点⑴－宮城県山王遺跡・市川橋遺跡を中心として－」『宮城考古学　第４号』2002.5



第34図　遺跡南部遺構配置図（1/1000）

調査成果の普及と関連活動

1．広報・普及・協力活動

年　月　日	行　事　名　称	担当職員	主　　催
2002. 5．8	古代城柵を訪ねる旅	木村・長島・松本	横浜市歴史博物館
7．5	発掘現場・展示室・ピロティ見学	長島・松本	八本松小学校６年
8．6	発掘現場・展示室見学	松本	山田中学校２年社会科
9．10	発掘現場・展示室見学	長島・松本	郡山老人福祉センター
10．7	発掘現場・展示室・ピロティ見学	長島・松本	太白区まちづくり推進課
11．14	発掘体験・展示室見学	松本	南中山中学校１年総合学習
11．20	発掘現場・展示室見学	長島・松本	東長町小学校４年
11．20	展示室見学	長島	郡山中学校
12．12	展示室見学	松本	郡山小学校６年
12．21	宮城県遺跡調査成果発表会	松本	宮城県考古学会 多賀城市教育委員会
2003. 1．21	古代庭園研究会	長島	奈良文化財研究所
2．8～9	第29回古代城柵官衙遺跡検討会	長島・松本	古代城柵官衙遺跡検討会

2．調査指導委員会の開催

第32回　郡山遺跡調査指導委員会　平成15年３月18日　教育局第１会議室

○平成14年度の調査成果について

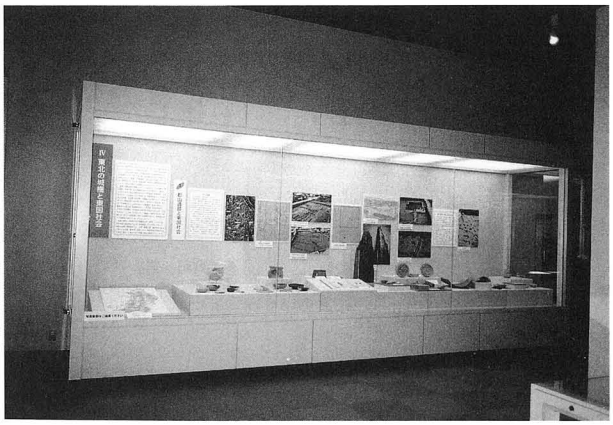
○平成15年度の調査計画について

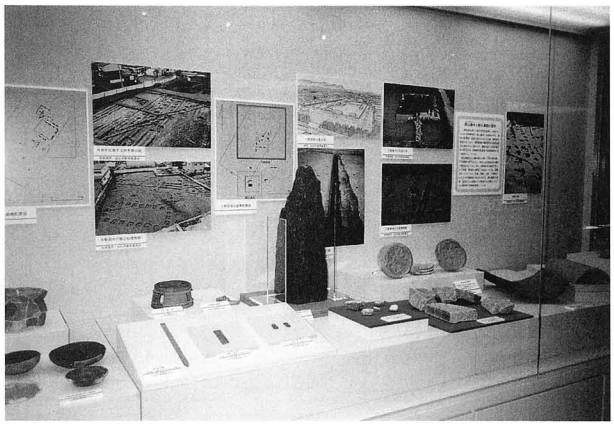
3．資料の貸し出し・展示

東北歴史博物館	常設展「古代」城柵とエミシ
仙台市博物館	常設展「原始・古代・中世」
横浜市歴史博物館	企画展「東へ西へ－律令国家を支えた古代東国の人々－」
宮城学院女子大学	博物館実習
鈴鹿市考古博物館	特別展「発掘された国府－東海道・東山道の国府を掘る」
水沢市埋蔵文化財調査センター	胆沢城造営1200年記念「胆沢城展」
富沢遺跡保存館	企画展「土の中からのメッセージ　発掘された仙台の遺跡７ －古代のみちのおく郡山遺跡－」

4．展示室の利用者

平成14年４月～平成15年３月　　364名





横浜歴史博物館　企画展「東へ西へ－律令国家を支えた古代東国の人々－」

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき
書名	郡山遺跡 23
副書名	平成14年度発掘調査概報
巻次	23
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第263集
編著者名	長島榮一、松本知彦
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980－8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1　TEL022-214-8893～8894
発行年月日	2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こおりやまいせき 郡山遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくこおりやま 太白区郡山三丁目他	04100	01003	38° 12′ 58″	140° 53′ 41″	20020522 ～20021213	1,082㎡	重要遺跡の範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡山遺跡	かんがあと 官衙跡 じいんあと 寺院跡	縄文 ～ 近世	掘立柱建物跡・材木列 溝跡・土坑	弥生土器 土師器・須恵器・瓦 土製品・石製品・金属品	方四町Ⅱ期官衙北辺材木列で検出面から深さ約190cmの材痕跡を確認

仙台市文化財調査報告書第263集

郡　山　遺　跡　23

— 平成14年度発掘調査概報 —

2003年3月

発　行　仙　台　市　教　育　委　員　会
仙台市青葉区国分町三丁目7－1
文化財課　022(214)8893

印　刷　株式会社　東　北　プ　リ　ン　ト
仙台市青葉区立町24－24
TEL 263－1166